

# ORIA

イマーシブオーディオインターフェイス  
& モニターコントローラー

## Manual V1.3

AUDIANT

# イマーシブミキシングの世界への入り口、 ORIAへようこそ。

DAWとスピーカーの間にシームレスに配置できるように設計されたORIAは、ハードウェアとソフトウェアの効率的な組み合わせにより、最大20chもの出力を制御するプラットフォームを提供します。

9.1.6イマーシブ、7.1サラウンドサウンド、ステレオ、さらにはモノラルでモニタリングしている場合でも、ORIAは、現代の多数のオーディオ規格を処理するのに十分な柔軟性と十分な仕様を備えています。

プロのユーザーを念頭に置いて設計され、業界をリードするパートナーであるDolby<sup>(TM)</sup>およびSonarworks<sup>(TM)</sup>と協力されたORIAのオンボードDSPを使用すると、スピーカーをあなたの部屋に合わせてキャリブレーションし、世界中の再生環境に対してより自信を持ったミックスが可能になります。

## ORIA - イマーシブミックスを簡単に。



## 01 適合宣言 (DOC)

## 02 インストール/セットアップ

同梱品  
初期設定  
Macのセットアップ  
Windowsのセットアップ  
Mac マルチチャンネル設定  
Windows マルチチャンネル設定  
ORIAをスタンドアロンモニターコントローラーとして使用する  
Audient ARCへの登録  
ファームウェアアップデートの手順

## 03 ハードウェアの機能

前面パネル / 背面パネル  
ORIA本体上の設定  
マイクプリアンプ  
スピーカーモニタリング  
ヘッドフォンモニタリング  
メータリング

## 04 接続性

ステレオ出力  
サラウンド出力  
デジタルI/O  
ワードクロック  
クロック構成  
USB  
ネットワークオーディオ  
スペシフィケーション

## 05 ソフトウェアの機能

プロファイル

モニタリング

ルーム

ソロ/ミュート

グループ

メータリング

メニューバー

低レイテンシー ソフトウェア ミキサー

システムパネル

出力のキャリブレーション

マニュアルでのキャリブレーション

iPad App

キーボードショートカット

## 06 安全情報

ラックマウント

## 07 保証情報

# 適合宣言（DoC）

## FCC パート 15B

この装置はテストされ、FCC 規則のパート15B に従ってクラス A デジタル デバイスの制限に準拠していることが確認されています。これらの制限は、住宅設備における有害な干渉に対する合理的な保護を提供するように設計されています。

この機器は無線周波数エネルギーを生成、使用、および放射する可能性があるため、指示に従って設置および使用しない場合、無線通信に有害な干渉を引き起こす可能性があります。

この装置がラジオまたはテレビの受信に有害な干渉を引き起こす場合（装置の電源をオフにしてからオンにすることで判断できます）、ユーザーは次の1つまたは複数の手段によって干渉を修正することをお勧めします。

- 1 受信アンテナの向きまたは位置を変える
- 2 機器と受信機間の距離を離す
- 3 機器を、接続されている回路とは別の回路のコンセントに接続します。  
受信機が接続されているもの
- 4 販売店または経験豊富なラジオ/テレビ技術者に相談してください。

注：FCCとは、Federal Communication Commissionの略で、アメリカ合衆国の米国連邦通信委員会のことを示します。アメリカ合衆国において、通信・電波の規制を行う連邦政府機関です。周波数の割り当てを行ったり、無線機器・電子機器の規制を行ったりしています。FCC認証は日本のEMC規格とは関係はありません。

Officially Certified

 Dolby Atmos

Dolby、Dolby Atmos、Dolby Audio、およびダブル D シンボルは、Dolby Laboratories Licensing Corporations の商標です。

# インストールとセットアップ



We, Audient Ltd, Aspect House, Herriard, Hampshire, RG25 2PN, UK, 01256 381944, declare under our sole responsibility that the product ORIA complies with Part 15 of FCC Rules.

Operation is subject to the following two conditions:

1. This device may not cause harmful interference,
2. This device must accept any interference received, including interference that may cause undesired operation



We, Audient Ltd, declare that the product, the ORIA, to which this declaration relates, is in material conformity with the appropriate CE standards and directives for an audio product designed for consumer use.



We, Audient Ltd, declare that the product, the ORIA, to which this declaration relates, is in material conformity with the appropriate UKCA standards and directives for an audio product designed for consumer use.



Audient Ltd has conformed where applicable, to the European Union's Directive EN 63000:2018 on Restrictions of Hazardous Substances (RoHS) as well as the following sections of California law which refer to RoHS, namely sections 25214.10, 25214.10.2, and 58012, Health and Safety Code; Section 42475.2, Public Resources.



Under an environment with electrostatic discharge, the device may cease to output sound (EUT could not operate properly). This requires the user reset the device by unplugging & re-connecting to host computer.

As a device that provides power to other equipment power management features are inappropriate for this product.



私たちオーディエントは、この宣言に関係する製品 ORIA が重要であることを宣言します。オーディオ製品の適切な PSE 規格および指令への適合消費者向けに設計されています。経済産業省令別表12 J55032(H29)。

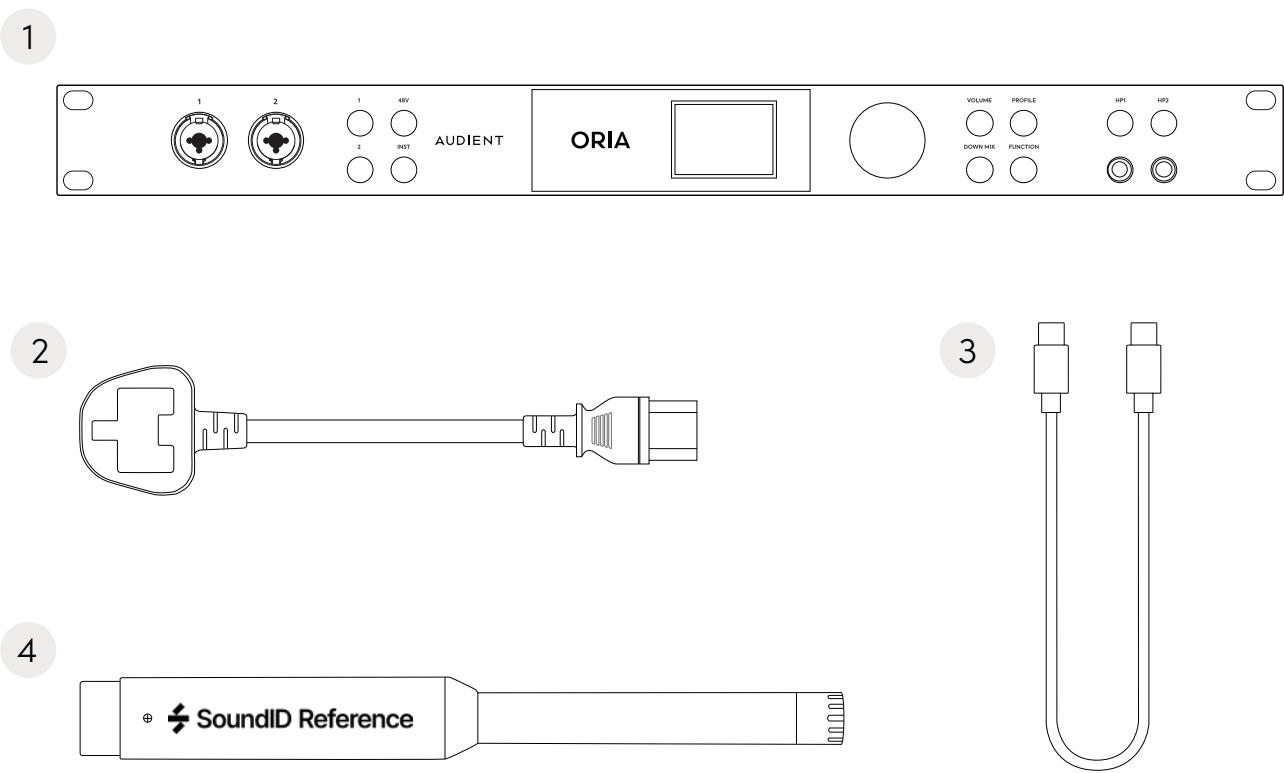


IEC 62368 テストレポート取得済み

 **WARNING** : This product can expose you to BPA and other chemicals which are known to the State of California to cause cancer and/or birth defects or other reproductive harm. For more information go to [www.p65warnings.ca.gov](http://www.p65warnings.ca.gov).

# 同梱品

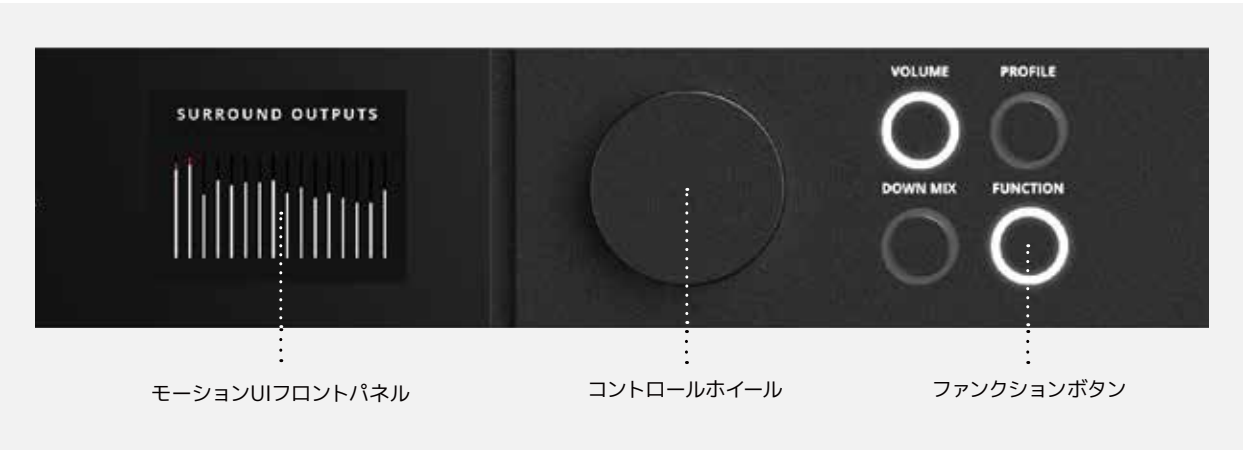
- 1 ORIA本体 1台
- 2 電源ケーブル 1本
- 3 電源ケーブル 1本
- 4 Sonarworks™ SoundID reference 測定マイク 1本



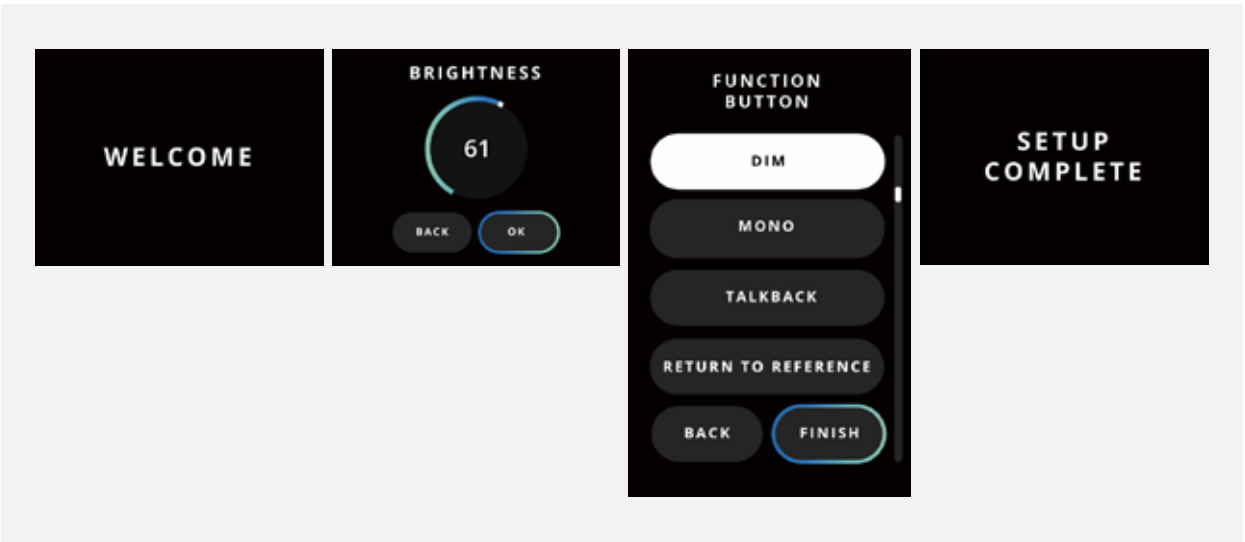
# 初期設定

ORIAを開梱し、付属の電源ケーブル、次にUSBケーブルをコンピューターのUSBポートに接続します。コンピューターにUSB Type-Cのポートがない場合は、サードパーティ製のケーブルの使用が必要な場合があります。

ORIAのコントロールホイールでフロントパネルの画面内を移動し、Motion UI を用いてコントロールします。コントロールホイールを押して選択を確認するか、特定のボタンで提供されるオプションを切り替えます。コントロールホイールは、回すほかに押す事 (=決定) が出来ます。



電源を入れると、コントロールホイールで画面の明るさを設定するよう求められ、次に、ファンクションボタンで制御する機能 (DIM、Return to Reference、Talkback、または Polarity Reverse) をスクロールして選択します。コントロールホイールを押します。「OK」までスクロールし、コントロールホイールをもう一度押して初期セットアップを完了します。



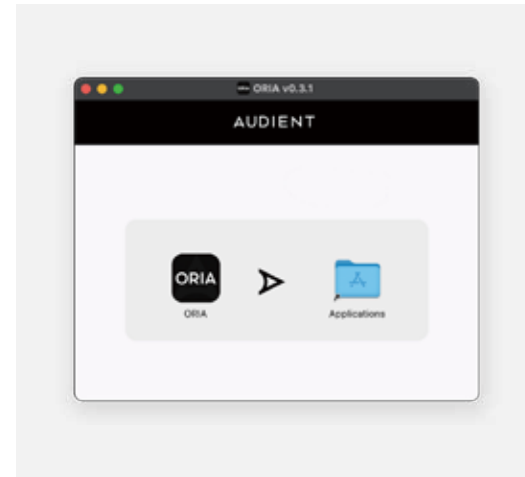
# Macのインストール

macOSでは、ORIAはドライバーをインストールする必要がなく、接続するだけですぐ機能します。

ただし、ORIAデスクトップアプリをインストールすることを強くお勧めします。これにより、ORIAのアドバンスコントロールが可能になり、ファームウェアの更新も簡単に行えます。

[audient.com/ORIA/downloads](https://audient.com/ORIA/downloads)

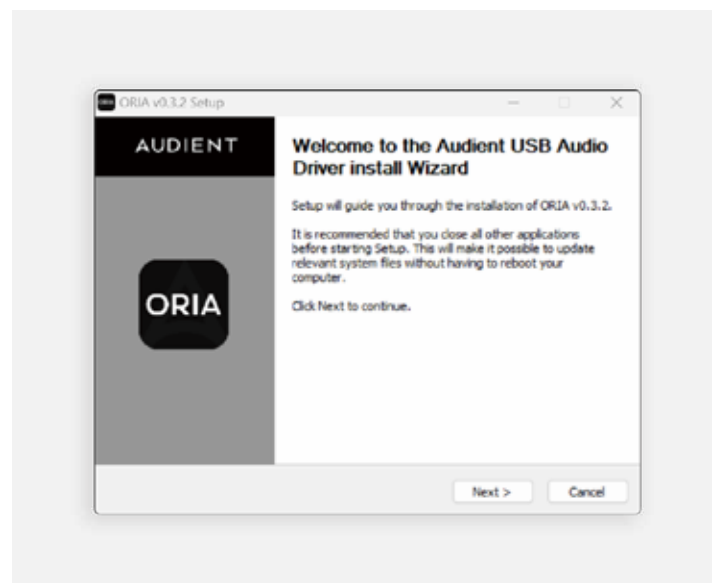
にアクセスして、アプリケーションの最新バージョンをダウンロードしますダウンロードしたら、.dmgファイルを開いて、ORIAデスクトップ アプリをアプリケーションフォルダーにドラッグ&ドロップします。



# Windows のインストール

ORIAは、コンピューターとORIAが正しく連携できるように、Windows上で動作するドライバーが必要です。ドライバーは、ORIA Webサイト([audient.com/ORIA/downloads](https://audient.com/ORIA/downloads))からダウンロードできます。ダウンロードしたら、.exeファイルを実行してインストールプロセスを開始します。

画面の指示に従ってインストールを完了します。このプロセスには少し時間がかかる場合がありますので、しばらくお待ちください。完了したら「Finish/完了」をクリックします。



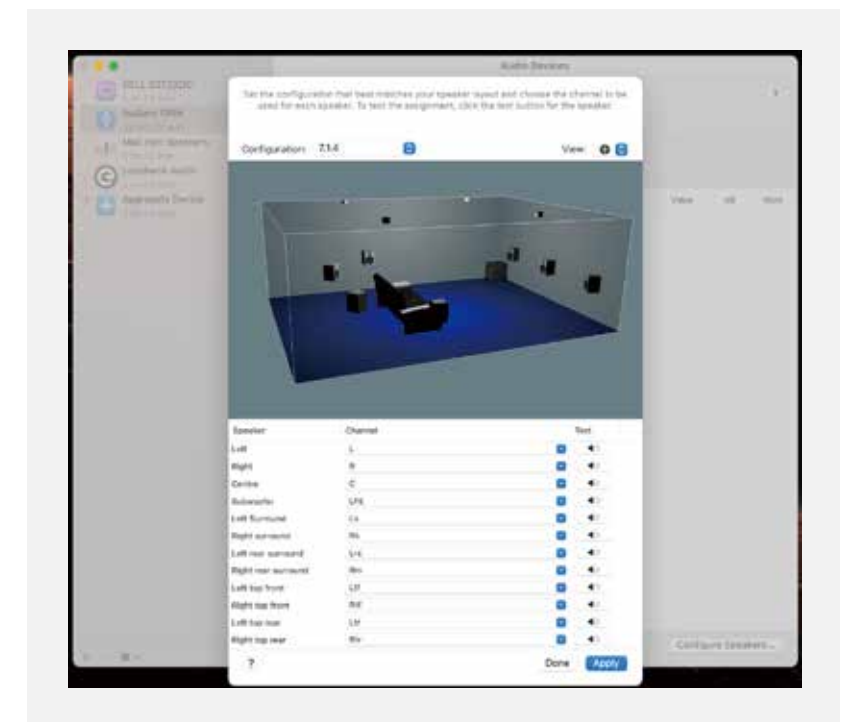
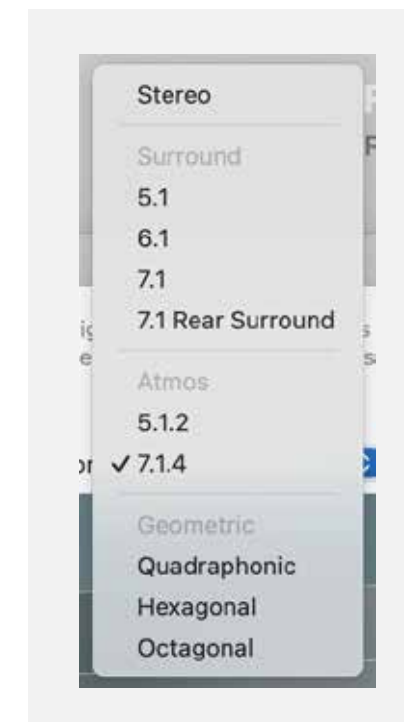
# Mac マルチチャンネル設定

macOSを使用している場合は、OSからのデフォルト出力をさまざまなサラウンドフォーマットに設定できます。これは、macOS Core Audioドライバーによって個別に処理される DAWからの出力には影響しませんが、サポートされているメディアプレーヤー、Webブラウザーからの再生またはサラウンドサウンドメディアが可能になります。

これを見つけるには、ORIAをMacに接続して、macOS Launchpadから「AudioMIDI utility /AudioMIDIユーティリティ」を開きます。次に、接続されているデバイスリストからORIAを選択します。「Outputs/出力」タブをクリックし、「Configure Speakers/スピーカーの構成」を選択します。

「Configuration/構成」ドロップダウンして使用する形式を選択します。

スピーカー構成を選択したら、以下に示すように、スピーカーの割り当てがORIAの出力チャンネルと一致していることを再確認してください。



スピーカーの割り当てが正しいことを確認したら、「Apply/適用」をクリックします。

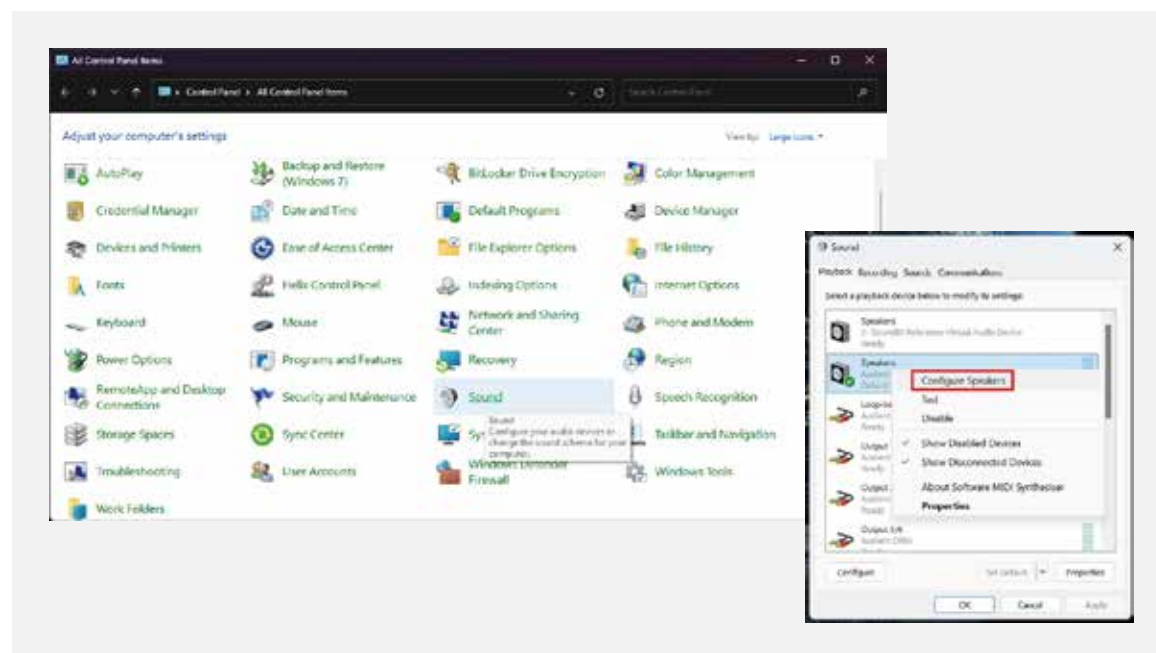
現在、すべてのメディアプレーヤー、ストリーミングソフトウェア、または Webブラウザーがドルビーアトモスまたはイマージブオーディオの再生をサポートしているわけではないことに注意してください。そのため、エンコーダーで再生の問題が発生する場合は、選択したメディア再生方法のディベロッパーに問い合わせ、制限の可能性のあることを理解してください。



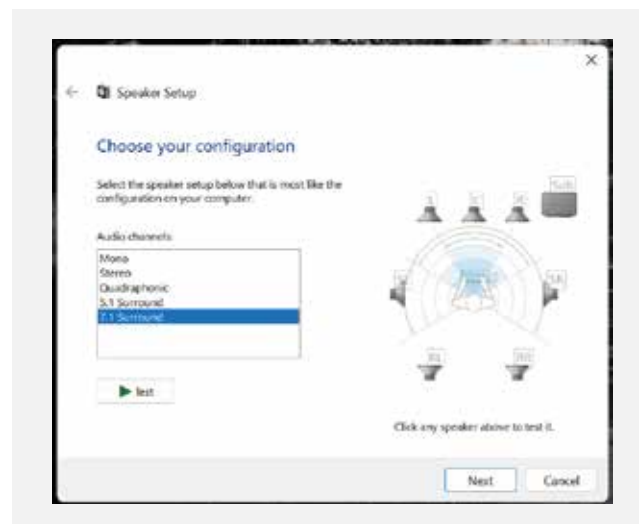
# Windows マルチチャンネル設定

Windowsを使用している場合は、OSからのデフォルト出力をモノラル、ステレオ、クアドラフォニック、5.1および 7.1のいずれかに設定できます。これは、ASIOドライバーを介して処理されるDAWからの出力には影響しませんが、サポートされている場合は、メディアプレーヤーまたはWebブラウザーからの再生、またはサラウンドサウンドメディアが可能になります。

まず、Windowsの検索バーからControl Panel/コントロールパネルを開き、「Sound/サウンド」を選択します。「Sound/サウンド」ポップアップが開いたら、以下のスクリーンショットに示すように、ORIA 出力の「Speakers/スピーカー」を見つけます。



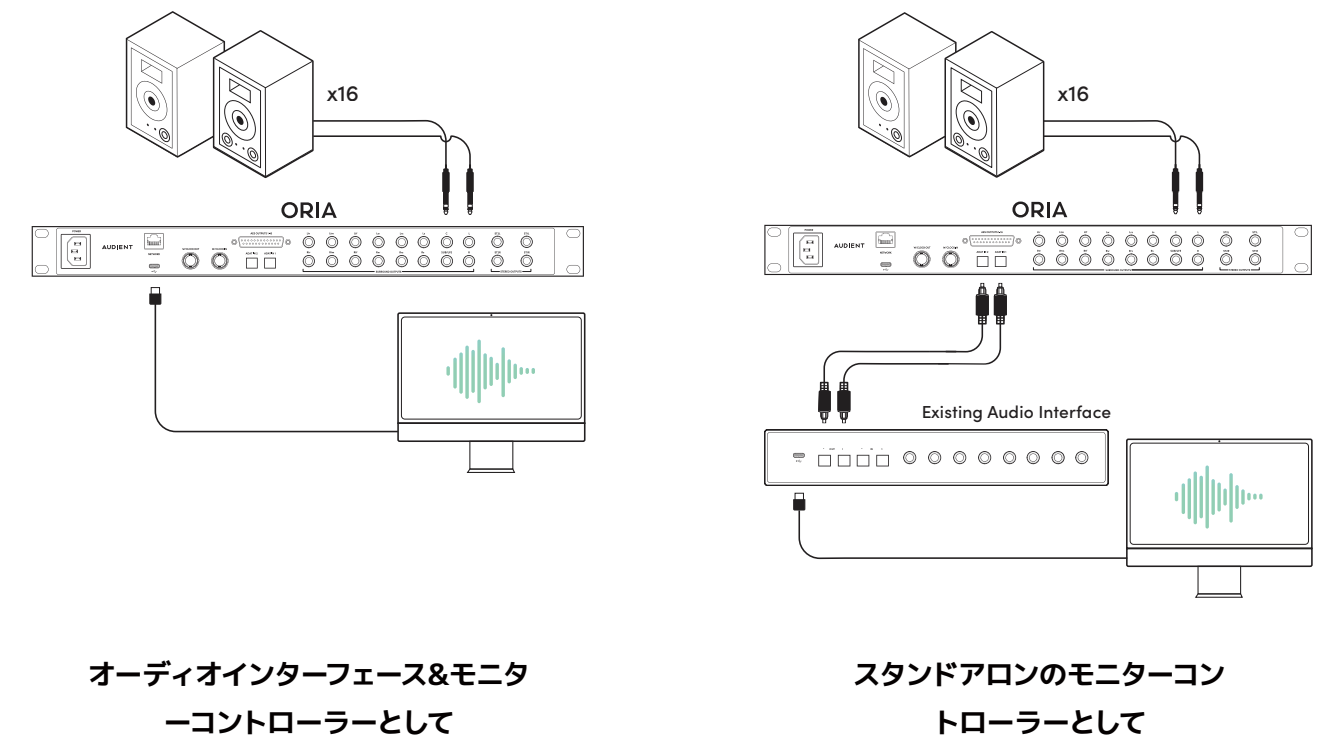
「Speakers/スピーカー」を右クリックし、「Configure Speakers/スピーカーの構成」を選択します。次に、以下に示すメニューからORIAで使用する出力形式を選択します。



ORIA出力「Speakers/スピーカー」は専用のマルチチャンネル出力であるため、これを選択することが重要です。ご注意ください。他の出力ペアにはスピーカー構成オプションはありません。

# ORIAをスタンドアロンのモニターコントローラーとして使用する

ORIAは、コンピュータのオーディオインターフェイスまたはスタンドアロンのモニターコントローラーとして機能し、ワークフローに臨場感あふれるモニタリングとキャリブレーション機能を提供できるように設計されています。



オーディオインターフェイス&モニターコントローラーとして

スタンドアロンのモニターコントローラーとして

スタンドアロンのモニターコントローラーとして使用する場合、ORIAはADAT入力または別売オプションの Dante カード経由、どちらかをORIAソフトウェアのインプットソースコントロールで選択して、音声を取り込むことができます。

ORIAデスクトップアプリを使用してプロファイルを作成してORIAに保存するには、まず最初にORIAをUSB経由でコンピュータに接続します。スタンドアロンのモニターコントローラーとして使用する場合でも、ユニットをUSB経由でコンピュータに接続したままにすることをお勧めします。これにより、ORIAデスクトップアプリまたは ORIA iPadコントロールアプリを使用して、ユニットをリモートコントロールできるようになります。

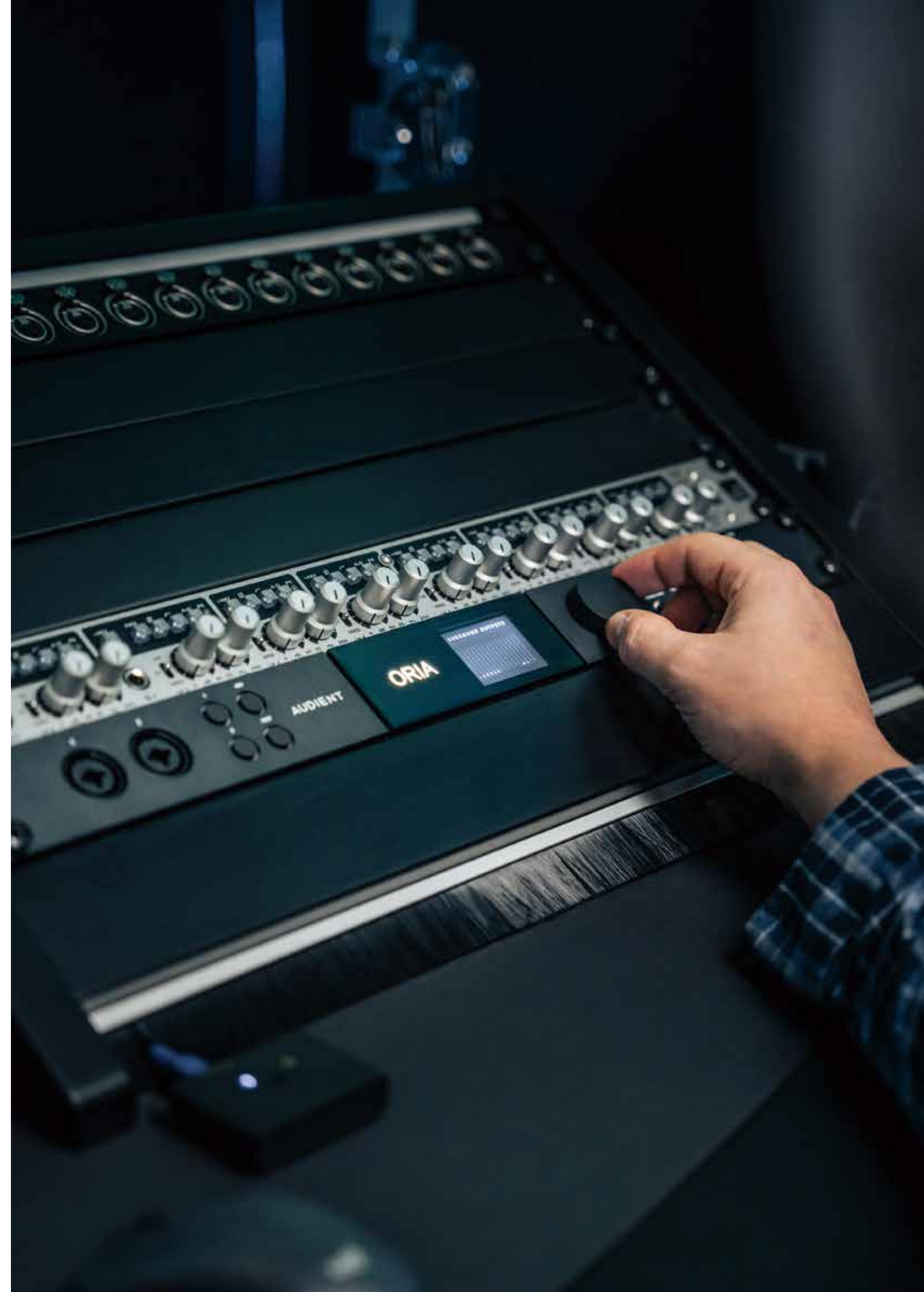
セットアップ後、必要に応じてUSBを接続しなくてもORIAを使用できますが、プロファイルを変更したり、モニタリングレベルを調整するには、インターフェイスのフロントパネルのコントロールが必要です。

# Audient ARCへの登録

ORIAにはプロフェッショナルなソフトウェアコレクションとサービスがバンドルされており、業界をリードするイノベーターによるレコーディングを開始するために必要なツールすべてが揃っています。

[arc.audient.com](https://arc.audient.com)にアクセスし、「Register products/製品登録」を選択し、詳細を入力してアカウントを作成します。その後、受信トレイに確認メールが届きます。（スパム/ジャンクフォルダーを確認する必要がある場合があります。）アカウントを確認したら、ORIAの下側にあるシリアル番号と固有の4桁のPINを入力して、ORIA を登録します。

これで製品登録が完了し、幅広い無料ソフトウェアやプラグインから自由に選択できるようになり、強力なクリエイティブツールに簡単にアクセスできるようになります。





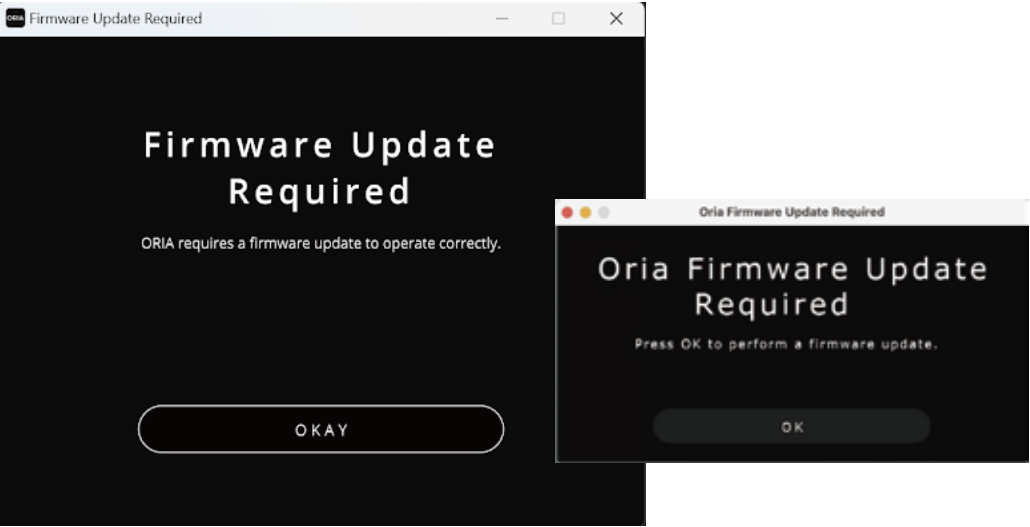
# ファームウェアアップデートの手順

Audientは、ORIAに新機能を追加したり、コンピューターOSのアップデートとの継続的な互換性を確保するために、ORIAの新しいファームウェアをリリースします。

インターネットにアクセスできる場合、ORIAデスクトップアプリは新しいファームウェアのアップデートが利用可能かどうかを定期的に確認し、アップデートがある場合はそれを通知します。メニューバーに移動して以下を選択すると、いつでも更新を確認することができます。

[Help/ヘルプ] > [Updates/アップデートの確認]

アップデートがある場合は、ORIAコントロールアプリが通知します。「OK」をクリックするとファームウェアのアップデートプロセスが始まります。



ORIAデスクトップアプリは、Audient Firmware Upgrade ソフトウェアを起動します。このソフトウェアでは、現在コンピューターに接続されているすべてのAudientデバイスのリストが表示されます。そのデバイスリストからORIAを選択します。

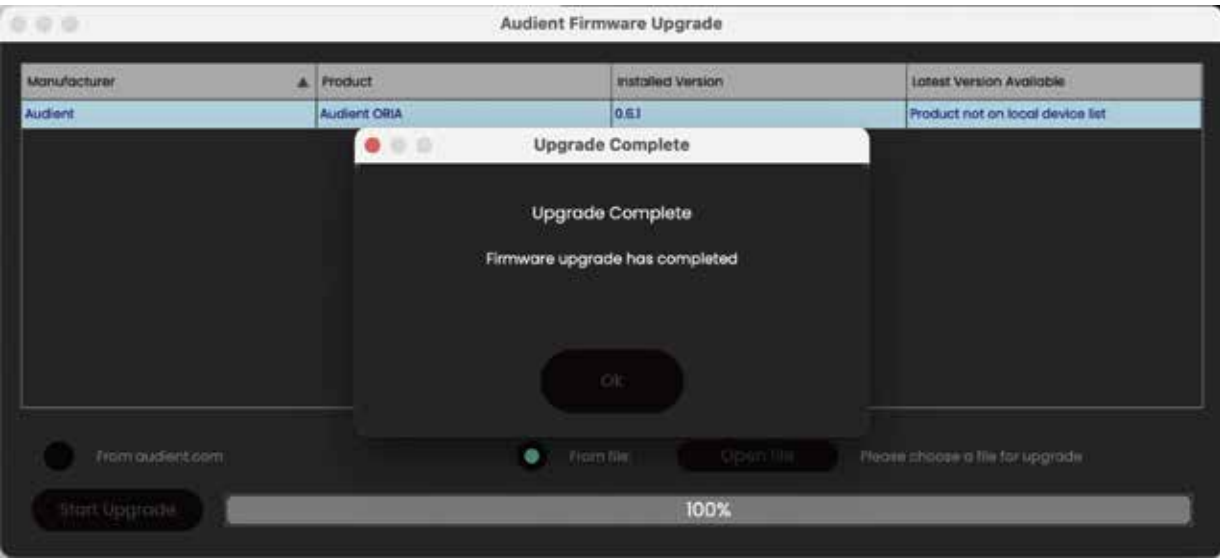


また、audient.comからのダウンロードのほか、「From File/ファイルから」を選択してローカルファイルからの更新も可能です。コンピューターにインターネット接続がある場合は、最新のファームウェアバージョンを確実にインストールするために「from audient.com」を選択することをお勧めします。

コンピューターにインターネット接続がない場合は、株式会社HOTONE Japanまでご連絡ください。ローカルにインストールするための最新のファームウェアファイルをお送りします。

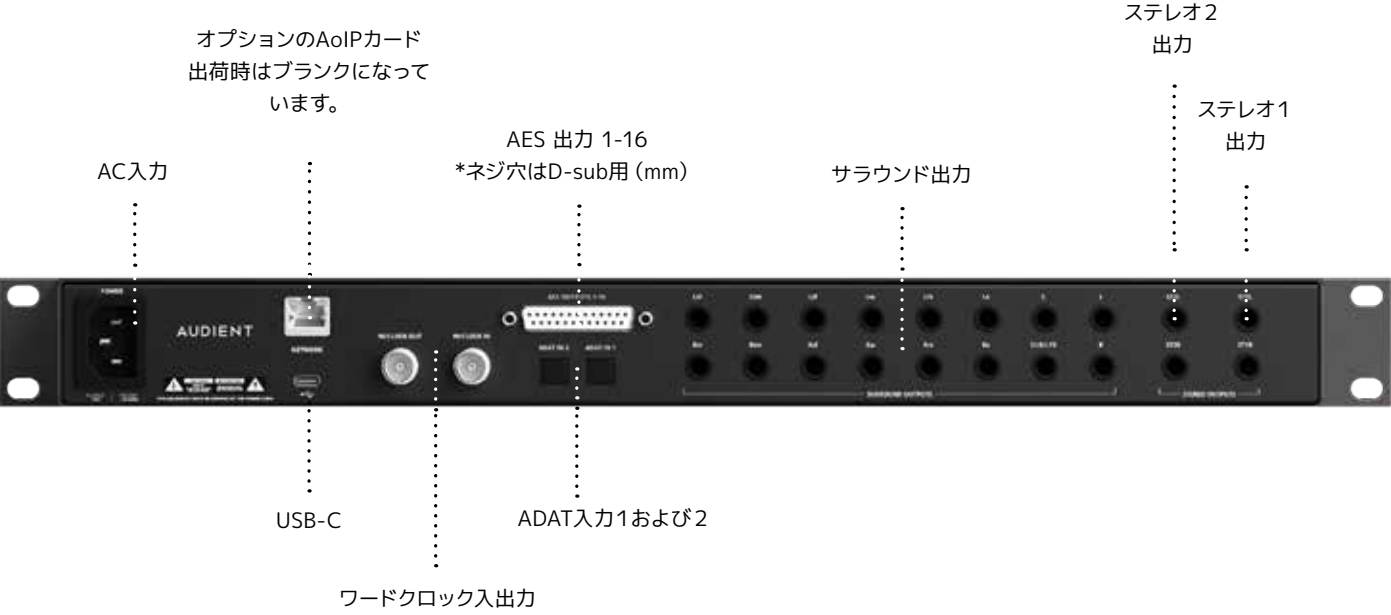
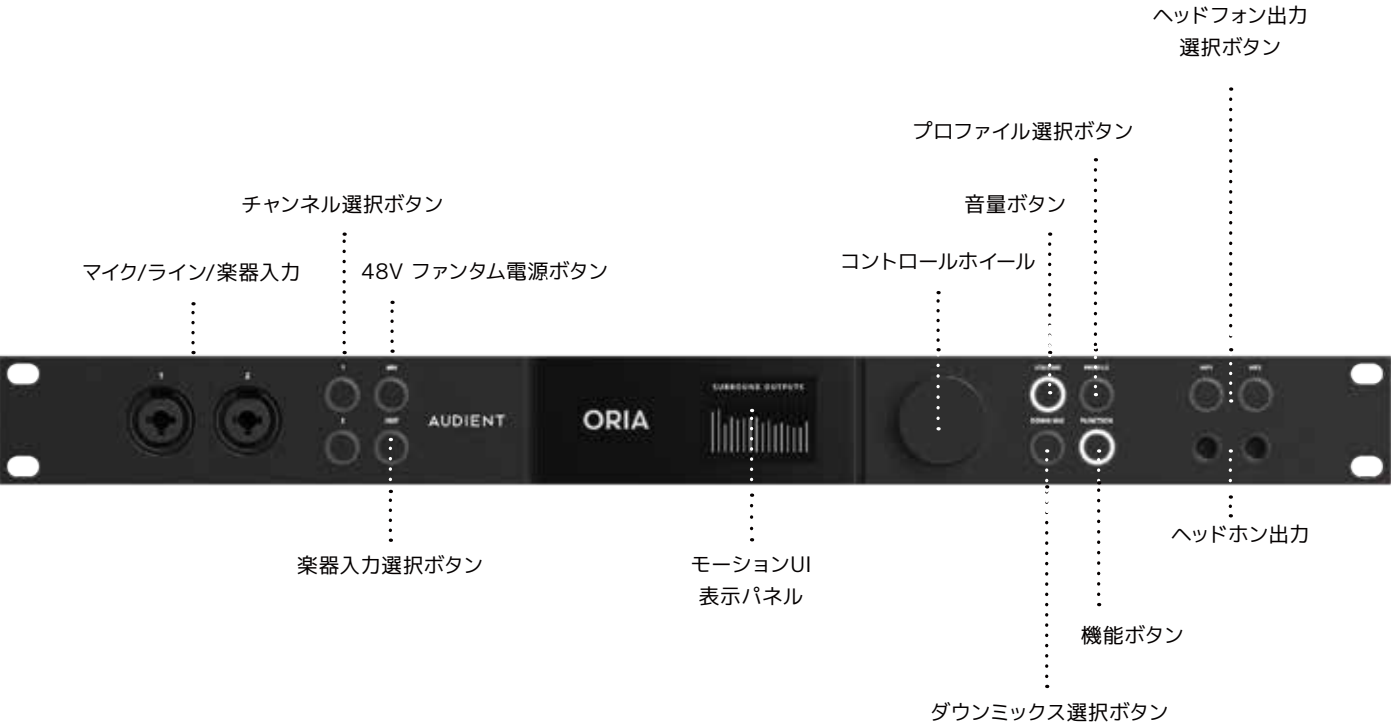
これで、[Start Upgrade/アップグレードのスタート] をクリックできるようになり、進行状況バーが徐々に進み始めるはずです。更新プロセス中には、ORIAユニットが複数回再起動される場合があります。

完了すると、アップデートがインストールされたことを確認する通知が表示されます。これで、Audientファームウェアアップグレードウィンドウを閉じて、ORIAの使用を続けることができます。



# ハードウェアの機能

## 前面パネル / 背面パネル



# ORIA本体上の設定

コントロールホイールを長押しすると、ORIAのさまざまなグローバル設定にアクセスできます。  
コントロールホイールを使用してオプションを順番に切り替えます。



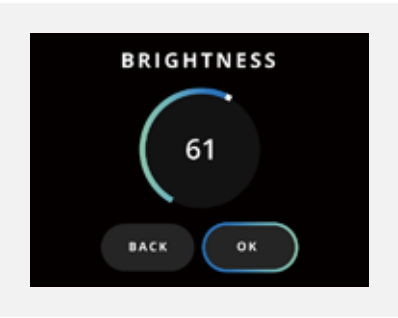
## 電源

ORIAの電源をオフにすることを選択します（コントロールホイールを押してORIAの電源をオンにします）。



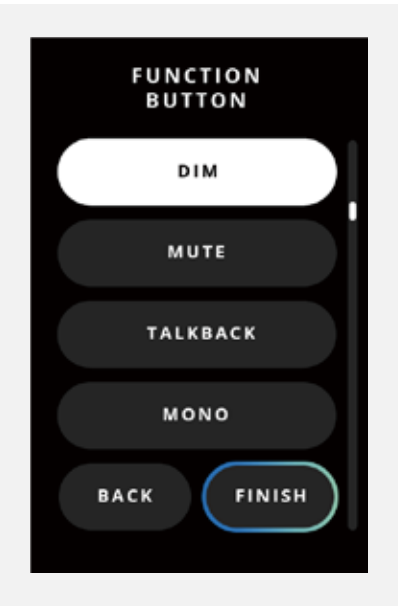
## 輝度

すべての LED と表示パネルの全体的な明るさを制御します。



## ファンクション

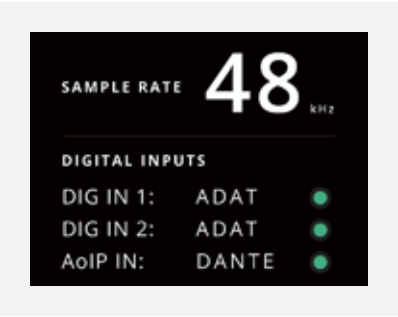
「FUNCTION BUTTON/ファンクションボタン」に割り当てる機能を変更します。



## ステータス

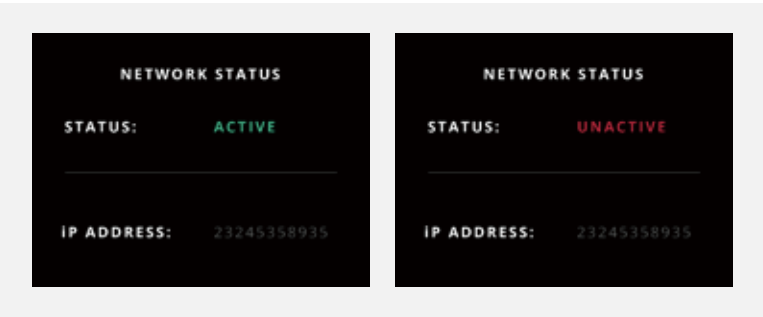
現サンプルレートとクロックソースを確認します。  
ステータスライトの種類は次の通りです：

- ・ **グリーン**：ユニットが正常にクロックにロック（同期）されたことを意味します。
- ・ **アンバー**：ユニットがクロック信号を検出しましたが、異なるサンプルレートです。
- ・ **レッド**：クロック信号が検出されていません。



AOIP

ネットワークオーディオ接続のステータス（アクティブまたは非アクティブ）と ORIAのIPアドレスを確認します。



工場出荷時設定にリセット/FACTORY RESET

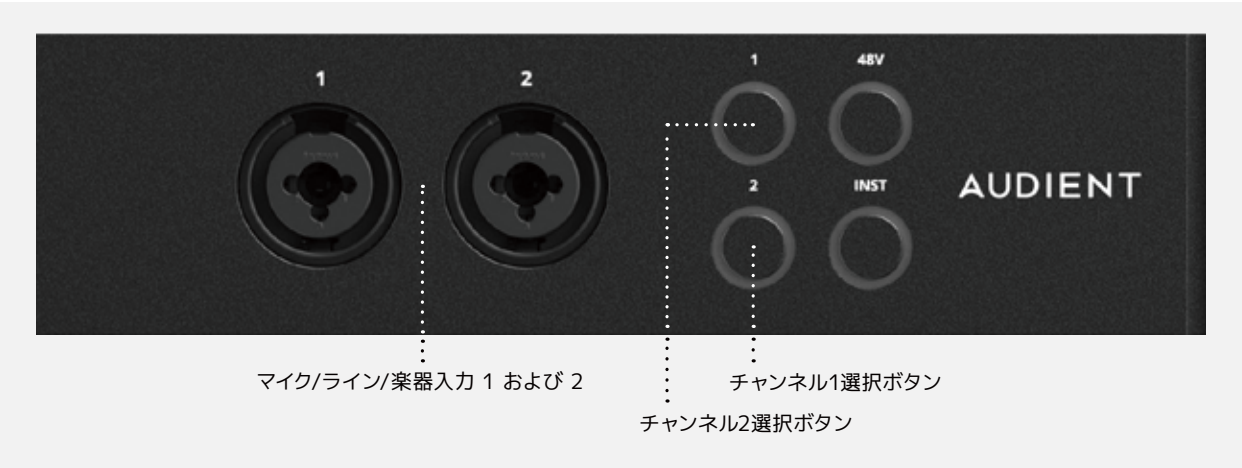
ORIA を工場出荷時の設定に戻します。  
\*\*これにより、現在保存されている設定とプロファイルのすべてが削除されることに注意してください。\*\*



マイクプリアンプ

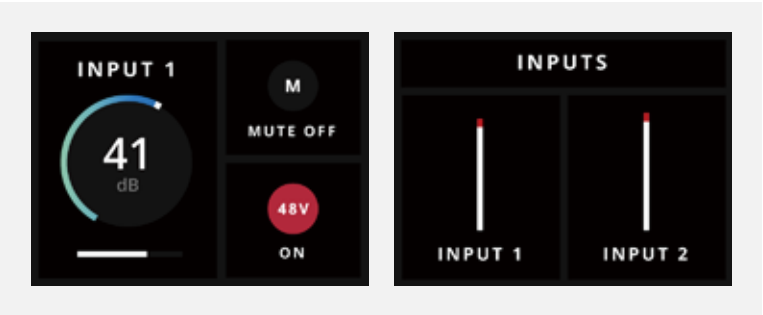
ORIAは、最大60dBのゲインを提供できる2つの Audientコンソールマイクプリアンプを備え、前面のコンビジャックからラインおよび楽器レベルのソースが受けられます。

1 または 2 ボタンのいずれかを押して、設定したいチャンネルを選びます。



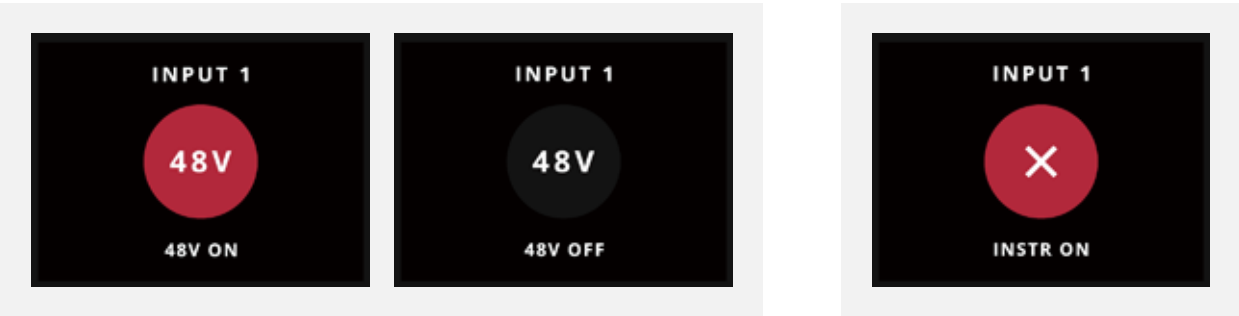
Gain/ゲイン

コントロールホイールを回して入力ゲインを調整します。 XLR入力はマイクレベルで、TRS入力はラインレベルで信号を受けます。



Phantom Power/ファンタム電源

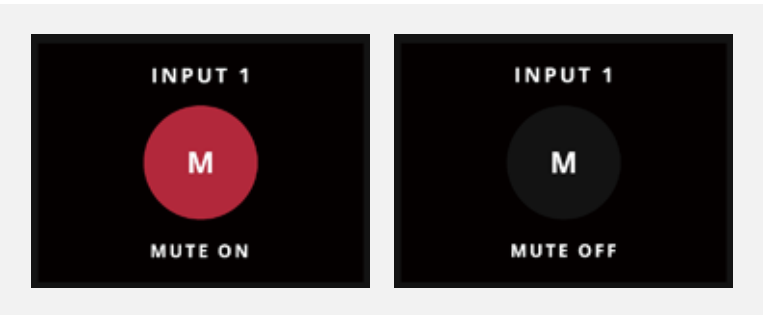
ファンタム電源の使用には48Vを押します。LEDがレッドに変わり、選択したマイクプリアンプチャンネルでファンタム電源がアクティブになったことを示します。



ファンタム電源はXLR入力にのみ適用され、外部機器ソースへの偶発的な損傷を防ぎます。チャンネルがインストゥルメントモードの場合は、ファンタム電源はブロックされます。

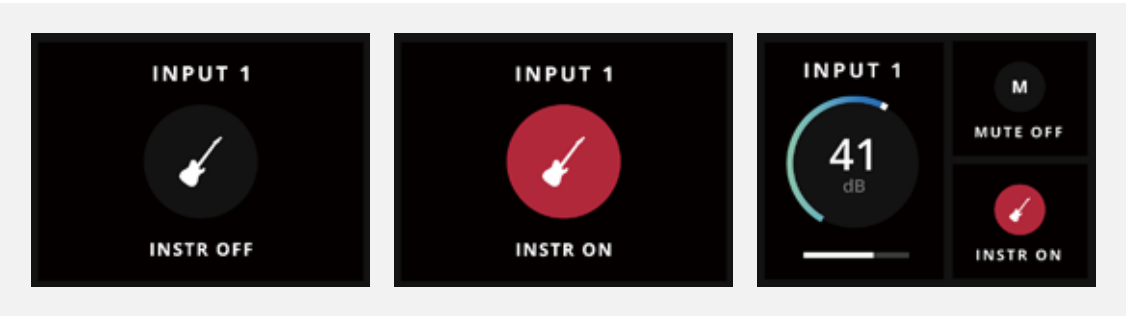
Mute/ミュート

それぞれのチャンネルボタンを長押しすると、入力がミュート/ミュート解除されます。チャンネルがミュートされている間、ボタンのLEDが白く点滅します。



Instrument Input/楽器入力

INSTを押すと、プリアンプが JFET 楽器入力を介してハイインピーダンス/楽器レベルを受け入れるように切り替わります。

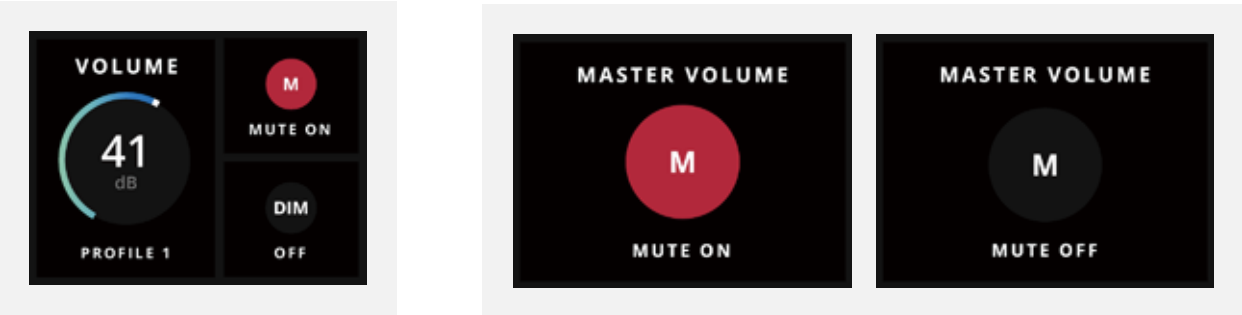


スピーカーモニタリング

フロントパネルからさまざまなモニタリングオプションに素早くアクセスできます。

Volume/ボリューム

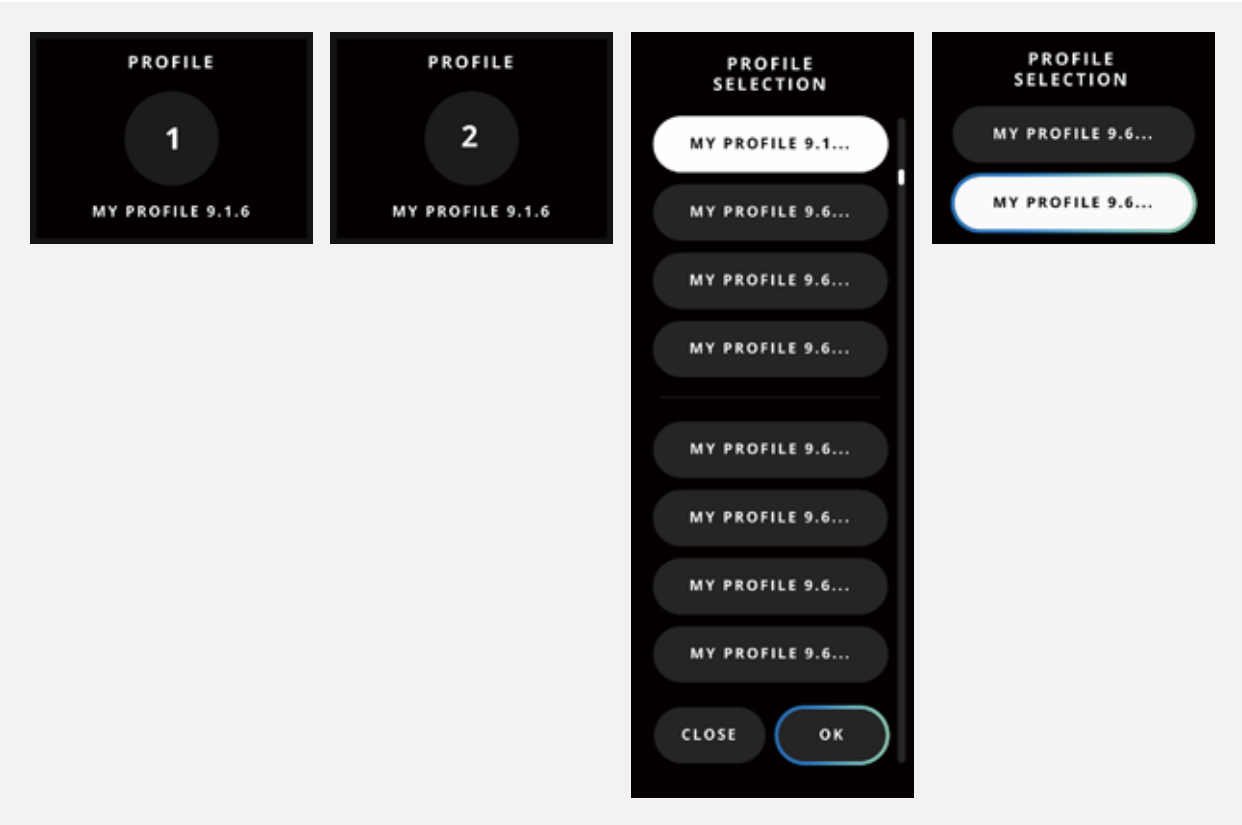
コントロールホイールを回して、選択したスピーカー構成に合わせて音量を調整します。



メイン出力が選択されている場合は、コントロールホイールを押したままにして、メイン出力をミュートまたはミュート解除します。メイン出力がミュートされている間、LED は白く点滅します。

Profile/プロファイル

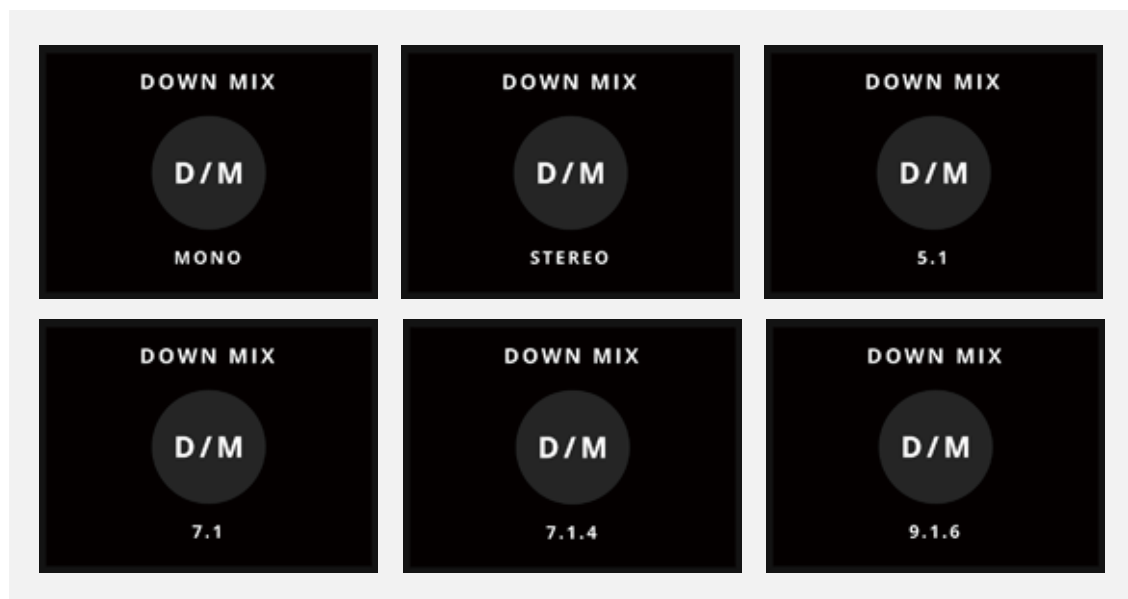
「プロファイル」ボタンを押して、4 つの「フェイバリット」スピーカー構成を切り替えます。ボタンを押したままにすると、プロファイルのリストが表示され、コントロールホイールを使用してプロファイルを順番に切り替えることができます。





## Down Mix/ダウンミックス

スタンドアロンのDolby<sup>TM</sup> レンダラーのダウンミックス機能をORIAのフロントパネルから直接制御できます。「ダウンミックス」ボタンを押すと、利用可能なさまざまな出力オプションが切り替わります。



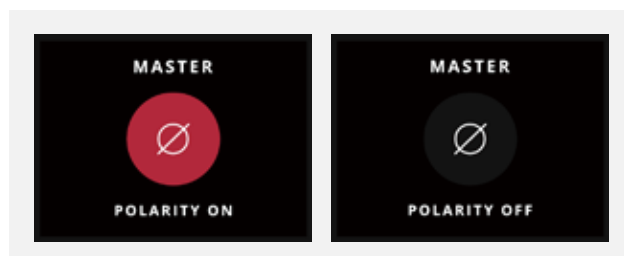
この機能は、Dolby<sup>TM</sup> レンダラーに接続している場合にのみ使用できます。そうでない場合は、エラーメッセージが表示されます。



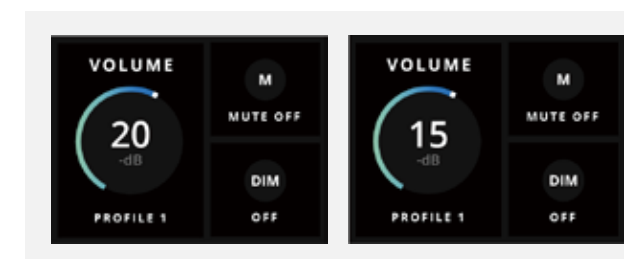
## Function/ファンクション

「Function/ファンクションボタン」で事前に選択されているモニタープロセスのオン/オフを切り替えます。このボタンの機能はORIAデスクトップアプリで調整できます。これについては、このマニュアルの後半で説明します。

- **Polarity/極性** - ステレオミックスの位相コヒーレンスをチェックします。

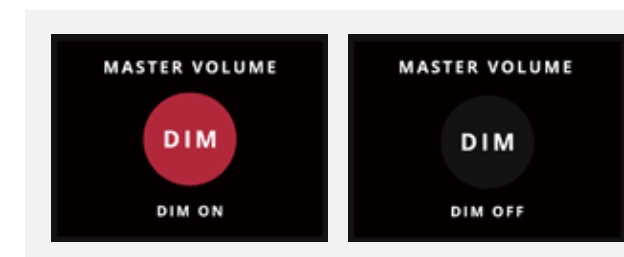


- **Return to Reference/リファレンスへ戻る** - ファンクションボタンに割り当てられている場合、Return to Reference (RTR) 機能は、出力ボリュームをアクティブプロファイルの一部として保存されている基準レベルに戻します。例えば、プロファイルの基準レベルのボリュームが -20dBであるにもかかわらず、現在 -15dB でモニタリングしている場合、RTRを使用して正確に -20dB に素早く戻すことができます。これは、ORIAのフロントパネル画面のシステムメニューに表示されます。

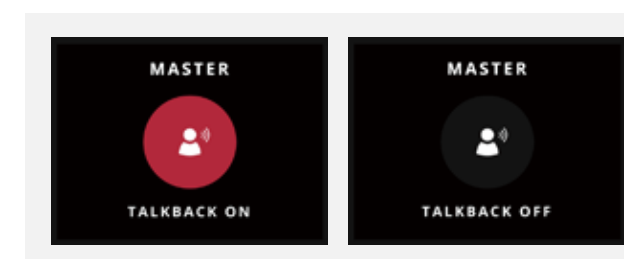


ファンクションボタンが点灯し、あなたが現在リファレンスレベルで聴いていることを示します。

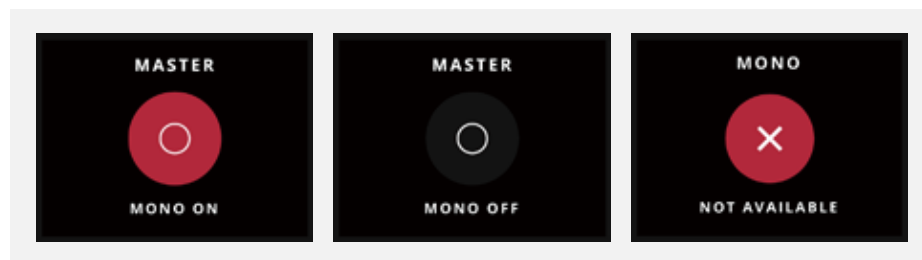
- **DIM/ディム** - メイン出力の音量を下げます。リダクションレベルは、ORIAミキサーアプリケーションのシステムモードで変更できます。



- **Talkback/トークバック** - 選択したマイク信号をヘッドフォン出力へ送り、演奏者とコミュニケーションが可能になります。詳細については、「System Mode/システムモード」を参照してください。



- **MONO/モノ** - モノラル互換性をチェックするために、ステレオミックスのモノラル変換バージョンを出力します。

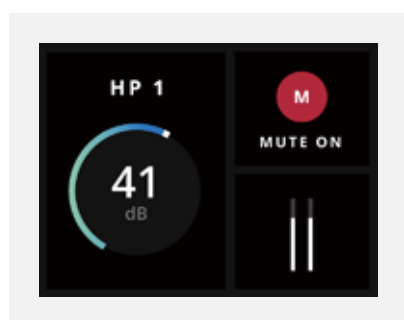


## ヘッドフォンモニタリング

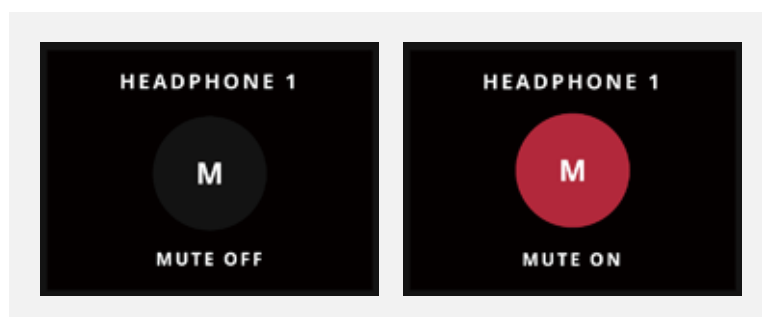
ORIAは、録音中またはミキシング中のヘッドフォンモニタリング用に2つの独立したヘッドホン出力を搭載しています。各出力は、ORIAデスクトップアプリのシステム パネルからさまざまなソースを選択することができます。

### Volume/ボリューム

コントロールホイールを回して、選択したヘッドフォン出力に合わせて音量を調整します。



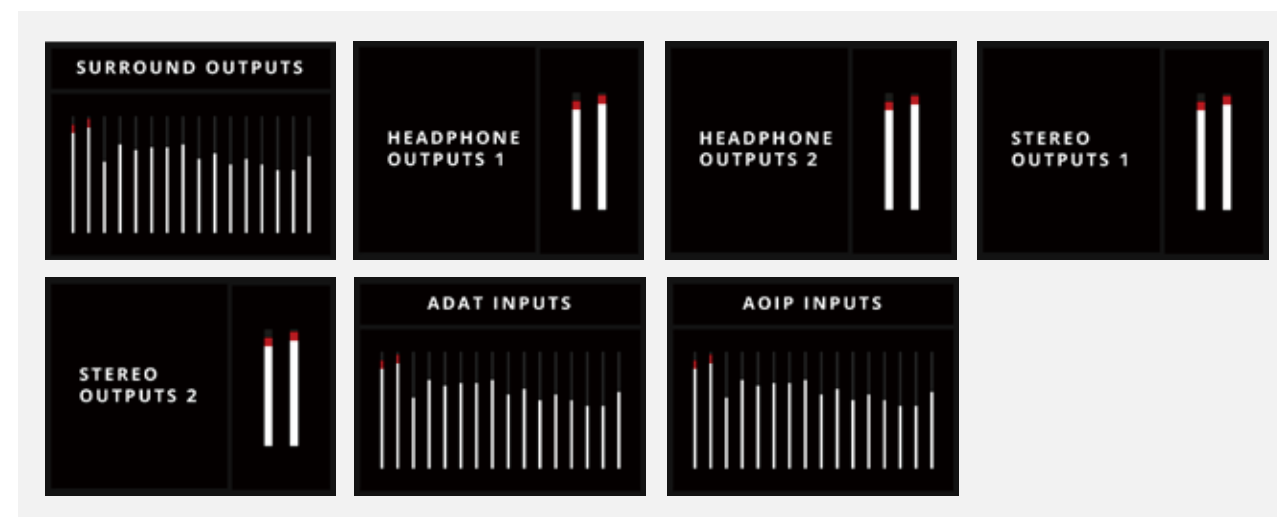
それぞれのボタンを押し続けると、ヘッドフォン出力をミュート/ミュート解除ができ、出力がミュートされている間 LEDが白く点滅します。



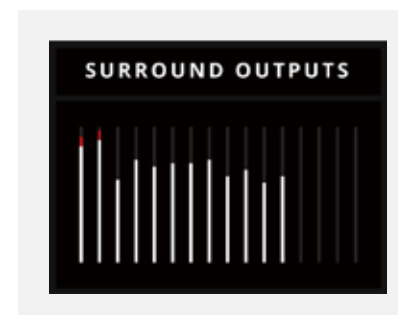
## メータリング

コントロールホイールを押すと、ORIAのすべての出力メーター（サラウンド、ヘッドフォン1、ヘッドフォン2、ステレオ、ADAT、またはAoIP）を切り替えることができます。

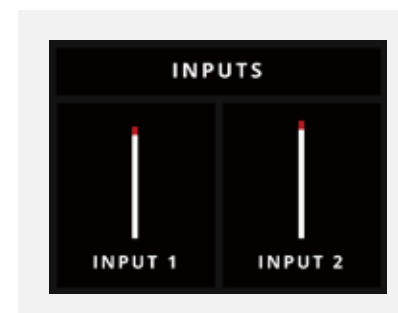
ディスプレイパネルは、3秒間ハードウェアの操作がなければ、選択したスピーカー構成の出力を測定するデフォルトの状態に戻ります。



16 チャンネル未満のサラウンド構成では、未使用のチャンネルがグレー表示されます。



インプットチャンネル選択ボタンを押してからコントロールホイールを押すと、インプット1と2を測定できます。



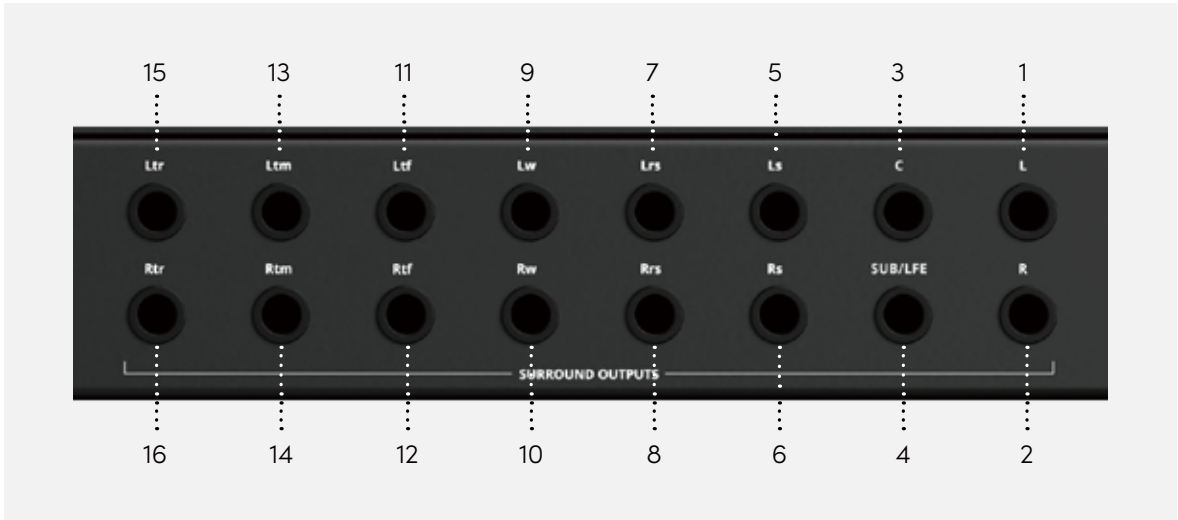
# Connectivity / 接続性

## Stereo Output/ステレオ出力

ORIAは、選択したステレオスピーカーに供給するための2つのバランス\*ステレオ出力 (ST1およびST2) を搭載しています。これらの出力は、サラウンド出力のステレオチャンネルからリレーで切り替えられます。

## Surround Output/サラウンド出力

ORIAは、幅広いスピーカー構成に対応するバランス\* サラウンド出力も搭載しています。



- |                                |                            |
|--------------------------------|----------------------------|
| 1. Left (R)                    | 9. Left Wide (Lw)          |
| 2. Right (R)                   | 10. Right Wide (Rw)        |
| 3. Center (C)                  | 11. Left Top Front (Ltf)   |
| 4. Low Frequency Effects (LFE) | 12. Right Top Front (Rtf)  |
| 5. Left Surround (Ls)          | 13. Left Top Middle (Ltm)  |
| 6. Right Surround (Rs)         | 14. Right Top Middle (Rtm) |
| 7. Left Rear Surround (Lrs)    | 15. Left Top Rear (Ltr)    |
| 8. Right Rear Surround (Rrs)   | 16. Right Top Rear (Rtr)   |

\* 出力トポロジが実装されているため、必要に応じてアンバランスケーブルを使用できます。

# Digital I/O / デジタルI/O

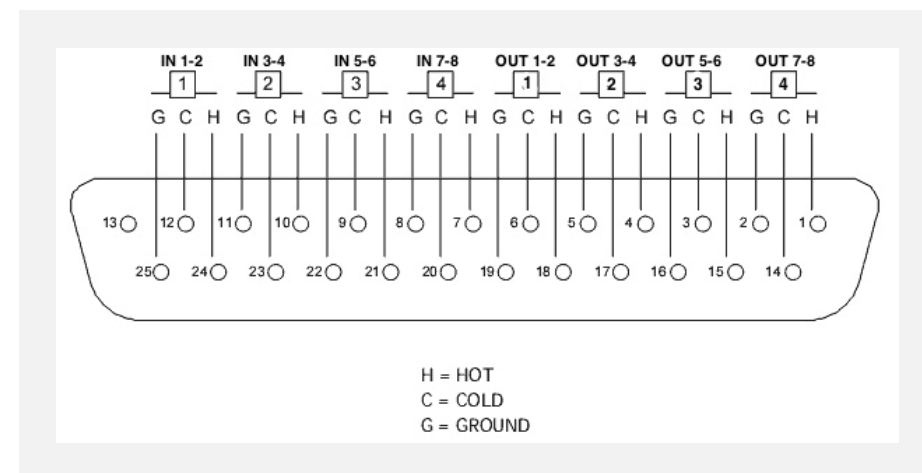
オーディオの入力と出力を拡張する必要がある場合、ORIAは両方のデジタルオプションを提供します。

- 16chのAES出力 (DB25) AES/EBU信号をスピーカーあるいはDACに供給するためのAES/EBU出力
- 2つのADAT入力 (OpticalTOSLINK) …44.1/48kHzで合計16チャンネル、または88.2/96kHz (SMUX) で8チャンネルをインプットします。

(AES出力とアナログサラウンドスピーカー出力は同時に使用できません。ご注意ください。)

## AES ピン配列

単一のDB25ポート経由で16チャンネルのオーディオを提供するために、ORIAは標準TASCAMのAES DB25出力のピン配置を採用しています。(DB25のコネクターはUNC 4/40のスクリューを使用します。)



各XLRが2つのオーディオチャンネルを伝送するため、標準のアナログ DB25 ~ 8 x XLR マルチケーブルが利用できます。このマルチケーブルの仕様は、110ΩのAES XLR - XLRケーブルとしてモニターに信号を供給します。

# Wordclock/ワードクロック

ORIAをスタジオのクロック信号のソース (コントローラー\*) にするか、それぞれのBNCワードクロック入力および出力を介して外部ソースから信号を受信する (ペリフェラル\*) かを選択します。

**\*\*用語に関する注意事項:** Audientは、クロックソースに関連する従来の用語から離れることを選択しました。現在は、コントローラー (通称クロックマスター) とペリフェラル (通称スレーブ) を使用します。

## クロック構成

ORIAは、他のデバイスにクロックを提供するコントローラとして、または他のデバイスからクロックを受信するペリフェラルとして使用できます。セットアップ中にはコントローラーを1つだけ使用することが重要です。この法則に反するとクロックエラーが発生し、オーディオにクリック音やポップ音が発生する可能性があります。

**ORIAをコントローラーとして使用する:**

ワードクロックをORIAからBNC出力経由で他のデバイスに送信し、他のデバイスが ORIAのクロックに同期できるようにすることができます。

複数のデバイスをORIAのBNC出力に接続する場合は、図に示すようにBNC Tコネクタを使用する必要があります。複数のデバイスを接続する場合は、チェーン内の最後のデバイスのみ75Ω BNC終端を有効にすることが重要です。75Ω終端を有効/無効にする方法がわからない場合は、外部デバイスのユーザーマニュアルを参照してください。

BNC 経由で ORIA を単一のデバイスに接続する：



BNC 経由で ORIA を複数のデバイスに接続する：



Key: BNCワードクロックケーブル      オプティカルTOSリンクケーブル

ペリフェラルとしてのORIA：

ORIA は、ADAT入力を介して Audient ASP880 などの外部デバイスからクロックを受けることができます。

ADAT経由でクロックを受信する



ORIAにはADAT出力がないため、ADAT経由でクロックを送信できないことに注意してください。  
ORIAをADATデバイスのマスタークロックとして使用したい場合は、BNC接続を使用する必要があります。

BNC経由でクロックを受信する





## クロックソースの設定

例の図に従って外部デバイスをORIAと接続したら、ORIAにクロックソースを指定する必要があります。これは、ORIAソフトウェアのシステムパネルで行います。これに関する詳細については、マニュアルの「システムパネル」セクションを参照してください。

# USB

USB-C経由でORIAを選択したコンピューターに接続できます。コンピューターにUSB-Cポートがない場合は、代わりにサードパーティ製の USB-C - USB-A ケーブルを使用して接続できます。

# ネットワークオーディオ

ORIA には、16入力チャンネルを提供するオプションのDante® カードを取り付けることができます。これにより、ORIAを既存のDanteインストール内でスタンドアロンのイマーシブ・オーディオ・モニターコントローラーとして使用できるようになります。

**\*\*注意ください:** オプションの Dante® カードは、承認された取り付け業者によって取り付けをお勧めします。Dante® カードを既存の ORIA ユニットに改造したい場合は、サポートチームにお問い合わせください。

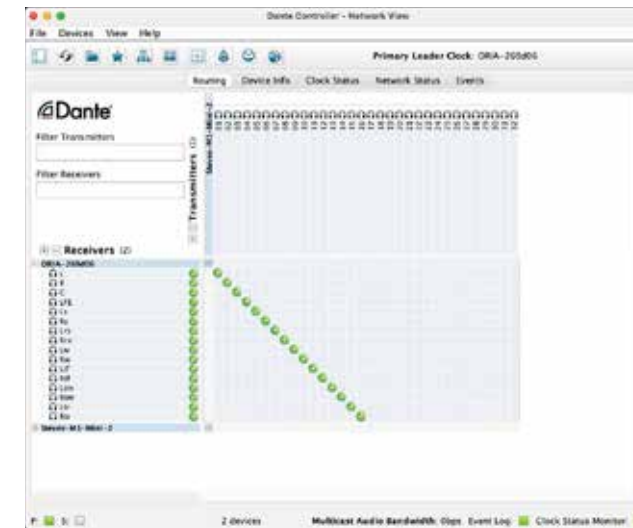
## Dante Control でのORIAの設定

ORIAをDante®レシーバーとして設定するには、Dante®コントローラー・アプリケーションを使用します。これはサードパーティのソフトウェアです。このソフトウェアとそのサポートドキュメントはここからダウンロードできます：<https://www.getdante.com/product-support/dante-controller/>

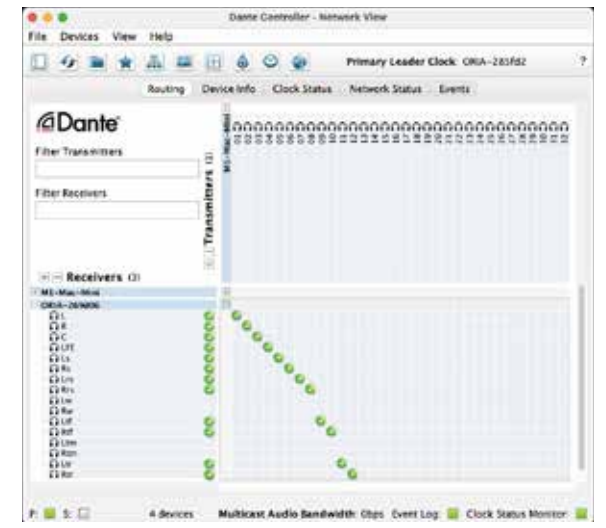
Dante®ネットワークに接続すると、ORIAが「レシーバー」デバイスのリストに表示されます。ORIAのさまざまなチャンネルを送信機デバイスの出力チャンネルに割り当てることができます。たとえば、以下のスクリーンショットは、ORIAがDante®Virtual Sound Cardトランスミッターデバイスから受信している様子を示していますが、同じことがどのトランスミッターデバイスにも当てはまります。

次に、ルーティングマトリックスで、送信機デバイスのチャンネルをORIAの正しいスピーカー出力にルーティングします。以下は、9.1.6 セットアップと 7.1.4 セットアップの例です。 Lw、Rw、Ltm、および Rtm スピーカー チャンネルは 7.1.4 スピーカー構成では使用されないため、7.1.4 セットアップではスキップされることに注意してください。

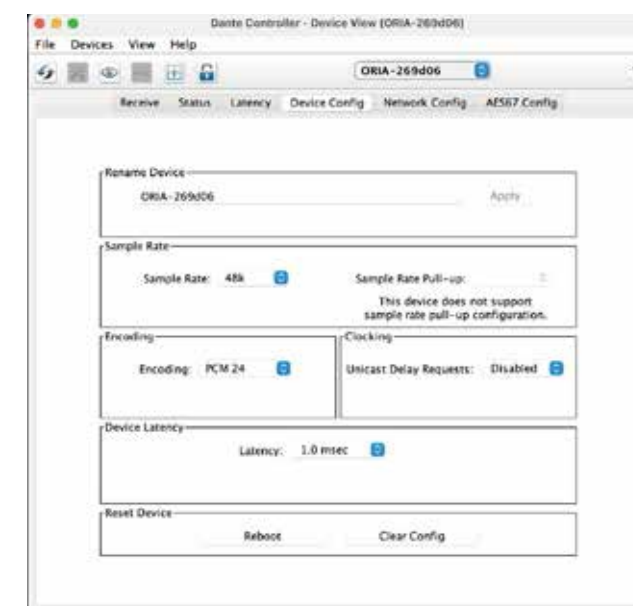
### 9.1.6



### 7.1.4



異なるサンプルレートを使用すると、デバイス間でオーディオを送信できない可能性があるため、送信デバイスと受信デバイスの両方が同じサンプルレートで実行されていることを確認することが重要です。デバイスのサンプルレートを調整するには、デバイスをダブルクリックし、「デバイス設定」タブをクリックします。

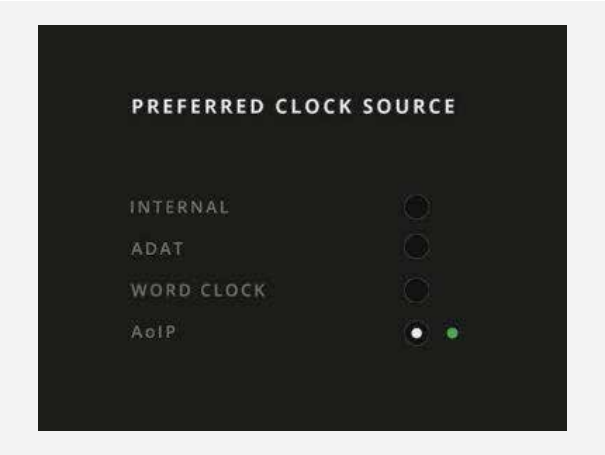


Dante©コントローラーソフトウェアを使用すると、より複雑なセットアップを作成することもできますが、これについてはこのマニュアルの範囲外です。ここで入手可能なドキュメントをさらに読むことをお勧めします：<https://www.getdante.com/product-support/dante-controller/>

ORIAデスクトップアプリのセットアップ

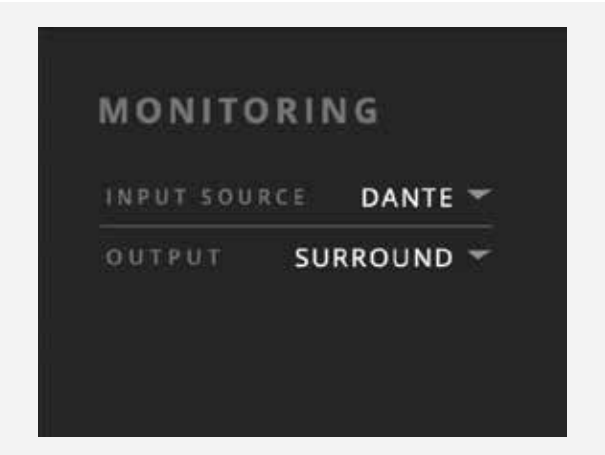
Dante©コントローラーアプリケーションでORIAを受信デバイスとして設定すると、ORIAデスクトップアプリで、Danteカード (AoIP) を入力ソースとして使用できるようになります。

まず、クロックソースを調整する必要がある場合があります。  
ORIAデスクトップアプリのシステムパネルを開き、[優先クロックソース]セクションで、AoIPがクロックソースとして設定されていることを確認します。



Dante©コントローラーソフトウェアで ORIAのサンプルレートの変更は、ORIAにすぐ反映されます。

最後に、ORIAデスクトップアプリのモニタリングセクションで、入力ソースとしてDante©を選択できます。ORIAは、Dante接続経由で受信したオーディオを再生します。



追加のクロッキング情報

AoIPクロックを優先クロックソースとして使用している場合でも、ORIAに接続されているADATデバイスを同期するために、ORIAを使用してこのクロックをBNC出力経由で分配することができます。

Danteカードを入力ソースとして使用する場合、ORIAに接続されているADATデバイスは、ORIAのBNCワードクロック出力を介してクロックされる必要があることに注意してください。ADAT入力を優先クロック入力として使用することはできません。

外部ワードクロックユニットを使用する場合は、ORIAのBNCワードクロック入力を優先クロックソースとして使用し、このクロックをAoIPネットワーク上に配信することもできます。ただし、これはこのマニュアルの範囲外です。

Dante Controlアプリケーションでクロック分配を設定する方法の詳細については、Dante Controller ユーザーマニュアルを参照してください。

# スペシフィケーション

## マイク入力:

- ゲイン: 60dB
- 最大入力レベル: +18dBu
- クロストーク: <105dB
- THD+N: 0.0015% /-96dB • EIN: -129dB
- CMRR: -85dB
- SNR: 100dB
- 周波数特性:  $\pm 0.5$ dB 20Hz~40kHz
- 入力インピーダンス: 1.5k $\Omega$  バランス

## ライン入力:

- ゲイン: -10dB~ +50dB
- 最大入力レベル: +18dBu
- THD+N: 0.0015% /-96dB
- 入力インピーダンス: 4.7k $\Omega$  バランス

## DI / 楽器入力:

- ライン: 60dB 最大入力レベル: +18dBu
- THD+N: 0.16%
- SNR: 100dB
- 周波数特性:  $\pm 0.5$ dB 20Hz~40kHz
- 入力インピーダンス: 370k $\Omega$  アンバランス

## ライン出力:

- 最大出力レベル (0dBFS時): 0dBFS = +18dBu
- THD+N: 0.0006%、-105dB
- ダイナミックレンジ: 126.5dB
- クロストーク: -123dB
- 周波数応答:  $\pm 0.3$ dB 10Hz~40kHz
- 出力インピーダンス: <100 $\Omega$  バランス

## ヘッドフォン出力:

- 最大出力レベル (0dBFS時): 0dBFS = +18dBu
- THD+N: 0.0007% (-103dB)
- ダイナミックレンジ: 124dB
- クロストーク: -115dB
- 周波数特性:  $\pm 0.25$ dB 10Hz~40kHz
- 出力インピーダンス: <50  $\Omega$  アンバランス
- 最大レベル @ 30R: 5.47V ピーク、3.87Vrms、997mW
- 最大レベル @ 60R: 7.4V ピーク、5.29Vrms、912mW
- 最大レベル @ 600R: 8.6V ピーク、6.09Vrms、123mW

## USB-C:

- コネクタ: USB Type C
- 付属ケーブル: USB Type-C to Type-C
- 入力チャンネル数: 34(アナログ $\times 2$ 、デジタル $\times 16$ 、AOIP $\times 16$ ※)
- 出力チャンネル数: 38 (20 ライン出力、2 x ステレオヘッドフォン出力、16 x AES)

※AOIPカード装着時

## デジタル入力:

- ADAT 16 チャンネル: 44.1kHz~48kHz
- ADAT 8 チャンネル (SMUX): 88.2kHz~96kHz

## ワードクロック入力および出力:

- ワードクロック: 44.1kHz~96kHz

## DSP レイテンシー:

### 往復:

- 44.1kHz – 6.5ms
- 48kHz – 6.3ms
- 88.2kHz – 5.5ms
- 96kHz – 5.4ms

## AOIP (オプションの Dante 拡張カード):

- AOIP 入力: 16 (44.1kHz ~96kHz)

## 電源:

- 入力電圧: 85 ~264VAC
- 入力周波数: 47~ 63Hz

# ソフトウェアの機能



ORIAデスクトップアプリは、スピーカーのセットの監視、調整、制御ように設計された直感的なプラットフォームであり、レイアウトや部屋に合わせてシステムを調整する機能を備えています。

Audientは、イマーシブなミキシングの旅を迅速かつ簡単に始められるように、画期的なスピーカーキャリブレーション会社であるSonarworks™と提携しました。

# Profile/プロファイル

プロファイルは、ORIAをコントロールする上で核心となる機能です。プロファイルを選択すると、ボタンを1回押すだけで、各チャンネルのすべてのキャリブレーションパラメーターとともに、そのプロファイルに割り当てられたスピーカーの選択も同時に呼び出されます。これにより、さまざまなモニター形式または特定のターゲット用に作成されたプロファイルをすばやく切り替えることができます。

ORIA本体には合計32個のプロファイルが保存できます。プロファイルはORIAのハードウェアに直接保存されますが、プロファイルパネルまたはユニットの前面にあるプロファイルボタンを使用して制御されることに注意してください。

プロファイルには、各チャンネルのEQカーブ、トリム、ディレイ、クロスオーバー、チャンネル全体のルーティングなど、すべてのスピーカーキャリブレーション設定が保存されます。

新しいプロファイルは、ORIAデスクトップアプリで手動での作成、またはSonarworks<sup>(TM)</sup>のSoundID Reference for Multichannelアプリからインポートすることによっても作成できます。

## 新しいプロファイルの作成

新しいプロファイルを作成するには、プロファイルパネルの右上にある「+」アイコンをクリックします。プロファイルに名前を付けて、「Save/保存」をクリックします。プロファイルの名前を変更するには、プロファイルを右クリックして新しい名前を入力します。

## 既存のプロファイルを複製する

既存のプロファイルを複製するには、プロファイルパネルでプロファイル名を右クリックし、「duplicate/複製する」を選択します。プロファイルのコピーが元のプロファイルの下に表示されます。

## プロファイルの名前を変更する

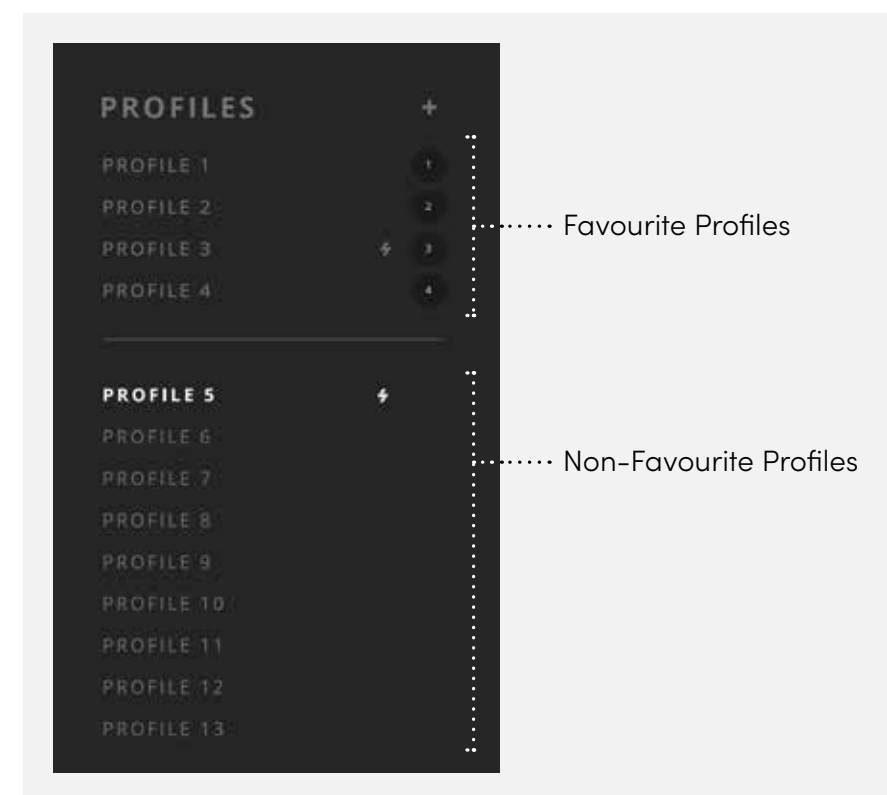
プロファイルの名前を変更するには、プロファイルパネルでプロファイル名を右クリックし、[Rename/名前の変更]を選択します。カーソルが表示され、テキストを編集できるようになります。新しい名前を入力し、完了したら Enterキーを押します。

## Delete a Profile/プロファイルの削除

プロファイルを削除するには、プロファイルパネルでプロファイル名を右クリックし、delete/削除を選択します。削除を確認するウィンドウが表示されます。

## プロファイルの編成

プロファイル リストは 2 つのセクションに分かれています。「Favorite/お気に入り」プロファイル (Favorite) は分割線の上にリスト されている 4つであり、それぞれに独自の番号が付いています。分割線より下のプロファイルは「Non-Favorite/非お気に入り」プロファイルです。





プロファイルは、選択したプロファイル上でマウスの左ボタンを押したまま、選択した場所にドラッグするだけでいつでも並べ替えることができます。プロファイルを並べ替えるときは、次のロジックが適用されます。

**Favorite/お気に入り→ Favorite/お気に入り:** 2 つのプロファイルの場所が入れ替わります。

**Favorite/お気に入り→ Non-Favorite/非お気に入り:** お気に入りのプロファイルは、ユーザーが意図した場所にドロップされます。一番上の非お気に入りのプロファイルは、お気に入りセクションに移動されます。

**非お気に入り→非お気に入り:** プロファイルはユーザーが意図した場所にドロップされ、以下のすべてのプロファイルが繰り下げされます。

**非お気に入り→お気に入り:** 非お気に入りプロファイルは、元のお気に入りプロファイルの場所に置き換えられます。元のお気に入りプロファイルが非お気に入りのリストの一番上に配置され、他のすべてのプロファイルは繰り下げされます。

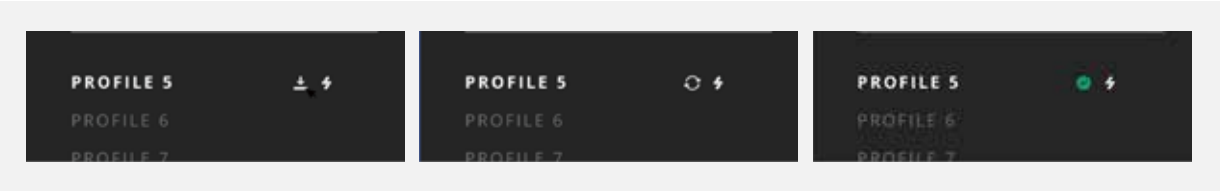
Selecting a Profile/プロファイルの選択

プロファイルを使用するには、プロファイルリストからプロファイルをクリックするだけです。選択されたプロファイルは白いテキストで強調表示され、他の非アクティブなプロファイルはグレー表示されます。

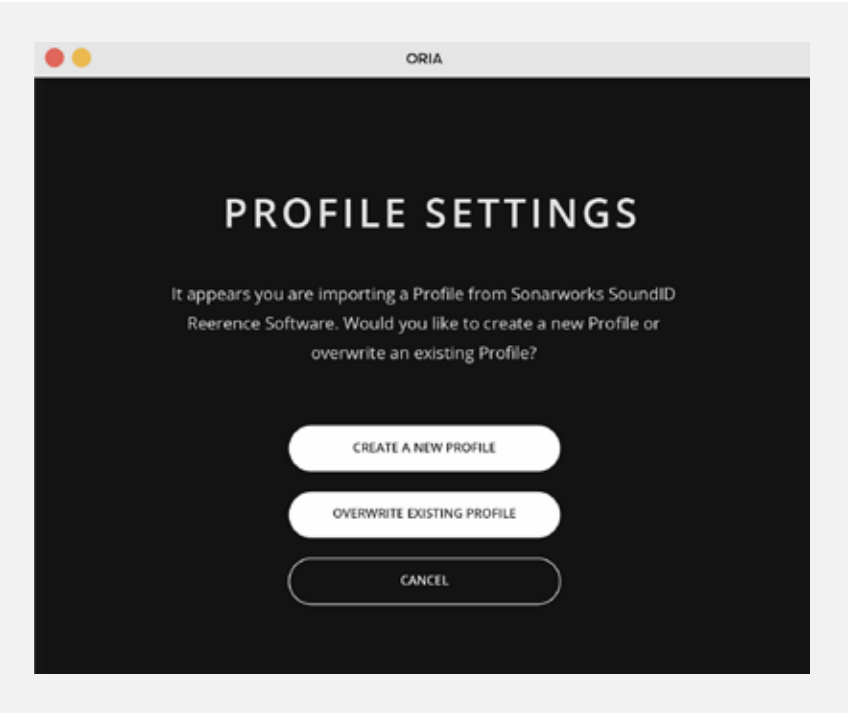
また、ユニットのフロントパネルにあるプロファイルボタンを使用して、プロファイルを選択することもできます。プロファイルボタンをタップして指定したお気に入りのプロファイルを順番に切り替えるか、長押しして全てのプロファイルリストから選択します。

Making Changes to a Profile/ プロファイルの変更

アクティブなプロファイルに変更が加えられた場合、リスト内のプロファイルの横に小さな「Save/保存」アイコンが表示されます。プロファイルを保存するには、このアイコンをクリックし、プロファイルが保存されて ORIA にロードされるまでしばらく待ちます。これが完了すると、グリーンのチェックマークが表示されます。



プロファイルを変更しようとするか、変更を保存せずにORIAアプリケーションを閉じようとする、現アクティブなプロファイルに変更を保存するか、新しいプロファイルを作成するか、または変更を破棄するかを尋ねるダイアログのボックスウィンドウが表示されます。

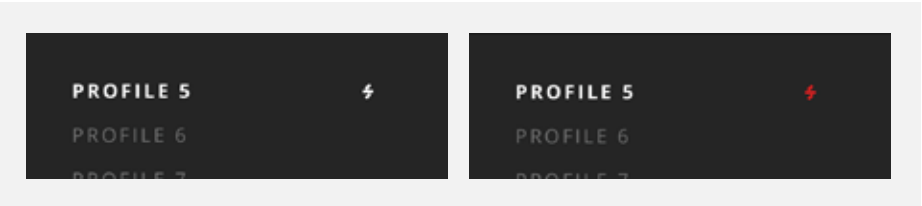


プロファイルの最大作成数は32 個のため、すべてのスロットを埋めると、「Create New Profile/新しいプロファイルの作成」がグレー表示になり、既存の設定を上書きするか、変更を破棄する必要があります。ご注意ください。

Sonarworks プロファイルステータス

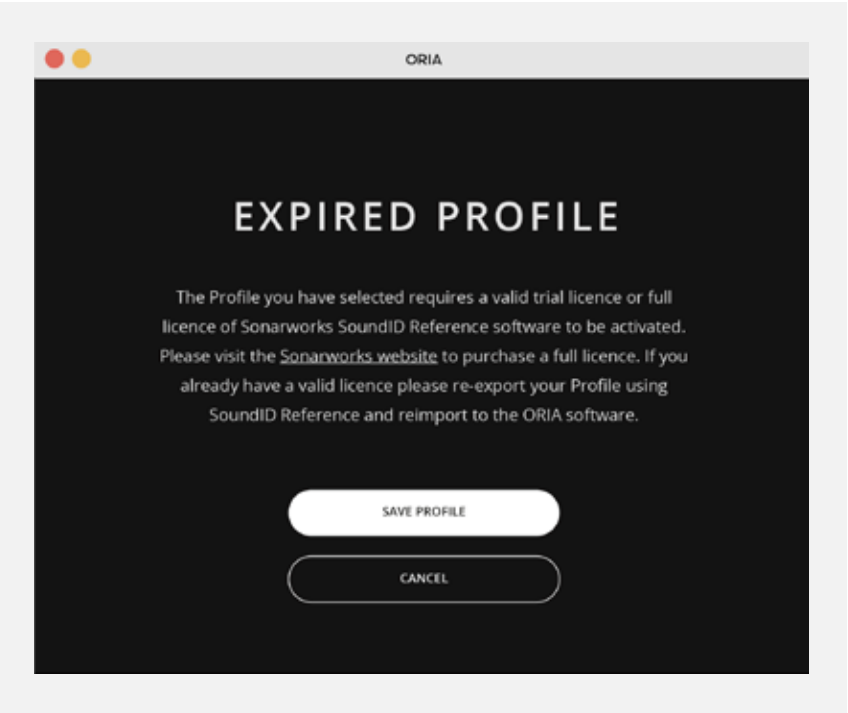
Sonarworks<sup>(TM)</sup>からプロファイルをインポートした場合は、リスト内のプロファイルの横に小さな Sonarworks ロゴが表示されます。ロゴの色は現在のステータスを示します。

- ホワイト「S」ロゴ - Sonarworks<sup>(TM)</sup> ライセンス (トライアルまたはフル) は有効です。
- レッド「S」ロゴ - Sonarworks<sup>(TM)</sup> 試用版ライセンスの有効期限が切れています。



レッドSonarworksロゴが付いたプロファイルは、アクティブプロファイルとして選択できません。

レッドロゴのあるSonarworksプロファイルを選択しようとする、ダイアログボックスが表示され、有効なSonarworksライセンスを購入するか、すでに別売りのSonarworksライセンスを購入している場合は、SoundID Reference for Multichannelソフトウェアからプロファイルを再インポートするよう求められます。



**\*\*注意:** Sonarworks<sup>TM</sup> トライアル プロファイルは、ユニットがスタンドアロン モードの場合は使用できません。トライアル期間が終了したら、Sonarworks<sup>TM</sup>フルライセンスを購入し、プロファイルをORIA Control Softwareに再エクスポートする必要があります。

# Monitoring/モニタリング

## Input Source/入力ソース

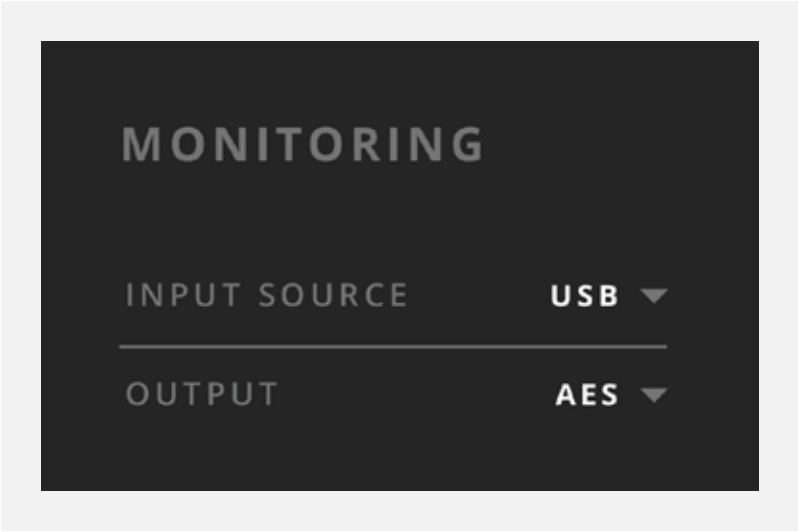
オーディオ入力を選択します。

- USB
- ADAT

## Output/出力ソース

オーディオ出力を選択します。

- ANALOG
- AES



## Volume/ボリューム

選択したスピーカーの全体の音量を制御します。これは、コントロールをクリックしてドラッグする他、本体の前面にある コントロール ホイールを使用しての制御も可能です。



## Mute/ミュート(M)

すべてのスピーカー出力をミュートします。

## DIM/ディム

あらかじめ設定したレベルだけ全体の音量を下げます。ディマーレベルは、ORIAデスクトップアプリのシステムパネルで変更できます。

Global Delay/グローバルディレイ

すべてのスピーカーに最大100ミリ秒のディレイを適用します。  
オーディオ再生をビデオソースと合わせてシンクする際に役立ちます。



Mono/モノラル (○)

モノラル互換性チェックのために左チャンネルと右チャンネルをサミングします。

Polarity/極性 (ø)

左チャンネルの位相を反転し、出力を MONO に加算します。

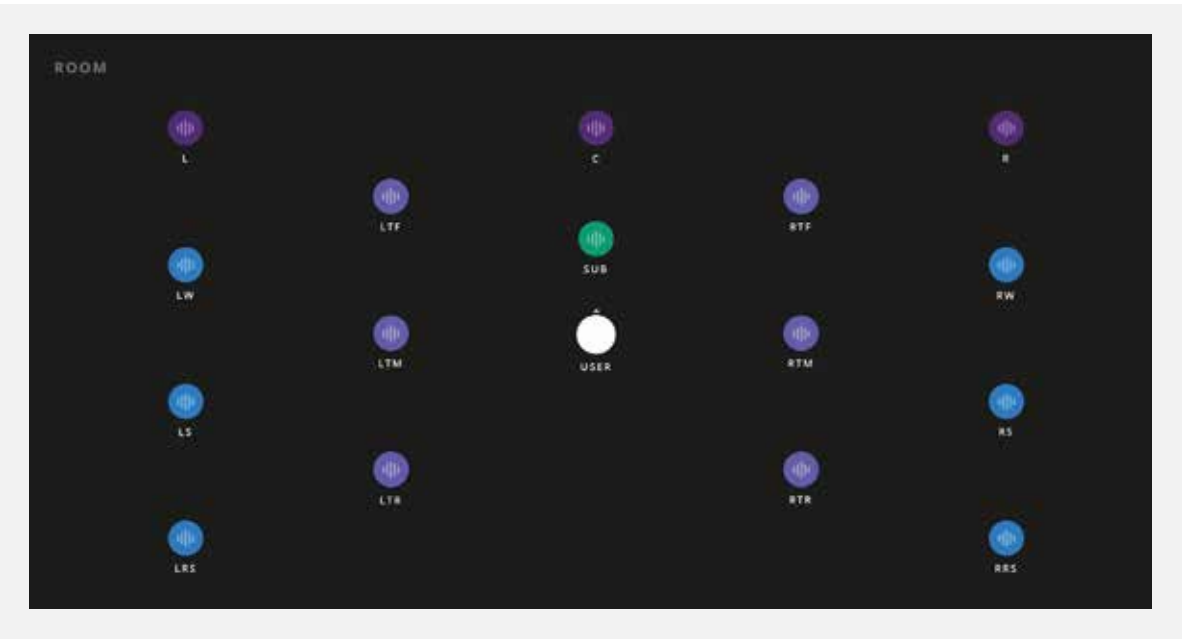
Return To Reference/リファレンスに戻る

ORIAの出力レベルを、アクティブなプロファイルに保存されている出力レベルに戻します。

Room/ルーム

このセクションでは、スピーカー構成を視覚的に表示します。  
白いUSERアイコンは、リスナーが向く方向を示します。  
ユニットの色は、スピーカーがサラウンド構成のどのグループに属しているかを示します。

- トップスピーカー=ライトパープル
- サイド、リアスピーカー=ブルー
- フロントスピーカー=ダークパープル
- サブウーファー=グリーン

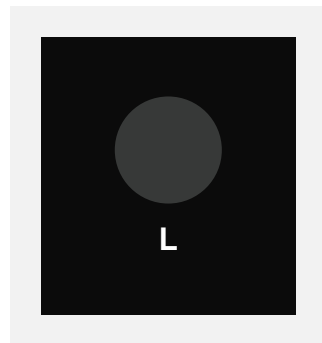


スピーカーに音声を送信されている場合は、小さな波形アイコンがスピーカー上に表示されます。  
これは、セットアップおよび調整中にどのスピーカー出力がオーディオを再生しているかを特定するために役立ちます。

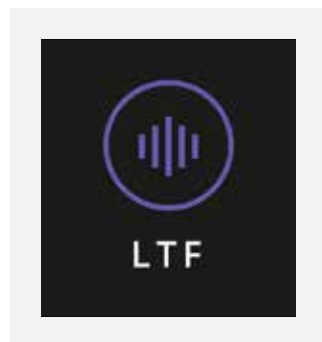
# Solo/Mute / ソロ/ミュート

次のキーボードショートカットを使用して、ルーム内のスピーカーをソロやミュートしたりできます。

- **Mute** - 左クリック



- **Solo** - Shift+左クリック



スピーカーがソロになっている間、他のすべてのスピーカーおよびグループではミュート機能が使用できなくなります。ただしユーザーは引き続き他のスピーカーを追加でソロを有効にすることができます。ソロ化されたスピーカーでは、「Post/ポスト」メーター ウィンドウで対応するメーターがアクティブになります。

ソロ/ミュート状態をクリアするには、次のショートカットを使用します。

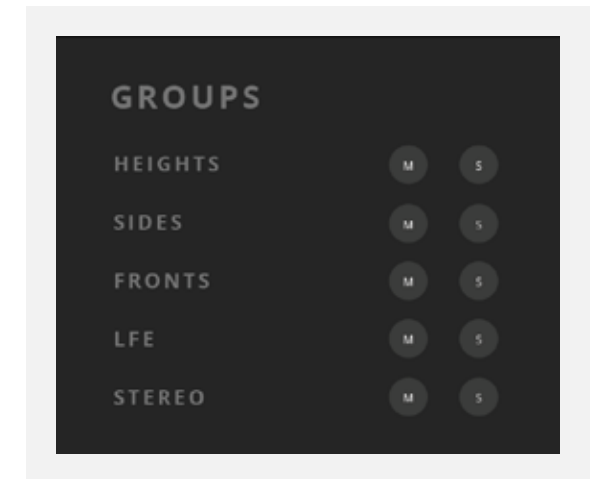
- **Option (MacOS) / Alt (Windows) + 左クリック**

ソロ化されたスピーカーをクリックすると、アクティブなソロがすべてクリアされ、ミュートされたスピーカーをクリックすると、アクティブなミュートがすべてクリアされます。

# Groups/グループ

この機能を使用すると、あらかじめ決められたスピーカーのグループをミュートまたはソロにすることができます。

- **HEIGHTS** (Ltf, Rtf, Ltm, Rtm, Ltr & Rtr)
- **SIDES** (Lw, Rw, Ls, Rs, Lrs & Rrs)
- **FRONTS** (L, R & C)
- **SUBS** (LFE/SUB)
- **STEREO** (L & R)



個々のスピーカーまたはスピーカーグループがミュートされている場合、ルームウィンドウでは表示がグレース表示されます。



同様に、1つまたは複数のスピーカーグループがソロになっている場合、他のすべてのグループはルームウィンドウでグレース表示されます。



# Metering/メータリング

ORIAデスクトップアプリは、レベル、出カルーティング、ORIAのデジタル信号処理 (DSP) を素早く確認できる簡単なメーターソリューションが用意されています。メーター設定はプロファイルデータから完全に独立しているため、プロファイル間を移動しても変更されません。

## PRE/プリ

これは、DAW出力からORIAデスクトップアプリに入力される信号を示します。デフォルトではPREが選択されています。

## POST/ポスト

これは、DSPによるプロセッシングを通過後にORIAデスクトップアプリからスピーカーに送られる信号を示しています。POSTメータリングモードでは、ボリュームコントロールがメーターの動きに反映されます。

## LFE/SUB

PREメーターモードの場合、LFEチャンネルのメーターには、DAW から LFE チャンネルに送られているオーディオのみが表示されます。ただし、POSTメーターモードの場合、メーターには、ORIAデスクトップアプリの各スピーカーチャンネルに適用したクロスオーバーから、SUBチャンネルに割り当てられているオーディオも表示されます。

このチャンネルのラベルは、この違いを示すために、PREモードの場合は「LFE」からPOSTモードの場合は「SUB」に変わります。

## スピーカーチャンネルのミュート/ソロ化

スピーカーチャンネルがミュートされている場合、同時に、このチャンネルのメーターもグレー表示になります。1つまたは複数のチャンネルがソロになっている場合、他のすべてのチャンネルはブラックアウトされます。

### スピーカーチャンネルをミュートする

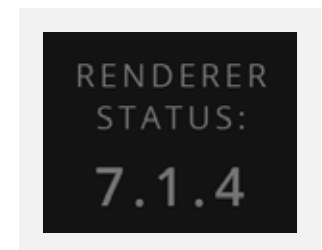


### スピーカーチャンネルのソロ化



## ダウンミックスステータス

システムパネルでDolby Atmos Rendererソフトウェアを設定している場合は、メーターの右下で現在のダウンミックスステータスをすぐに確認できます。Dolby Atmos Rendererソフトウェアが選択されていない場合、表示は現れません。



## 拡張メータリングウィンドウ

メーターパネルは独自のウィンドウに拡張できるため、ミキシング中に独立したメーター画面を最前面に表示したままにすることができます。拡張メータリングウィンドウには、dBFSスケールやピーク値などの詳細が表示されます。

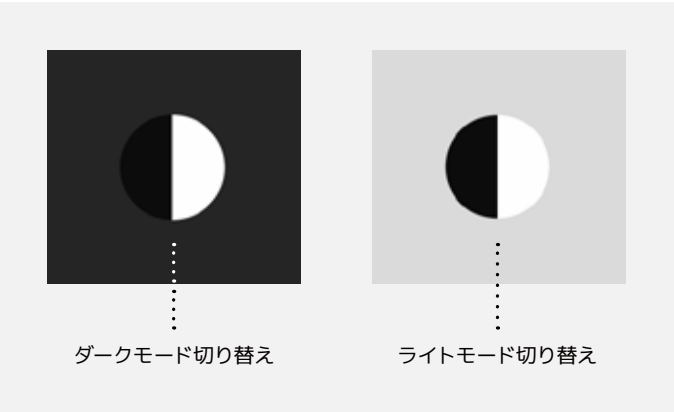




# Menu Bar/メニューバー

## Light/Dark Mode    ライト/ダークモード

ORIAデスクトップアプリは、好みやスタジオ環境に応じて、ライトモードまたはダークモードで表示できます。



## Master Bypass/マスターバイパス

[BYPASS/バイパス]ボタンにより、ORIA デスクトップ アプリのすべての DSP設定をバイパスできます。

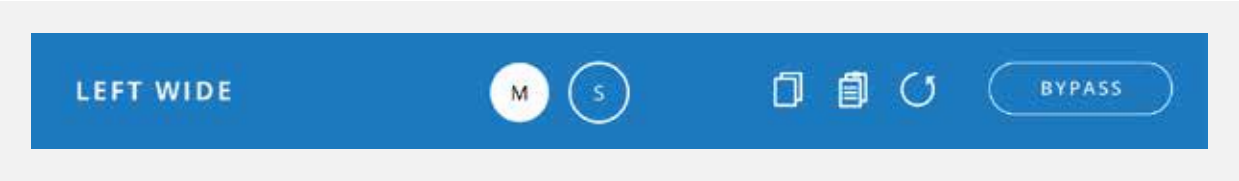
## Setup Mode/セットアップモード

このセクションでは、個々のスピーカー出力のキャリブレーション設定を手動で編集できます。  
「ROOM/ルーム」セクションのスピーカーアイコンをクリックすると、そのスピーカーの出力に関するさまざまなオプションが表示されます。選択したスピーカーの周囲に輪の表示でハイライトされ、現在編集  
中であることが示されます。



## Speaker Channel/スピーカーチャンネル

現在調整中のチャンネル名を表示します。



## Mute (M)/ミュート

選択した個々のスピーカーをミュートすることができます。  
セットアップ モードでキーボードの「M」キーを押すと、チャンネルをミュートできます。

## Solo (S)/ソロ

選択した個々のスピーカーをソロにすることができます。  
セットアップ モードでキーボードの「S」キーを押すと、チャンネルをソロにできます。

## Copy/Paste    コピー/ペースト

他のスピーカーでも同じ設定を使用したい場合は、「Copy/コピー」ボタンをクリックします。  
次に、別のチャンネルを選択して「Paste/貼り付け」ボタンをクリックすると、コピーした設定がそのチャンネルに適用されます。

そのグループ内のすべてのスピーカーに同じ設定を使用したい場合は、DSP設定をスピーカーグループに貼り付けることもできます。

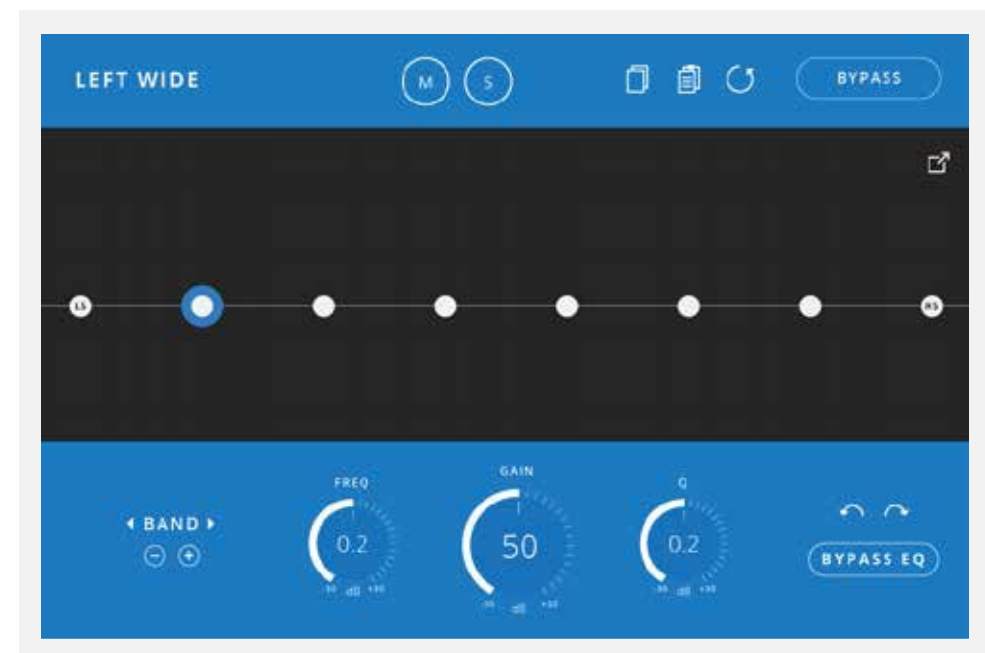
グループパネル内のスピーカーグループを「右クリック」し、「貼り付け」をクリックしてコピーするだけです。EQとクロスオーバーDSP設定のみがグループに貼り付けられることに注意してください。  
スピーカーセットアップの正確なタイムアライメントを確保するには、トリム値とディレイ値を常にスピーカーごとに設定する必要があります。

## Reset/リセット

リセットボタンはチャンネルをデフォルト設定に戻します。設定が誤ってリセットされないように、設定をリセットするかを確認するダイアログボックスが表示されます。

## EQ

デフォルトでは、スピーカー出力のキャリブレーション調整するために、チャンネル毎に8つのEQポイントが利用可能です。ただし、8つのEQポイントをすべて使用しないようにバンドを削除してより明確なグラフを作成することも、最大16のEQチャンネルを追加することもできます。



EQバンドは、チャンネル設定ウィンドウの + および - アイコンを使用して追加します。  
+ボタンを押すと、グラフ上の1kHzに新しいEQポイントが追加されます。次に、新しいバンドの周波数、Q、±dB値を入力するか、グラフ上のEQポイントを手動でドラッグします。

- ボタンを押すと、グラフ上で現在選択されているEQポイントが削除されます。

左右のバンド矢印を使用すると、グラフに表示されているEQバンド間を移動して、現在選択されているEQバンドを選べます。キーボードの左右の矢印キーを使用してバンド間を移動することもできます。

設定を間違えた場合に備えて、「Redo/元に戻す」ボタンと「Undo/やり直し」ボタンが用意されています。Bypass EQ ボタンを使用すると、この特定のチャンネルの EQ を無効にできます。

## Output Controls/出力コントロール

このセクションでは、個々のスピーカー出力毎にさまざまなオプションを制御できます。



セットアップパネルの下部には、スピーカーキャリブレーション用のさらに3つのコントロールがあります。

### Trim/トリム

Trimは、選択したスピーカーのレベルを0.1デシベル刻みで最大12 デシベル上げたり下げたりできます。このコントロールをクリックしてドラッグし、音量を調整します。あるいは、コントロールをダブルクリックして数値を手動で入力します。

### Delay/ディレイ

2番目のコントロールはDelayで、選択したスピーカーからの音声を遅延させます。これは、最適なイマーシブオーディオの音声を再現するために、各スピーカーからの音声と同時にリスニングポイントに到達するようにスピーカー信号の時間調整するのに役立ちます。

Delayコントロールの範囲は 0 ミリ秒から 75 ミリ秒まで、0.01 ミリ秒単位です。このコントロールをクリック&ドラッグしてディレイタイムを調整するか、コントロールをダブルクリックして手動で数値を入力します。ディレイコントロールには、ディレイのオンとオフを切り替えるために「オン/オフ」ボタンもあります。

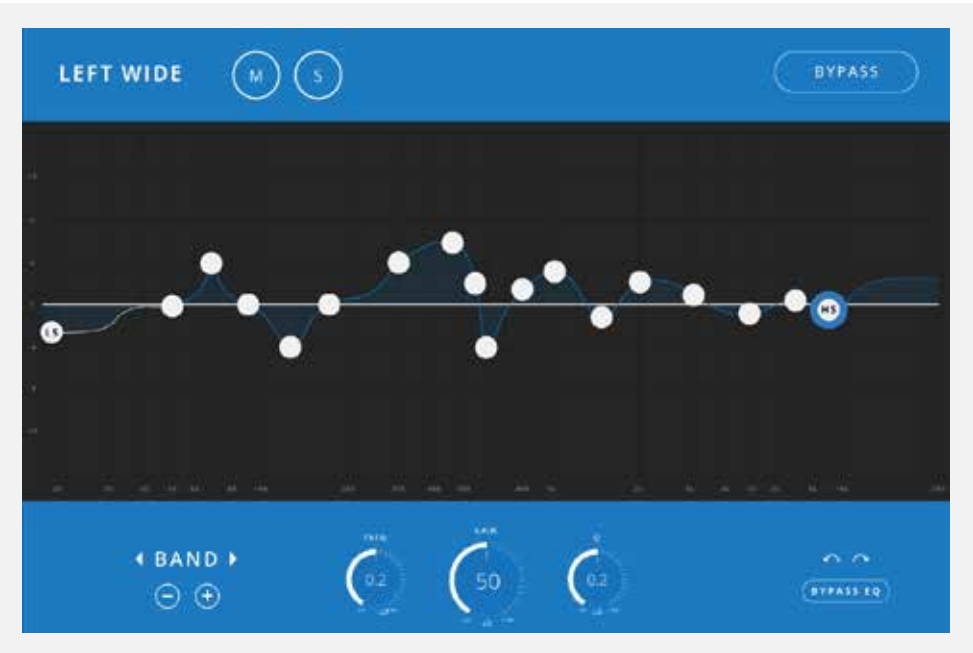
## Bass Management/Crossover ベースマネージメント/クロスオーバー

3番目のコントロールはクロスオーバーで、ベースマネージメントを設定します。「オン/オフ」ボタンをクリックして有効にすると、選択したスピーカーのベースマネージメントが有効になります。これは、表示されている周波数以下の信号がこの出力パスからカットされ、代わりにサブウーファーチャンネルに送られることを意味します。

これは、個々のスピーカーが低音域を忠実に再現できないオーディオシステムの場合は重要であるため、これらの低音域の再生をサブウーファーに担わせることで、より最適な再生音が提供される可能性があります。このコントロールをクリックしてドラッグし、クロスオーバー周波数を定義します。クロスオーバー周波数を下回るオーディオがサブウーファーに送信され、それより高い周波数のオーディオがスピーカーチャンネルに送信されます。あるいは、コントロールをダブルクリックして、手動で周波数値を入力することもできます。

Expanded EQ Window/拡張されたEQウィンドウ

EQ設定をより正確に調整するには、[Expand/展開] ボタンをクリックすると、より大きなポップアップウィンドウでEQ設定が開きます。



Expanded EQウィンドウは、画面設定に合わせてサイズが変更できます。サイズ変更アイコンが表示されるまでマウスポインターをウィンドウの端の上に置くと、ウィンドウのサイズを変更できます。その後、必要に応じてウィンドウをドラッグして小さくしたり大きくしたりできます。

拡張EQウィンドウには、X 軸に周波数値、Y 軸にdB ブースト/カット値を含む、より詳細なグラフが表示されます。

Expanded EQウィンドウの左上隅に、現在編集しているスピーカーチャンネルを選択できるドロップダウンメニューがあります。

低レイテンシー ソフトウェア ミキサー

ORIAデスクトップアプリにはソフトウェアミキサーが含まれており、ほぼゼロのレイテンシーで入力を直接モニタリングする機能を提供してくれます。これは、トラッキングにマイクとデジタル入力を使用する場合に最適です。



ソフトウェアミキサーは、最大3つのステレオミックスの作成を可能にします。トラッキング中にエンジニアがモニタリングできるように、スタジオモニターにフィードするように設計されたマスターミックスがあります。また、アーティストのフォールドバックを可能にするためにヘッドフォン出力に供給するために通常使用される2つのCUEミックスもあります。

ソフトウェアミキサーには、ORIAデスクトップアプリのメニューバーにある [Mixer/ミキサー] ボタンをクリックしてアクセスします。あるいは、macOS または Windowsメニューバーで **[Window/ウィンドウ] > [Show Mixer Window/ミキサー ウィンドウを表示]** に移動してミキサーにアクセスすることもできます。マウスを使わずにコントロールするには、次のキーボードショートカットを使用してソフトウェアミキサーを開閉することもできます。

**macOS** - Command + Shift + X

**Windows** - CTRL + Shift + X

Channel Types/チャンネルタイプ

ミキサーは3つのチャンネルタイプで構成されます。



Microphone Channels/マイクチャンネル

これらは、ORIAの2つのアナログ入力からの信号が表示されるチャンネルです。

デジタルチャンネル

これらのチャンネルでは、ORIAの2つのADAT入力を介して提供される16デジタルチャンネルからの信号を確認できます。88.2kHz または 96kHz サンプルレートを使用する場合は、ADATポートがチャンネル数を減らしたSMUXモード（ポートあたり 4 チャンネル）で動作するため、デジタルチャンネルの数が8に減ることに注意してください。

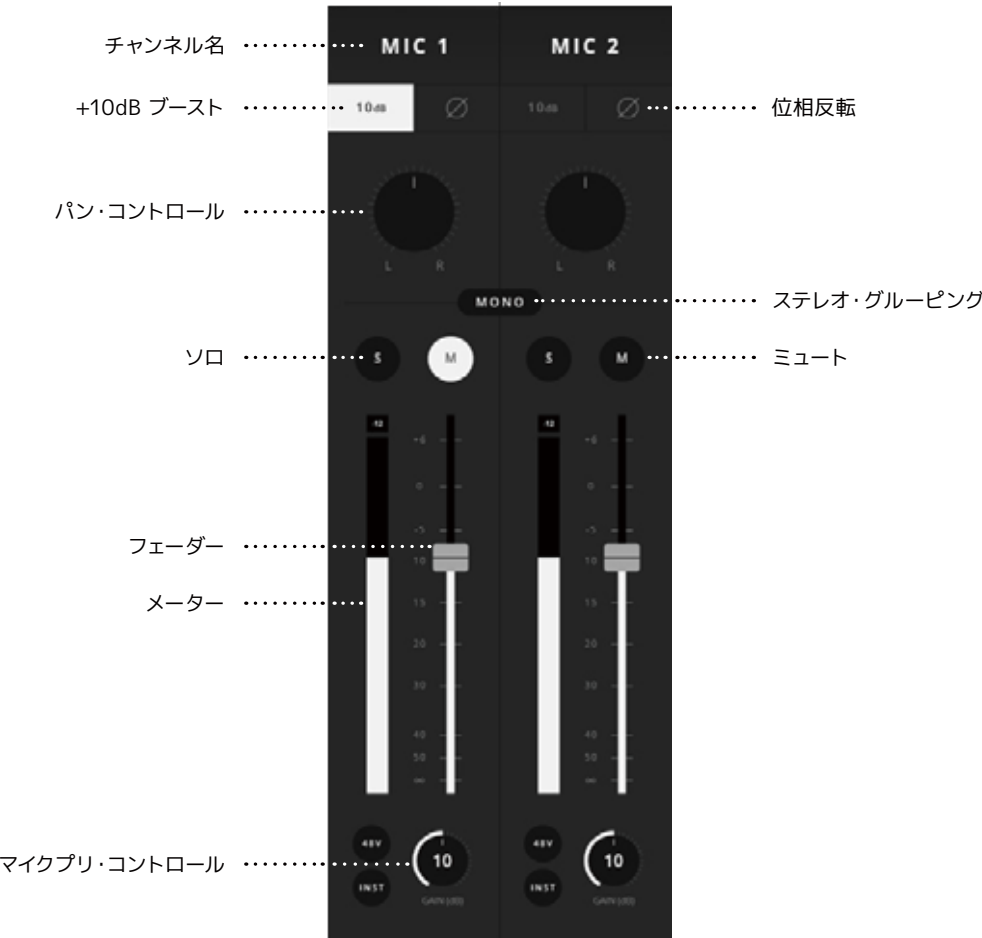
DAWチャンネル

これらはDAWから再生される信号です。ORIAには8つのDAWリターンチャンネルがあるため、DAWから複数の出力を使用して、より複雑なフォールドバックミックスを行うことができます。DAWチャンネルは、DAWの出力チャンネル17 ～ 24から供給されます。

これら3つのチャンネルタイプを使用して、メインモニターミックスと最大2つのキューミックスを構築できます。ORIAソフトウェアミキサーのフェーダーは、ORIAのモニタリングのみを制御することに注意することが重要です。ORIAソフトウェアミキサーでフェーダーの位置を変更しても、DAWやオーディオソフトウェアのレベルには影響しません。

Channel Features/チャンネルの特徴

各チャンネルには、モニタリングとCUEミックスの作成に役立つ多数のコントロールがあります。一部の機能はすべてのチャンネル タイプで利用できるわけではないことに注意してください。



Channel Name/チャンネル名

チャンネル名をダブルクリックすると、ORIAソフトウェアミキサーを整理しやすいように名前を変更できます。例えば、チャンネルに「Kick/キック」または「Snare/スネア」という名前を付けることができます。

Phase Flip/位相反転

位相キャンセル止めるために信号の極性を180反転します。これは、ギターアンプの背面またはスネアドラムの下面をマイキングする場合に便利です。この機能はマイクチャンネルとデジタルチャンネルにのみ存在します。

+10dB Boost/+10dBブースト

これを選択すると、信号レベルの低いソースを録音するために入力信号が+10dBブーストされます。これは、DAWに入力されるオーディオにも影響します。この機能はマイクチャンネルにのみ存在します。



**Pan Control/パンコントロール**

オーディオをメインモニターミックスまたはキューミックスを、レフト、ライト、またはその間の任意の場所に送れます。

**Stereo Grouping/ステレオグルーピング**

1つのフェーダーで両方のチャンネルのレベルを制御し、隣接する2つのチャンネルを1つのステレオチャンネルにグループ化できます。チャンネルがステレオグループ化されている場合、パンは自動的に左端と右端に設定されます。

**Solo/ソロ**

Soloボタンは、現在ソロになっているチャンネル以外のすべてのチャンネルをミュートします。複数のチャンネルを一度にソロ化できます。

**Mute/ミュート**

[ミュート] ボタンは、オンになっている間、このチャンネルのオーディオ出力を停止します。

**Fader/フェーダー**

フェーダーは、現在選択されているミックスに送られる信号量を制御します。これは、-inf dB ~ +6dB の間の任意の場所に設定できます。

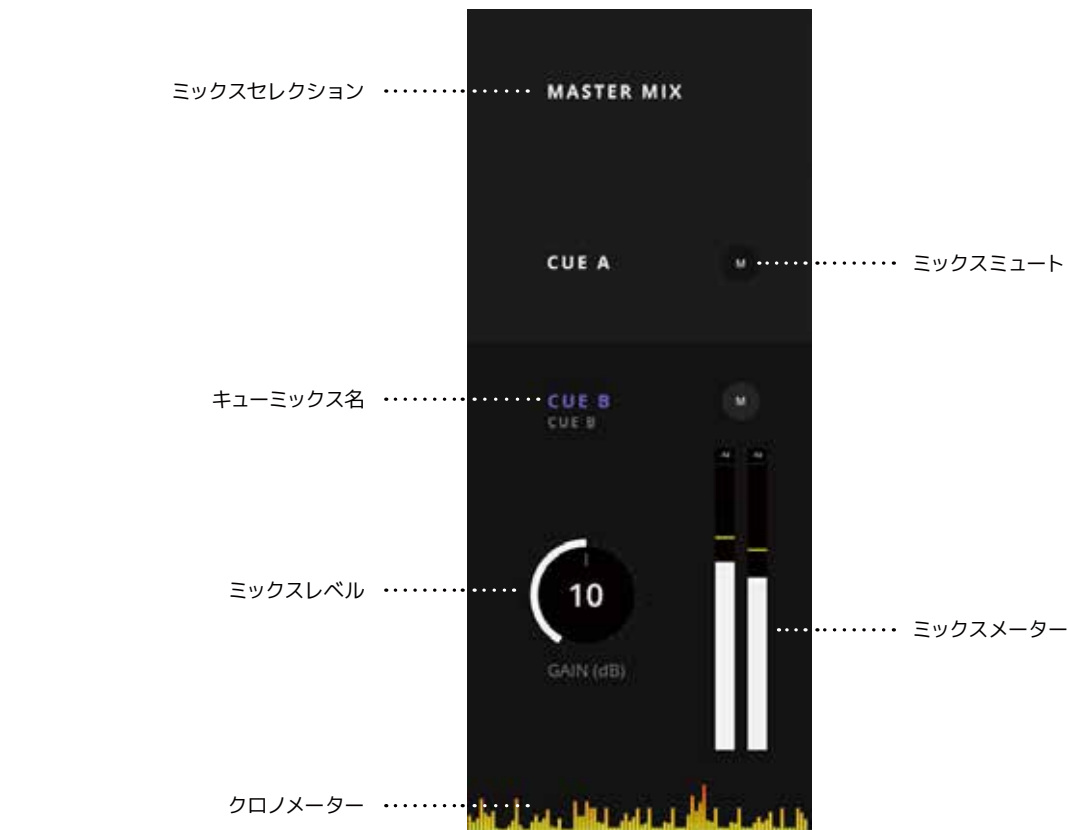
**Meter/メーター**

メーターには現在の信号レベルがdBFSで表示されます。信号レベルが 0dBFS を超えると、ピークインジケーターがレッドに点灯してピークを示します。ピークインジケーターをクリックすると、ピークインジケーターをオフにできます。Alt + クリックですべてのピークインジケーターをオフにすることもできます。

**Mic Preamp Controls/マイクプリアンプコントロール**

これらのコントロールを使用すると、マイクプリアンプのゲインを調整したり、そのチャンネルの+48V ファンタム電源とインストゥルメントモードを切り替えることができます。この機能はマイクチャンネルでのみ使用できます。

**Mix Settings/ミックスセッティング**



**Mix Selection/ミックスセレクション**

ミックスの1つをクリックすると、そのミックスに変更を加えることができます。ミックスを選択すると、展開してそのミックスの追加のコントロールが表示されます。

**Cue Mix Name/キューミックス名**

キューミックス名をダブルクリックすると、キューミックスの名前が変更できます。たとえば、2人の別々のバンドメンバーのミックスを作成している場合は、「ギタリスト」、「ベーシスト」などの名前を付けることができます。

**Mix Mute/ミックスミュート**

各キューミックスの [Mute/ミュート] ボタンは、そのキューミックスから出力されるオーディオを停止します。

**Mix Level/ミックスレベル**

ミックスレベルを使用すると、出力に送信されるキューミックスの全体的なレベルを制御できます。



### Mix Meters/ミックスメーター

ミックスメーターには、選択したミックスのマスター信号レベルが表示されます。

### Chronometer/クロノメーター

クロノメーターを使用すると、ミックスの現信号レベルだけでなく、数秒前の信号レベルも確認できます。これは、特定のキューミックス上の突然の大音量のトランジェントを追跡したり、ミックスに変更を加えたときの時間の経過に伴うレベルの変化を監視したりするのに最適です。

## Master Section/マスターセクション



### Channel Views/チャンネルビュー

これら3つのボタンを使用すると、3つのチャンネルタイプのうちどれをミキサーに表示するかを選択できます。たとえば、特定のプロジェクトでデジタル入力を使用していない場合は、OPTコントロールをクリックするだけでオプティカルチャンネルを非表示にすることができます。

### Master Volume/マスターボリューム

ミキサーアプリのマスターボリュームコントロールは、メインのコントロール ウィンドウに戻ったり、ORIA ユニット自体のボリューム コントロールを使用したりすることなく、ORIAの全体的なレベルをコントロールできます。

### Monitor Controls/モニターコントロール

これら6つのボタンは、メインコントロールウィンドウに戻ることなく、ORIAのモニターコントローラー機能のさまざまな側面をコントロールできます。各コントロールの機能は以下のとおりです。：

- **Mute/ミュート** - ORIAの出力にグローバルミュートとして働きます。
- **DIM/ディム** - ORIAデスクトップアプリのシステムパネルで設定されたユーザー設定値だけ、ORIAの出力レベルを下げます。
- **Phase/フェーズ** - ステレオ出力の左チャンネルの位相を反転し、信号をモノラルに加算します。これにより、中央でパンされたオーディオの位相がキャンセルされ、「サイド」と呼ばれることもある左または右にパンされたオーディオのモニタリングが可能になります。この機能は、サラウンドまたはイマーシブフォーマットでオーディオを再生するときにも使用した場合でも、左チャンネルと右チャンネルにのみ影響します。
- **Mono/モノラル** - ORIA の左右の出力チャンネルをモノラルに加えます。これは、ステレオミックスのモノラル互換性を確認するのに役立ちます。

## ミキサーの使用例

ORIAの主な機能は、イマーシブおよびマルチチャンネルオーディオフォーマットに強力なモニタリングコントロールを提供することですが、2つのマイクプリアンプとADAT入力を活用して、小規模なトラッキングセッションにも使用できます。これは、ミックスの段階でセクションを迅速に録音または追加する必要がある場合に非常に便利です。

低レイテンシーソフトウェアミキサーは、マイク入力またはADAT入力からの信号をほぼゼロのレイテンシーでモニタリングできるため、エンジニアがオーディオをモニタリングしたり、アーティストが演奏中にヘッドフォンで自分のプレイをモニターできます。

この例では、ボーカリストがマイク入力 1に接続されたマイクを介してボーカルラインを録音していると想像できます。

まず、エンジニアのモニタリングをセットアップします。このために、ミキサーの右側にあるこのミックスをクリックしてマスターミックスを使用します。ORIAデスクトップアプリでは、入力ソースを「Master Mix/マスターミックス」として設定します。

エンジニアはボーカリストからのオーディオを聞く必要があるため、これをマスターミックスへ送るには、マイク1チャンネルのフェーダーを上げます。エンジニアはDAWからミックスの残りのソースを聞く必要があるため、DAW1+2チャンネルをプルアップします。これら2つのソース間のバランスは、チャンネルフェーダーで調整できます。

ボーカリストはマイクの音声とバックিং トラックを聞く必要もあります。これは CUE A ミックスで行います。これは、ORIA アプリのシステム パネルでヘッドフォン出力に割り当ててモニターします。

ソフトウェア ミキサーで、ミキサーの右側にある CUE A ミックスをクリックして選択します。この時点で、ミックス設定の CUE A タイトルをダブルクリックして、ミックスの名前をボーカリストの名前に変更することもできます。

CUE を選択すると、Mic 1 および DAW 1+2 チャンネルのフェーダーを上げることができます。ボーカリストは、DAW 3+4 などの別のチャンネルで DAW から出力されているクリック トラックを聴きたい場合があります。したがって、DAW 3+4 フェーダーを引き上げてクリックを CUE ミックスに送り、再びフェーダーでアーティストの好みに合わせてさまざまなチャンネル間のバランスを調整します。

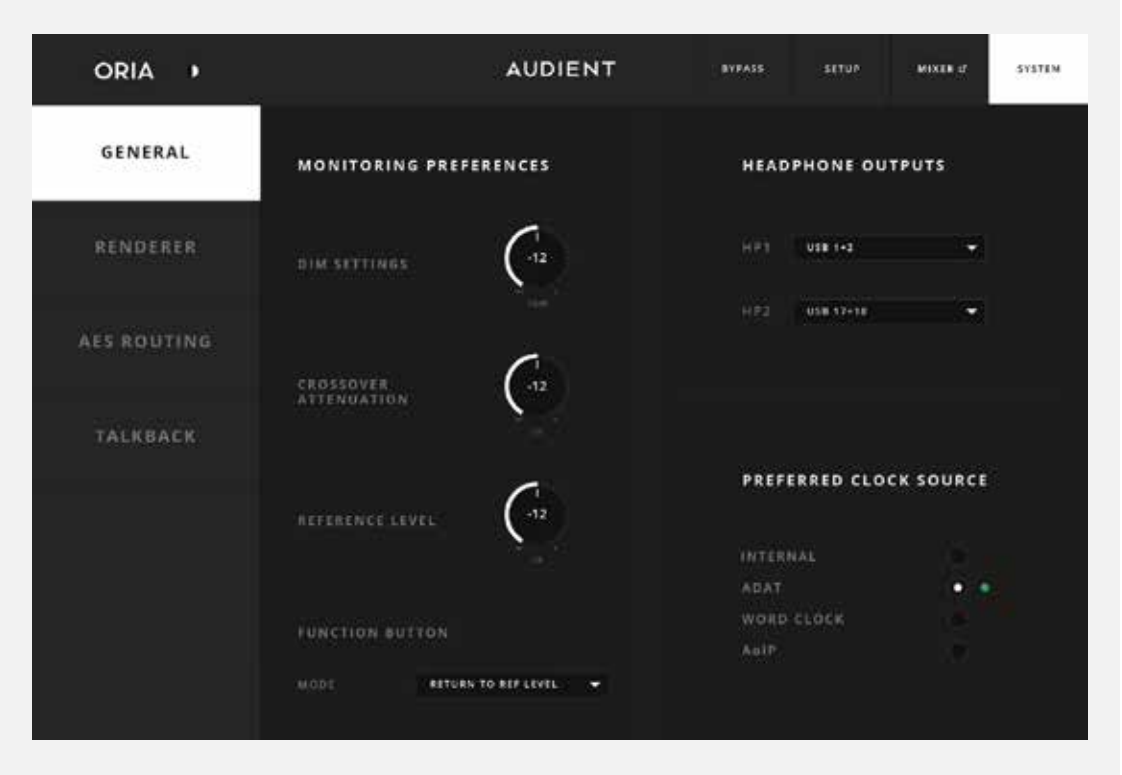
ヘッドフォンを選択したヘッドフォン出力に接続し、アーティストに提供できます。

2人目のアーティストがセッションに含まれている場合は、上記のサンプルプロセスに従って、CUE B経由で別のミックスを作成します。

# System Panel/システムパネル

ORIAデスクトップ アプリの上部にあるSystem Panel/システムパネルでは、接続と制御のためのより高度な設定を内部的に見ることができます。システムパネルは3つの異なるページに分割されており、左側のタブから選択できます。

## General



## DIM Trim/ディムトリム

DIM機能を有効にしたときにレベルをどれだけ下げるかを調整します。

## Crossover Attenuation/クロスオーバー減衰

このコントロールを使用すると、クロスオーバー経由でサブチャンネルへ送られる信号にグローバル・アテニュエーション（レベル減衰）が適用できます。一部のイマーシブおよびサラウンドフォーマットでは、LFEチャンネルオーディオとクロスオーバーを介してサブチャンネルにルーティングされるオーディオの間の正しいバランスを確保するために、サブクロスオーバーに適用される減衰量を規定するため、これが必要です。

0dB から -10dB までの減衰可能です。

## Reference Volume/リファレンスボリューム

このコントロールは、「Return to Reference Level」機能を使用するときにORIAのメイン出力レベルが設定される基準音量が設定します。

## Function Button/ファンクションボタン

ORIAのフロントパネルにある「Function」ボタンの動作を次のオプションから選択します。

- **DIM** (デフォルト)
- **Talkback**/トークバック
- **Return to Reference Level** /リファレンスレベルへ戻る
- **Mono**/モノラル
- **Polarity Reverse**/極性反転

**ノート:** ハードウェア機能ボタンに割り当てられたモニタリング機能は、プロファイルの一部としては保存されません。これらはシステム全体にわたる設定になります。

## Preferred Clock Source/クロックソースについて

この設定ではクロックソースが選択できます。  
デフォルトでは内部に設定されていますが、インターナル、ADAT、またはワードクロックから選べます。

外部クロックソースを選択すると、クロックソースの右側にクロックインジケータが表示されます。  
この色によってクロックの状態がわかります。

- **レッド:** 有効なクロックが検出されていない。
- **アンバー:** 間違ったサンプルレートでクロックが検出された。
- **グリーン:** 正しいサンプルレートでクロックが検出された。

インジケータがレッドの場合は、ユニットへの物理的な接続を再確認し、正しいソースが選択されていることを確認してください。

インジケータがアンバーの場合は、ORIAのサンプルレートまたは外部デバイスのサンプルレートを調整して、2つのデバイスが同じサンプルレートで動作するようにします。

クロックインジケータがグリーンの場合は、すべてが正しく設定されていることを意味します。

## Headphone Setup/ヘッドフォンのセットアップ

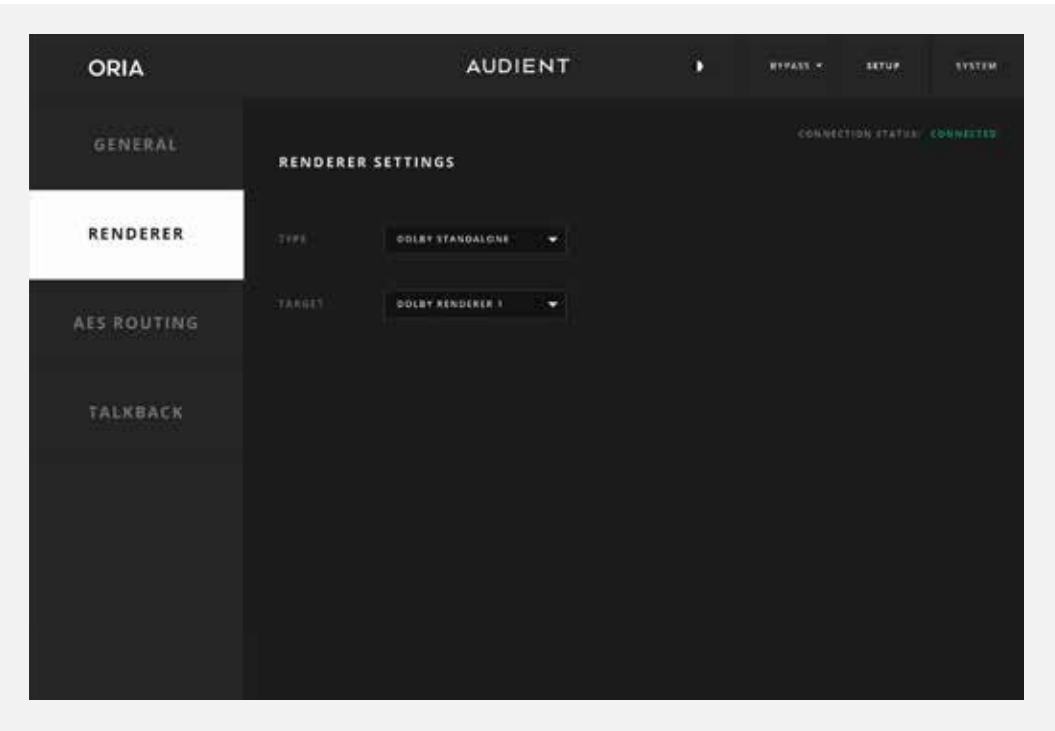
ORIAのどの出力チャンネルを二つのヘッドフォン出力へ供給するかを次のオプションから選択できます。

- **USB** L + R
- **USB** 17 + 18
- **USB** 19 + 20

ほとんどのレンダラーでは、個別のバイノーラルミックスをヘッドフォン出力に送信できます。  
この場合、レンダラーでバイノーラル出力チャンネルとして、出力 17+18 または出力 19+20 を選択し、選んだチャンネルをヘッドフォンソースとして選択します。

## Renderer/レンダラー

レンダラーページは、ORIAをドルビーアトモスレンダラーに直接接続するためのものです。  
ORIAハードウェアのダウンミックスボタンを使用して、さまざまなダウンミキシングフォーマットのオプションを切り替えるだけでなく、ドルビーアトモスレンダラーがORIAに情報をフィードバックできるようにするためにも使用されます。ダウンミックス形式を使用します。



## Type/タイプ

システム上でDolbyレンダラーが開いていることを確認してから、Dolby Atmosレンダラーを選択します。

## Target/ターゲット

選択したタイプのシステムで使用可能なレンダラーのリストから選択します。

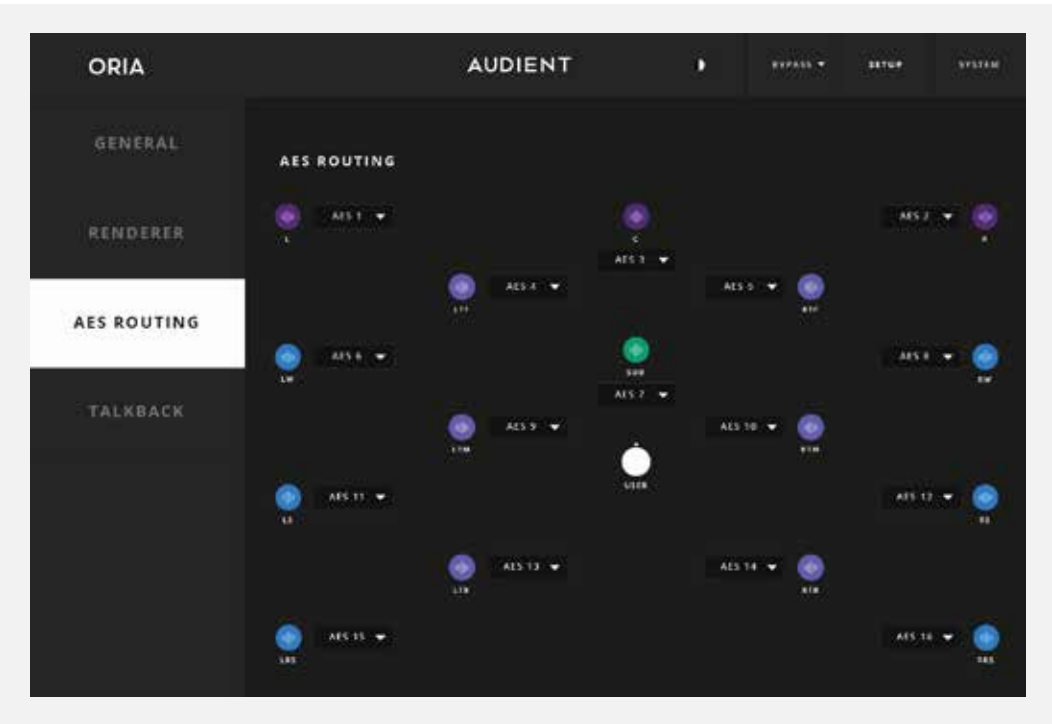
Dolby Atmosレンダラーが開いていて、同じコンピューター上で実行されている場合、そのコンピューターの名前が[Target/ターゲット]ドロップダウンリストに表示されます。ローカルターゲットを選択すると、パネルの右上にある接続ステータスが「Unavailable/利用不可」から「Connected/接続済み」に変わります。

## Manual Address/手動アドレス

ここで「ターゲット」リストから「Manual Address/手動アドレス」を選択した場合、ローカルマシンではなくネットワーク上のレンダラーを制御したい場合は、特定のレンダラーのIPアドレスを入力できます。

## AES Routing/AESルーティング

AES出力を使用してモニターに信号を供給する場合は、ケーブルの取り付けを容易にするためにスピーカーチャンネルを再割り当てすることをお勧めします。



「AESルーティング」ページでは、AES出力の順序を変更して、スタジオでのケーブルルーティングを簡単にできます。AESデジタルオーディオは、1本のケーブルを介して2チャンネルのデジタルストリームで提供され、ステレオ設定では、デフォルトで1つのスピーカーを別のスピーカーにチェーンで接続することが想定されています。イマーシブセットアップで、16チャンネルにわたる左右ペアでこれを行うと、ケーブルの

配線が複雑で乱雑になる可能性があります。

この問題を軽減するために、ORIAハードウェアにこの機能を実装しました。これにより、任意のスピーカー出力を任意のAESチャンネルに接続できるようになり、他の方法よりもはるかに整ったケーブルルーティングが可能になります。1つのAESストリームが 2 つの隣接するスピーカーにオーディオを提供できるようになります。

たとえば、フロント左スピーカーと左ワイドスピーカーをチェーンで接続することが望ましい場合があります。これを行うには、各デジタル AESストリームが 1 本のケーブル上で奇数と偶数のペアとして提供されるため、AES 1をフロント左スピーカーに、AES 2を左ワイドスピーカーに指定できます。

この例では、左フロントスピーカーはすでに AES 1に設定されていますが、デフォルトでAES 9を使用するように設定されている左ワイドスピーカーのルーティングを変更する必要があります。

左ワイドスピーカーの横にあるドロップダウンメニューをクリックすると、ルーティングをAES 2に変更できます。このルーティングの結果、以前に AES 2 へ割り当てられていたフロント右チャンネルが、一度に1つのスピーカーのみが AES 割り当てを使用できるため、出力の選択が解除されました。ORIA は、キャリブレーション機能とボリューム機能のルーティングを内部で処理します。

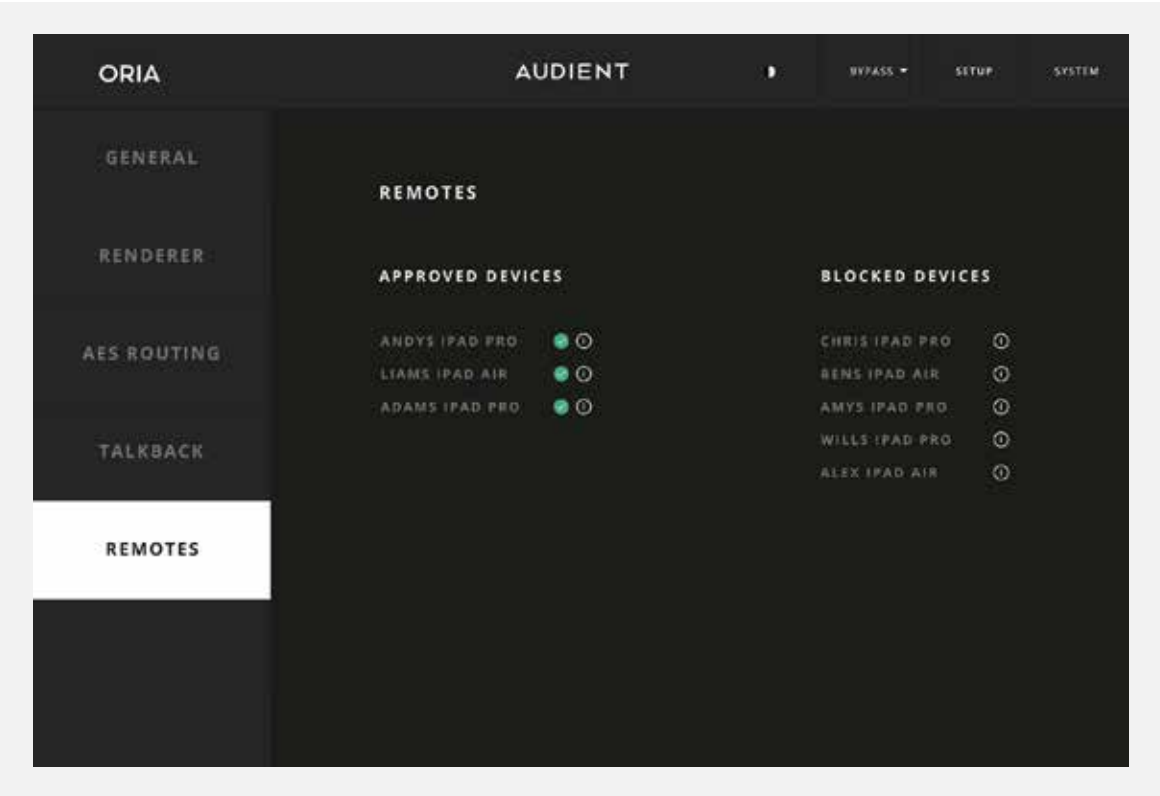
これらの設定を変更した後は、必ずチャンネルのルーティング割り当てをテストしてください。

ドロップダウンメニューを使用して、特定のスピーカー出力に割り当てるチャンネルを選択します。各出力は1つのスピーカーチャンネルにのみ割り当てられることに注意してください。スピーカーチャンネルが使用されていない場合は、「NONE/なし」を選択してください。



Remote/リモート

リモートページでは、どのデバイスがORIAをリモート コントロールできるかを制御できます。



ORIA iPad アプリを実行している iPad などのデバイスがORIAに接続しようとする、Accept/デバイスを受け入れる、Deny/拒否する、またはBlock the device/ブロックするオプションが表示されます。

要求を受け入れると、デバイスは、システム パネルの [リモート] ページにある [承認されたデバイス] のリストに追加されます。承認されたデバイスは、同じネットワーク上で使用される場合、自動的にORIAに接続されます。デバイスがORIAに接続されている場合、デバイスの横に緑色のチェックマークアイコンが表示されます。

リクエストが拒否された場合、デバイスはORIAに接続されません。ただし、デバイスは今後も引き続き接続要求を行うことができます。

それ以外の場合、リクエストがブロックされると、デバイスはORIAに接続されず、それ以降の接続リクエストもブロックされます。これは、複数のORIAユニットがある施設や、承認されたデバイス以外のリモート アクセスを制限したい教育施設等にいる場合に便利です。

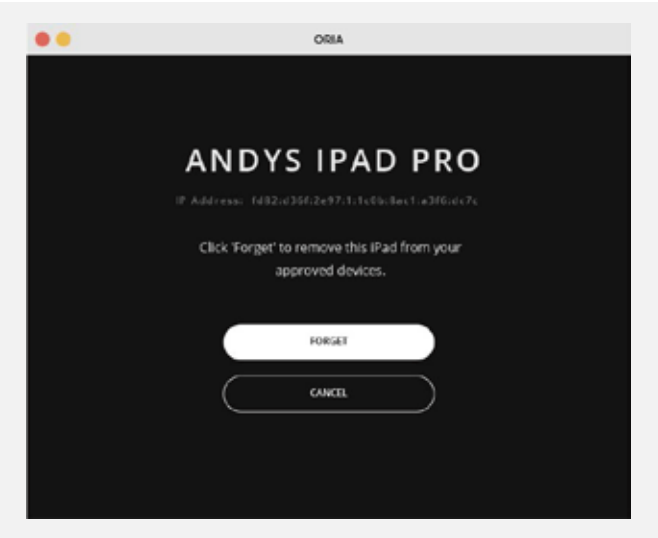
デバイスがブロックされると、そのデバイスはブロックされたデバイスのリストに追加されるため、どのデバイスをブロックしたかが簡単に確認できます。

Forgetting Approved Devices/承認されたデバイスの削除

承認済みデバイスのリストからデバイスを削除する場合は、デバイスの横にある「i」アイコンをクリックします。このデバイスを「forget/忘れる?」を確認するポップアップ通知が表示されます。

Unblocking Blocked Devices/ブロックされたデバイスのブロック解除

同様に、ブロックされたデバイスのリストからデバイスを削除する場合は、デバイスの横にある「i」アイコンをクリックします。このデバイスのブロック解除を確認するポップアップ通知が表示されます。



ブロックが解除されると、このデバイスは再び接続要求を行うことができます。



# Output Calibration/出力のキャリブレーション

スタジオスペースにさらに多くのスピーカーを追加すると、その配置と位置関係がますます重要になります。また、リスニングポジションの後ろと上にスピーカーがあるため、部屋全体が音響的な調整も考慮する必要があります。

ORIAのDSP および Sonarworks<sup>(TM)</sup> ルームキャリブレーション ツールを使用すると、スピーカーから最大限の効果を引き出すことができますが、可能な限り最高のサラウンド再生のスイートスポットを得るには、スピーカーの位置を調整し、部屋内の音響吸収および/または拡散ソリューションを改善することをお勧めします。これはキャリブレーションを試みる前に完了することが重要です。

スピーカーの配置や音響処理について不明な点がある場合は、セットアップを最大限に活用できるように、資格のある音響技師からアドバイスを受けることも強くお勧めします。

## Automatic Calibration/自動補正 - Sonarworks

ORIAを購入すると、業界をリードする測定およびキャリブレーションソフトウェアであるSoundID Reference for Multichannel by Sonarworks<sup>(TM)</sup> の60日間の無料試用版\*が利用できます。この包括的なツールは、マルチチャンネル設定を1時間以内に測定および調整できるため、(ほぼ)すぐに起動して実行できます。

\*試用期間が終了したら、Sonarworks<sup>(TM)</sup>から直接永久ライセンスを購入し、測定値をORIAデスクトップアプリに再インポートするか、セットアップモードでスピーカー出力を手動で調整する必要があります。

無料トライアル期間中に作成したプロファイルは、トライアル期間が終了すると機能しくなくなります。ORIAの箱の中には、Sonarworksリファレンスマイクと、Sonarworksでのアカウントの作成方法とSoundID Reference for Multichannel のダウンロード方法の詳細が記載された小さなカードが入っています。

下記Sonarworksのキャリブレーションビデオをご覧ください。  
<https://audient.com/landing-pages/oria-how-to-use-soundid-reference-integration/>

SoundID Reference for Multichannelをインストールしたら、画面上の指示に従って測定プロセスを進めるだけです。9.1.6 の完全な測定プロセスが完了するまでに約40 分から1時間かかります。

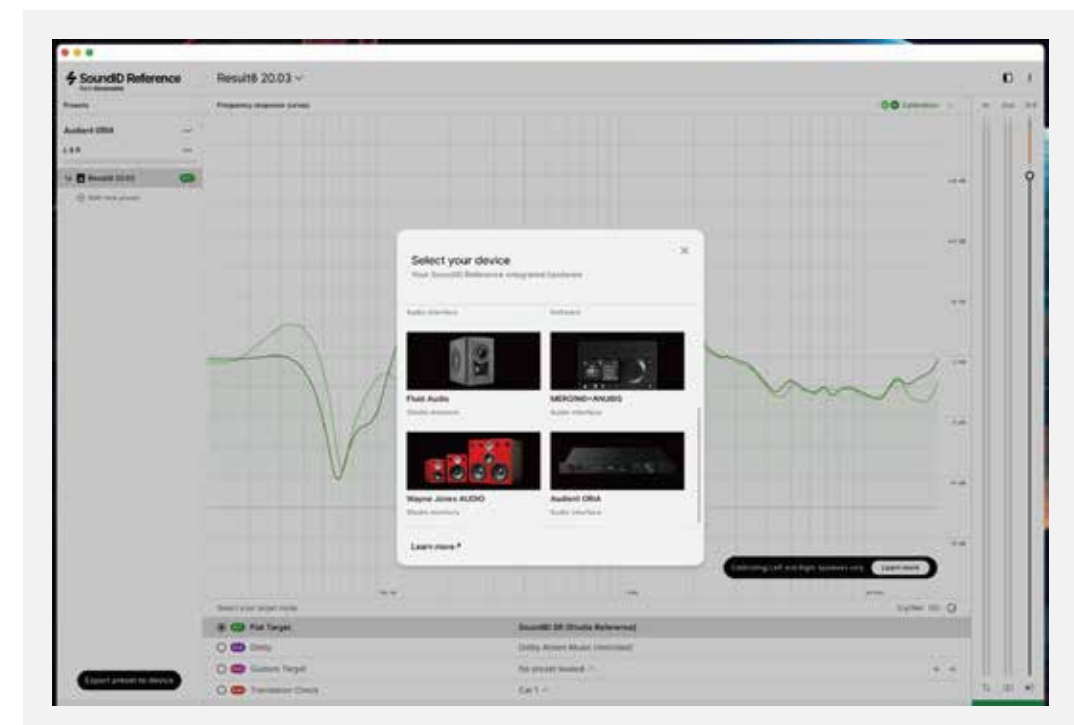
## Sonarworks SoundID Reference for Multichannel プロファイルのインポート

### macOS

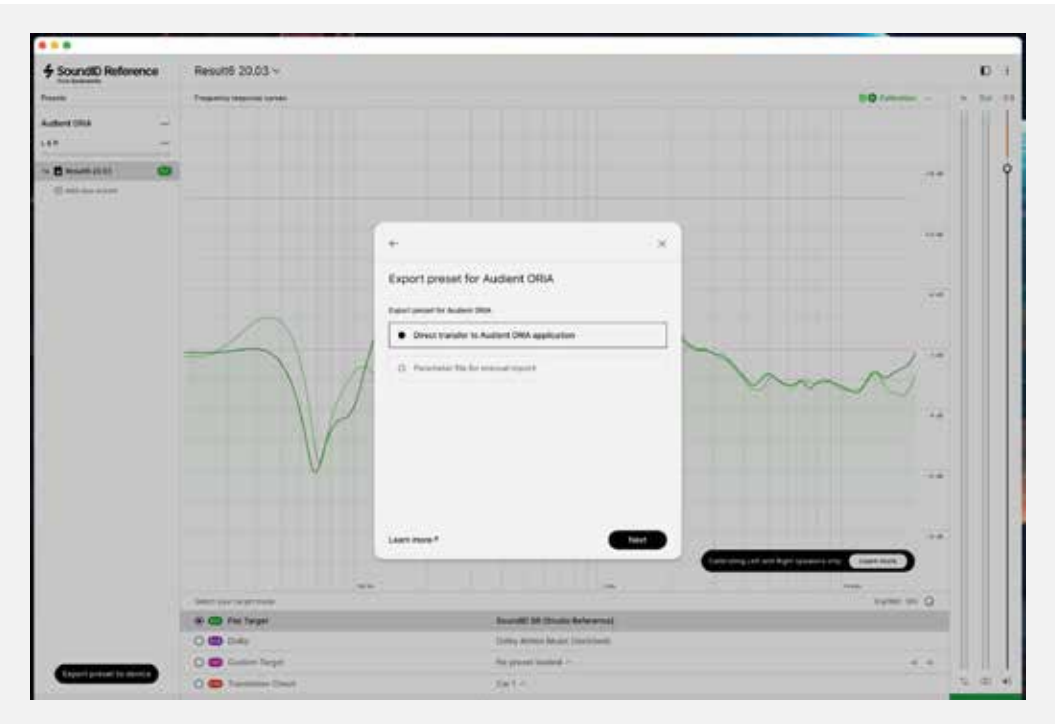
SoundID Measureを使用した測定プロセスが完了したら、測定結果をSoundID Reference for Multichannelソフトウェアにインポートします。ここでは、希望のターゲットモードでSoundIDリファレンスプロファイルを作成できます。このプロセスの詳細については、Sonarworks製品ドキュメントを参照してください。

完了すると、「Export Preset to Device/プリセットをデバイスにエクスポート」のオプションが表示されます。

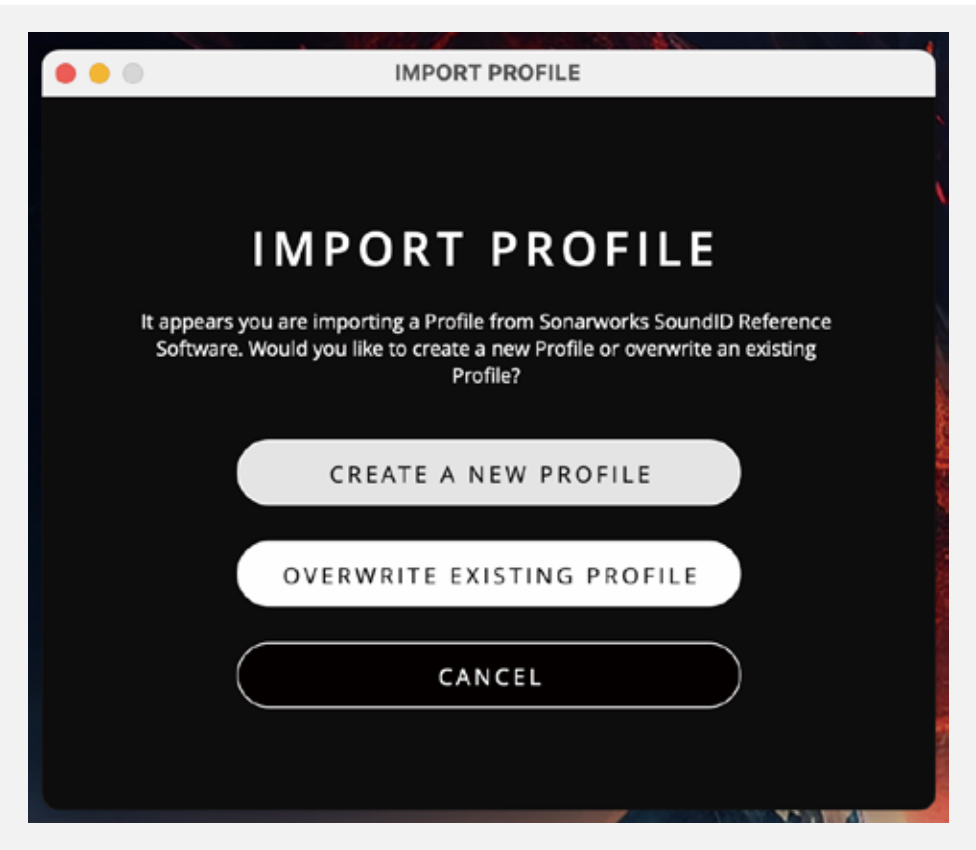
デバイスのリストからORIAを選択します。



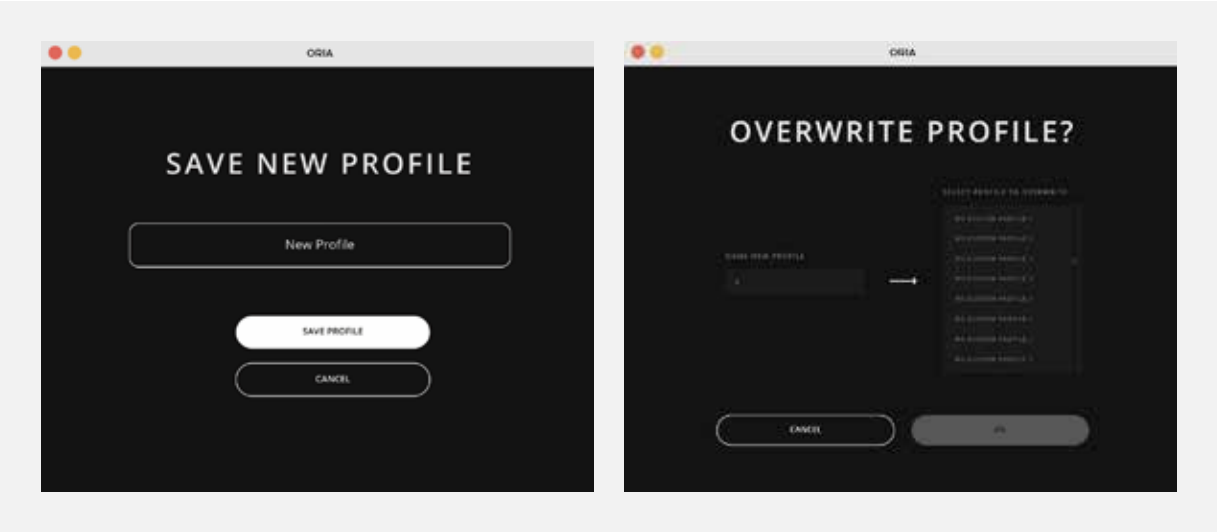
ここで、「Direct transfer to Audient ORIA application 」を選択し、「Next/次へ」をクリックします。



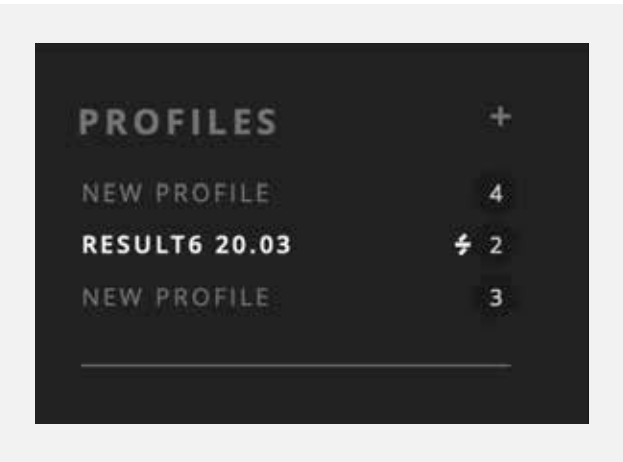
これにより、ORIAデスクトップアプリが自動的に開き、ORIAデスクトップアプリ中の既存プロファイルを上書きするか、新しいものを作成するかを選択するダイアログボックスが表示されます。



新しいプロファイルを作成する場合は、名前を付けるように求められます。既存のプロファイルを上書きすることを選択した場合、どのプロファイルを上書きできるかを選択するオプションが表示されます。



新しいプロファイルがプロファイルパネルに表示されます。SoundID Referenceで作成されたプロファイルは、プロファイル名の横にSonarworks の「S」が表示されることに注意してください。



Windows

ソフトウェアの制限により、現時点ではSonarworks SoundID ReferenceプロファイルをWindows上のORIA デスクトップ アプリにロードすることはできません。この機能は、ドライバー/ファームウェアのアップデートによって間もなく追加される予定です。

Sonarworks プロファイルを調整する

Sonarworks<sup>TM</sup> SoundID Referenceに基づいたプロファイルを使用している場合、Setup Mode/セットアップモードセクションの EQ は変更を防ぐために自動的にロックされることに注意してください。



Trim/トリム、Delay/ディレイ、Crossover/クロスオーバーのコントロールもデフォルトではロックされていますが、これらを調整することは可能です。

「Locked/ロック」ボタンをクリックしてこれらの設定のロックを解除すると、調整できるようになります。



マニュアルでのキャリブレーション

Sonarworksを使用したくない場合は、代わりにサードパーティの測定ソフトウェアを使用できます。付属のSonarworksリファレンスマイクをこのために使用することも、必要に応じて他のリファレンスマイクを使用することも可能です。

サードパーティ製ソフトウェアを使用している場合、設定をORIAに直接インポートすることはできないため、測定結果のスピーカーキャリブレーション設定を手動で入力します。

サードパーティ製ソフトウェアでは、各チャンネルに適用できるEQカーブや、トリムとディレイの設定が提供されます。このマニュアルの前半の「Setup Menu/セットアップメニュー」セクションで説明したように、これらの設定はチャンネルごとに手動で入力できます。

手動で調整する場合、スピーカーチャンネルごとに以下が調整できます。

- **EQ** (8バンド、+/-12db、20Hz - 20kHz + ハイシェルフおよびローシェルフ)
- **Output Trim** / 出力トリム (+/-6db))
- **Delay Time** / ディレイタイム (0～75ms)
- **Crossover Point** / クロスオーバーポイント (30Hz～500Hz)

これにより、スピーカー構成のバランスをとり、可能な限り最高のサラウンド再生のスイートスポットを得ることができます。

# iPad コントロール

## ORIA iPad App

ORIAのiPadアプリを使えば、1つの集中制御ハブから、すべての制御機能に即座にリモートアクセスできます。レベル調整、スピーカーの試聴、プロファイルの切り替え、メータリングの監視など、すべてをデスクトップから直接行えます。複雑さを排除した正確なコントロールが手に入ります。



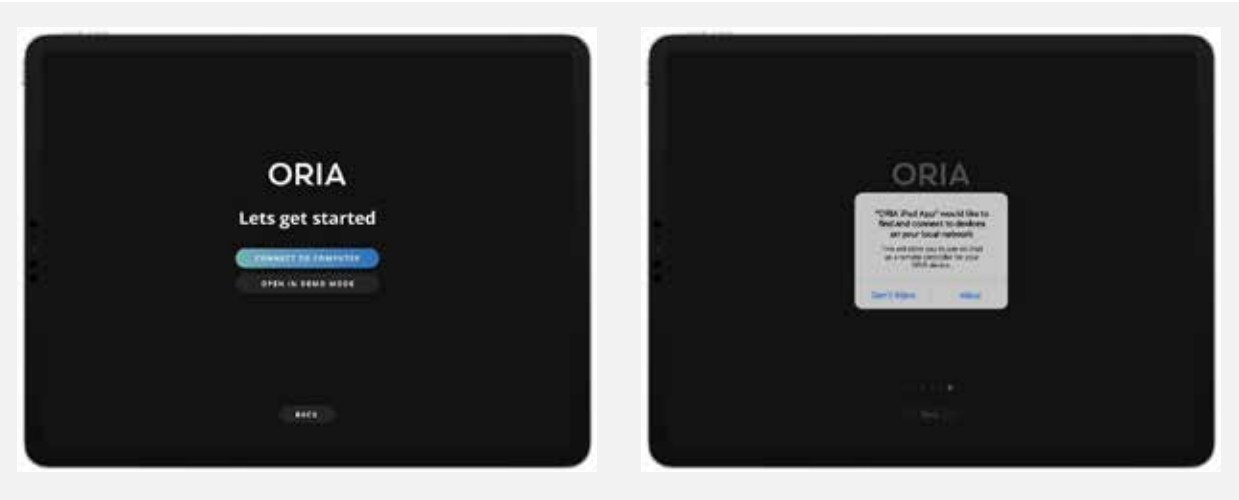
Apple App Store から無料でダウンロードして頂けます。



Initial Setup/初期セットアップ

ORIAをUSB経由でコンピュータに接続し、ORIAデスクトップ・ソフトウェアアプリを実行すると、ORIA iPad リモートアプリに接続して、ORIAを完全にタッチコントロールが可能になります。まず、Apple App Storeを開き、ORIA iPad Remoteを検索してデバイスにインストールします。

初めて iPadアプリを開くと、短いチュートリアルが表示され、その後、アプリケーションがローカル・ネットワーク上のデバイスに接続できるようにするかの要求通知が表示されます。



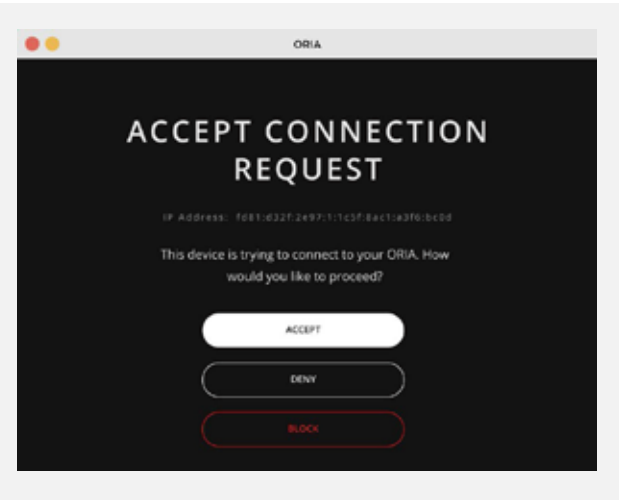
「OK」をクリックすると、次の画面で、iPadと同じネットワークに接続されている限り、「Available Devices/利用可能なデバイス」メニューにメインホストPC または Macが表示されます。



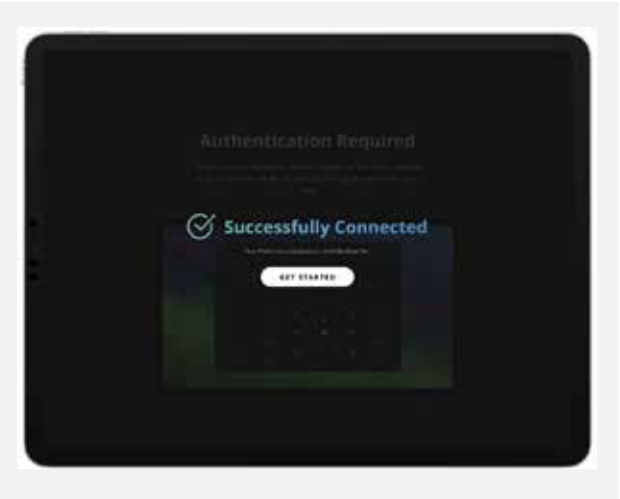
ORIA iPad Remote は、Wi-Fi ではなくイーサネット経由で接続されている場合でも、ORIA ホスト・コンピュータに接続されることに注意してください。ただし、これはすべてのデバイスが同じネットワークを介して接続されている場合に限りです。

リストからホストコンピュータを選択して、接続セットアップを完了します。  
Mac または PC でORIAデスクトップアプリを開き、iPad への接続を受け入れるように求められます。

ORIAデスクトップアプリに、Accept/接続を受け入れるか、Deny/拒否するか、Block/ブロックするかを尋ねるポップアップ通知が表示されます。



「Accept/同意する」をクリックすると、iPad が承認されたリモコンリストに追加されます。  
ORIA iPad アプリに、正常に接続されたことが表示されます。ORIA iPad アプリでORIAが制御できるようになりました。



ORIA の制御を許可したくないデバイスから接続リクエストを受信した場合は、リクエストを拒否またはブロックすることができます。リモートデバイス管理の詳細については、このマニュアルの後半にあるシステムパネルのリモートページを参照してください。

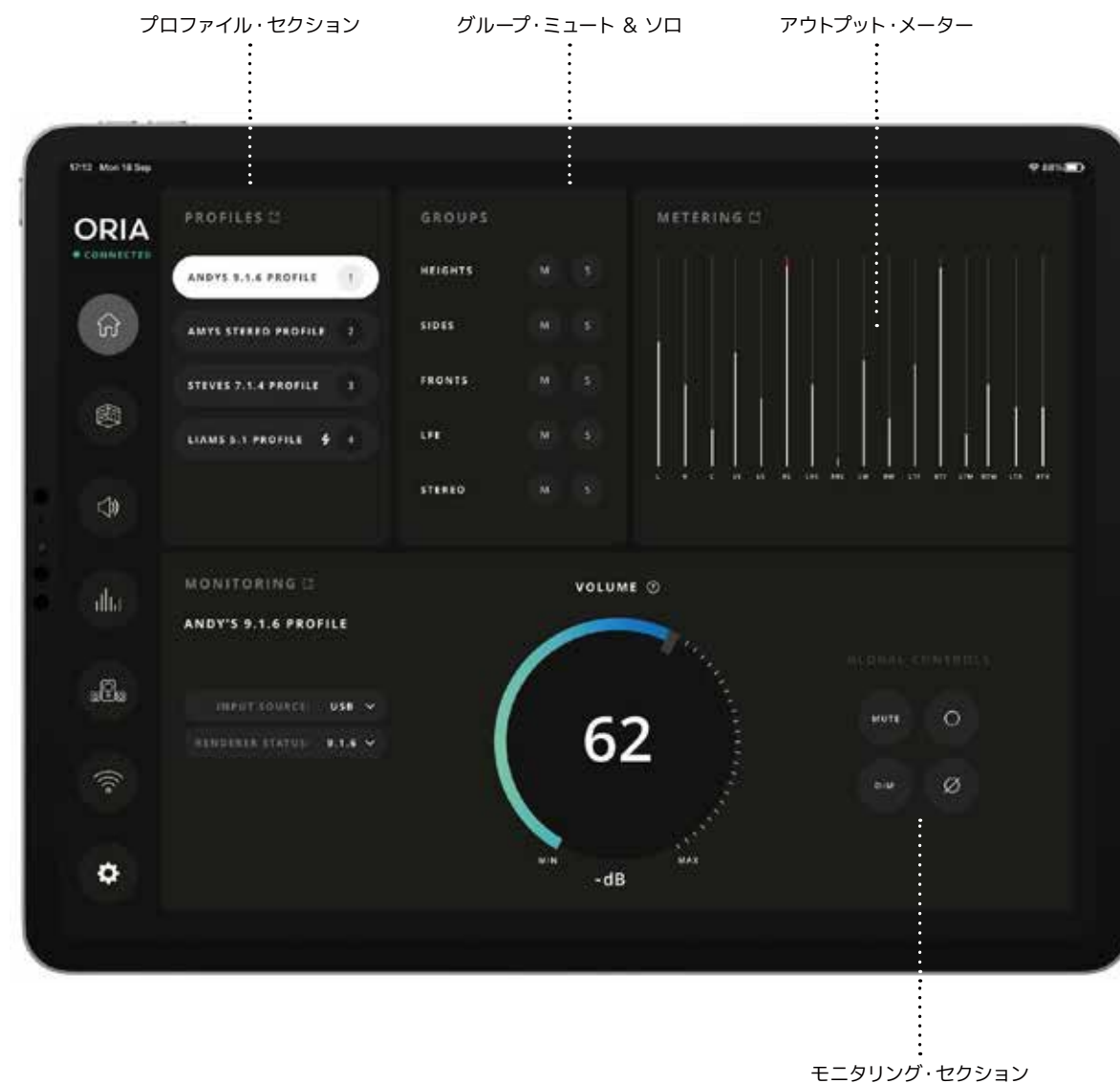


# ORIA iPad アプリケーションの概要

接続すると、ORIA iPad Remote には多数のページがあり、それらを切り替えてORIAのハードウェアのさまざまな側面を制御できます。左側のサイドバーメニューのアイコンで、これらのページを切り替えることができます。以下に、各ページの簡単な概要を説明します。:

## Home -

ホームページは ORIA iPad Remote のメインページで、ORIAの主要なコントロールの概要を示します。これらの機能の概要については、次のページを参照してください。



## Profile Selection/プロファイルの選択

ここでは、ORIAデスクトップアプリで作成したさまざまなプロファイル (4つのお気に入りのプロファイル スロットを含む) から選択できます。プロファイルをタップするだけで、そのプロファイルが現在の「アクティブなプロファイル」になります。

## Group Mute and Solo/グループミュートとソロ

これらのコントロールを使用すると、特定のスピーカーグループをミュートまたはソロにすることができます。Heights/高さ、Sides/側面、Fronts/正面、Subs/サブ、Stereo/ステレオ スピーカーから選択できます。

## Output Metering/出力メータリング

メーターは、ORIA出力の現信号レベルを示します。これらのメーターは、スピーカー キャリブレーション処理前の信号レベルも表示します。タイトルの横にある展開アイコンを押してメーターを展開し、より高い解像度でメーターを表示することもできます。

## Monitoring/モニタリング

モニタリングセクションには3つのメインコントロールがあります。: Input source/入力ソースとRender Status/レンダリング ステータス、Main Volume/メイン ボリューム コントロール、およびGlobal Monitoring/グローバル モニタリング コントロール

## Input source and Render Status/入力ソースとレンダリングステータス

ここで、ORIA がオーディオを取得する入力を調整できます。USB、ADAT、AoIP 入力、または ORIA デスクトップ アプリに含まれる低レイテンシー ソフトウェアミキサーからのミックスのいずれかです。この下にはレンダラーのステータスも表示され、ORIAがスタンドアロンのドルビー レンダラーに接続されている場合、現ダウンミックス フォーマットが確認できます。

## Main Volume Control/メインボリュームコントロール

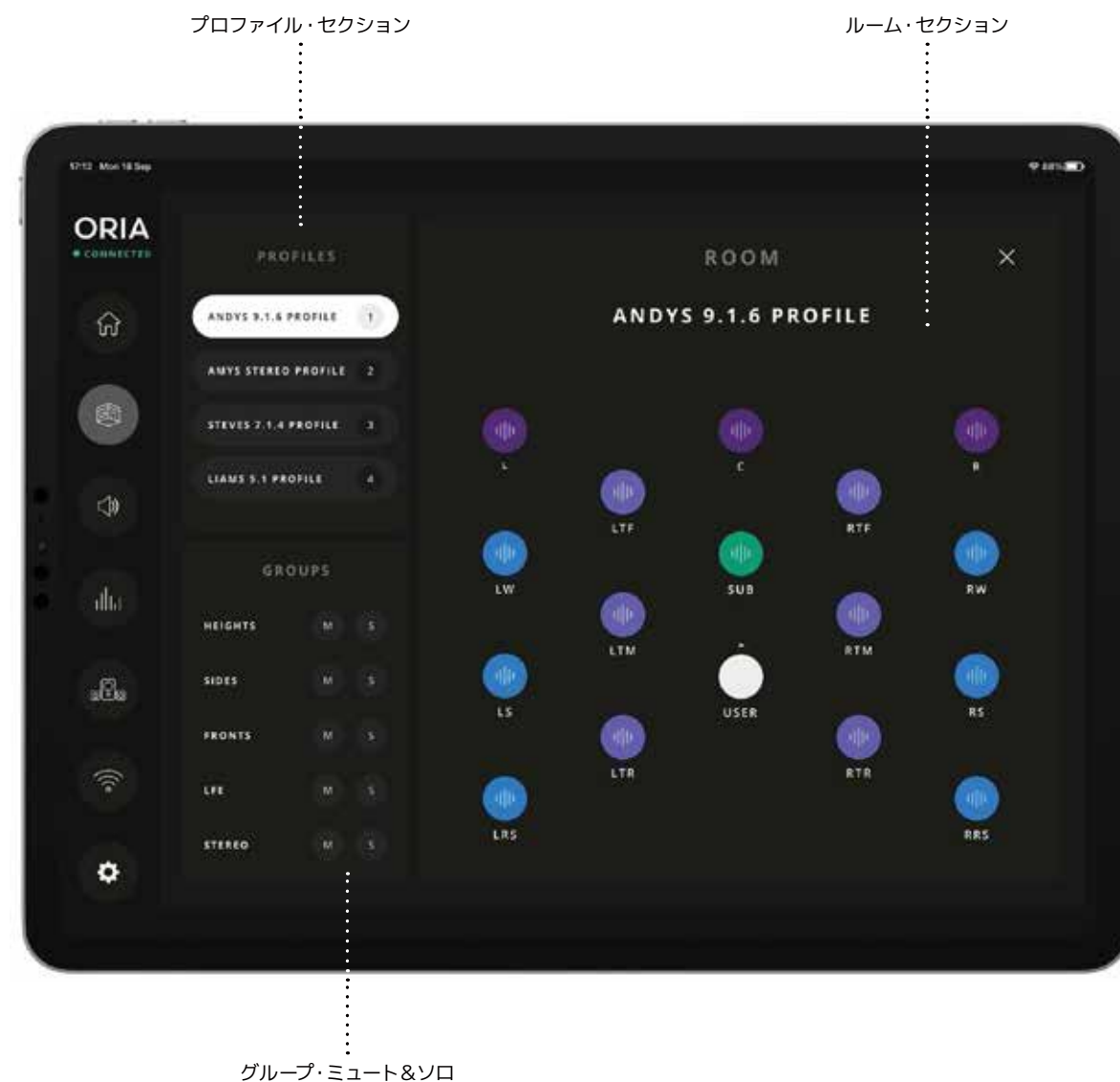
このコントロールは、ORIAのスピーカーへの全体的な出力レベルを制御します。音量が誤って調整されないように、このコントロールはデフォルト設定ではロックされています。レベルを調整できるコントロールをタップするとロックが解除されます。画面上の他の場所をタップすると、音量コントロールは再び自動的にロックされます。この自動ロック動作は、設定メニューでオン/オフを切り替えることができます。

## Global Controls/グローバルコントロール

ここでは、ORIA で利用可能なグローバル モニターコントロールが使用できます。これらのコントロールは、Mute/ミュート、Mono/モノラル、DIM、Phase/フェーズです。これらのコントロールの詳細については、このマニュアルの「ORIA デスクトップ アプリケーションの監視」セクションを参照してください。

# Room -

ルームページでは、スピーカーのセットアップを視覚的に表示して、スピーカーごとにセットアップを制御できます。これらの機能の簡単な概要は、このマニュアルの次のページに記載されています。



## Profile Selection/プロフィールの選択

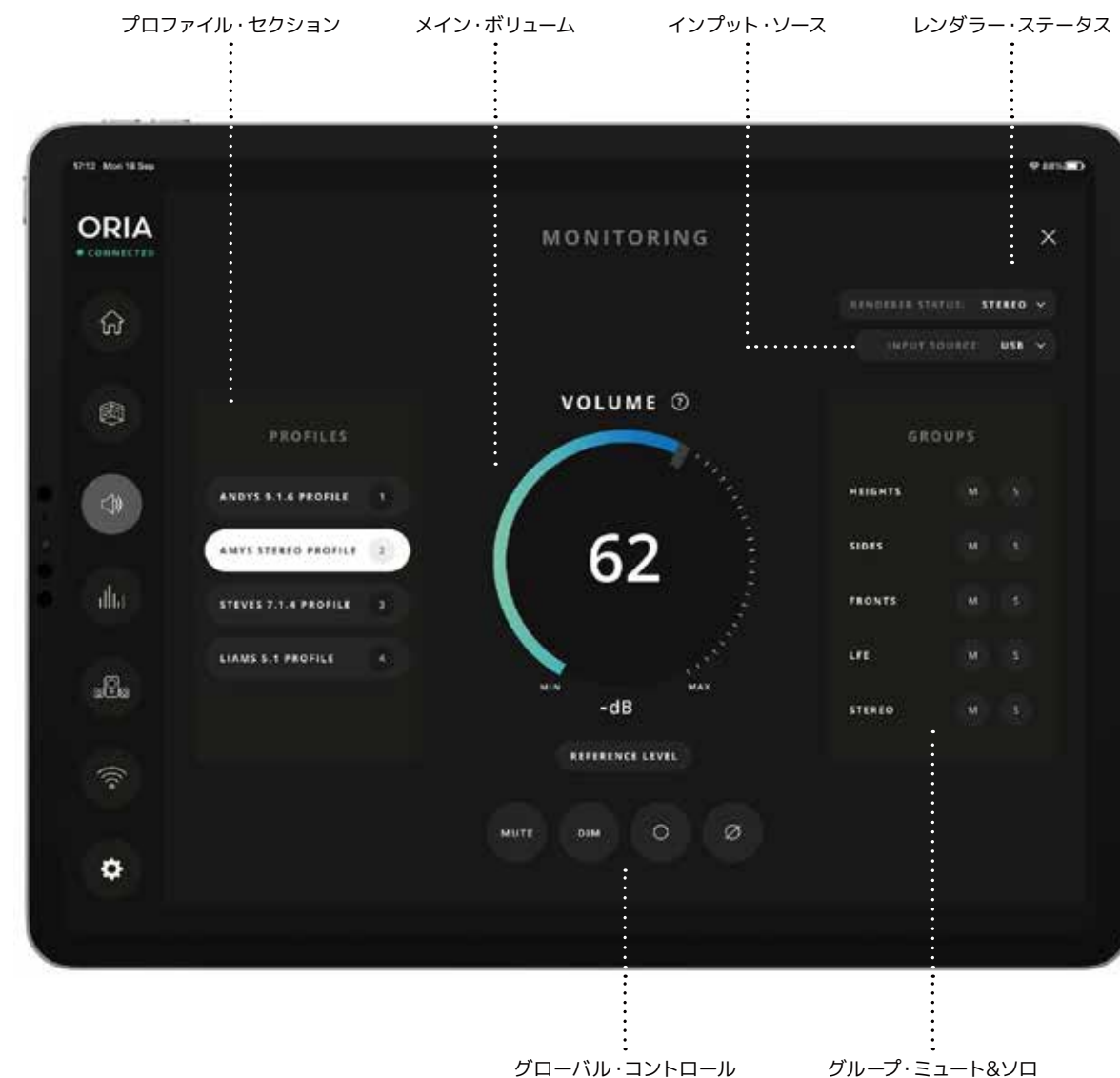
このセクションは、ホームページにあるプロフィールの選択セクションの繰り返しです。

## Group Mute and Solo/グループミュートとソロ

同様に、このセクションは、ホームページにあるグループ ミュートとソロ セクションの繰り返しです。

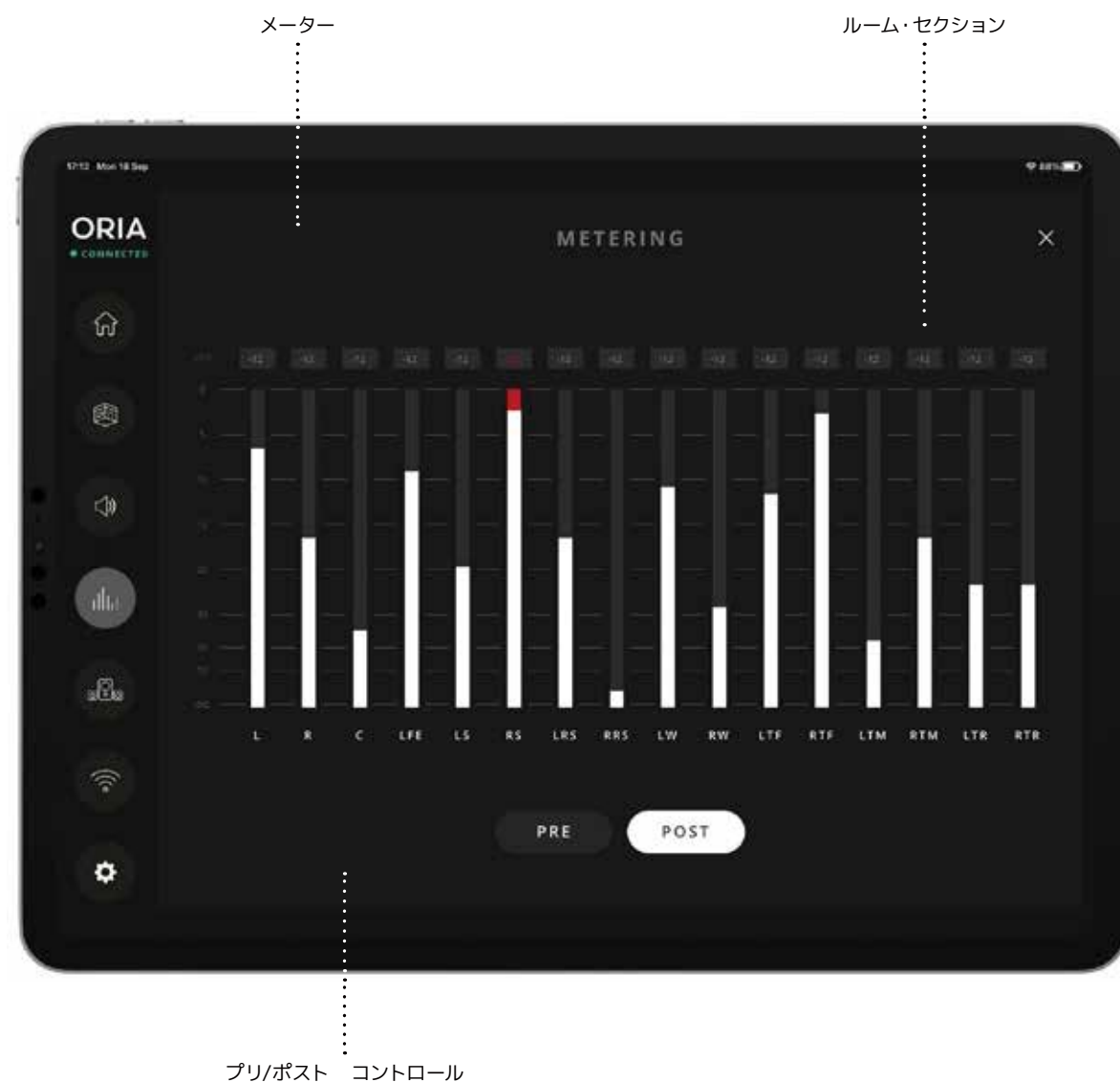
# Monitoring -

「モニター」ページには、ホームページにある「モニター」セクションの展開ビューが表示されます。これらのコントロールの概要については、上記のホームページのセクションを参照してください。



# Metering

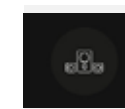
メータリング ページでは、ORIA のすべての出力レベルを高解像度でモニタリングできます。



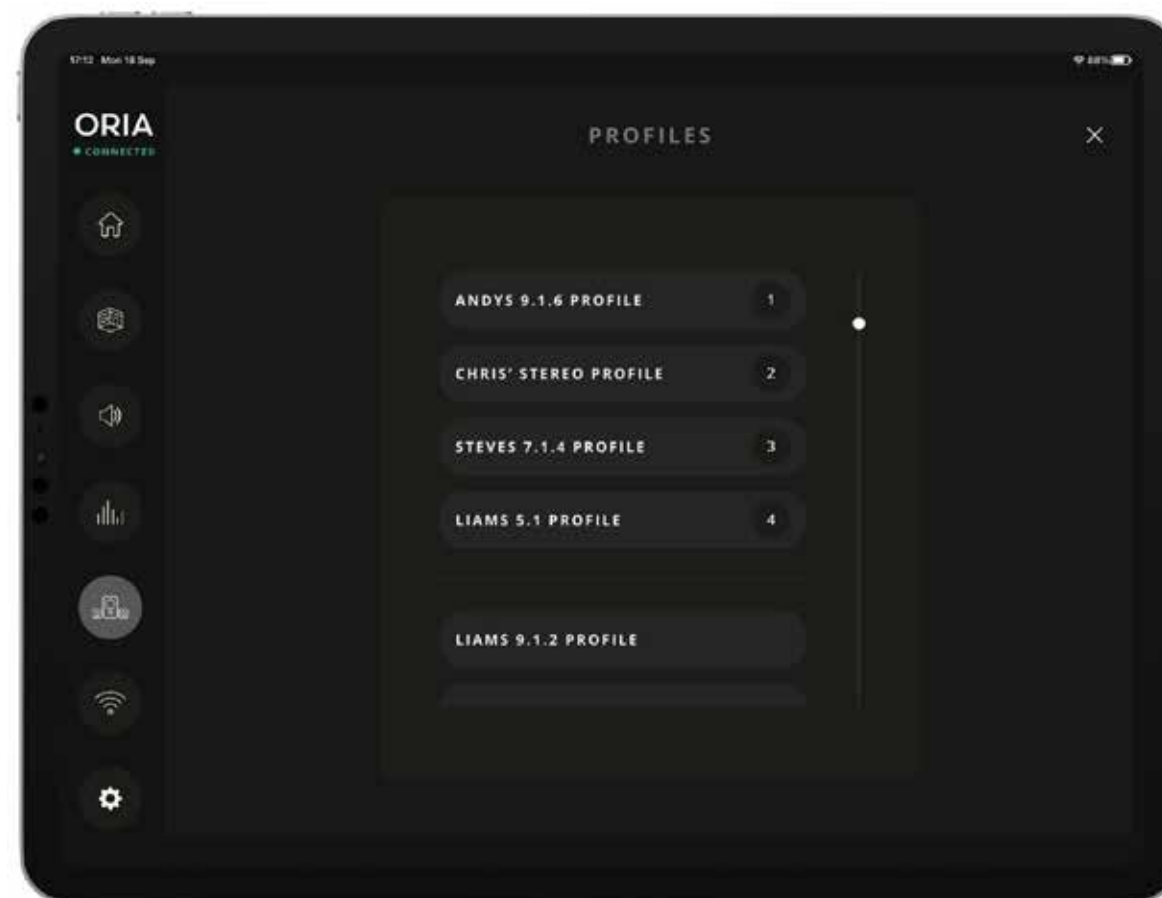
## Pre/Post Control/ プリ/ポストコントロール

デフォルトでは「PRE」が選択されており、DAW出力から ORIAデスクトップ ソフトウェア アプリに入力される信号が表示されます。「POST」は、スピーカー キャリブレーション処理後にORIAから出力される信号を表示します。POSTメータリング モードでは、ボリューム コントロールも考慮されます。

# Profile Selection -

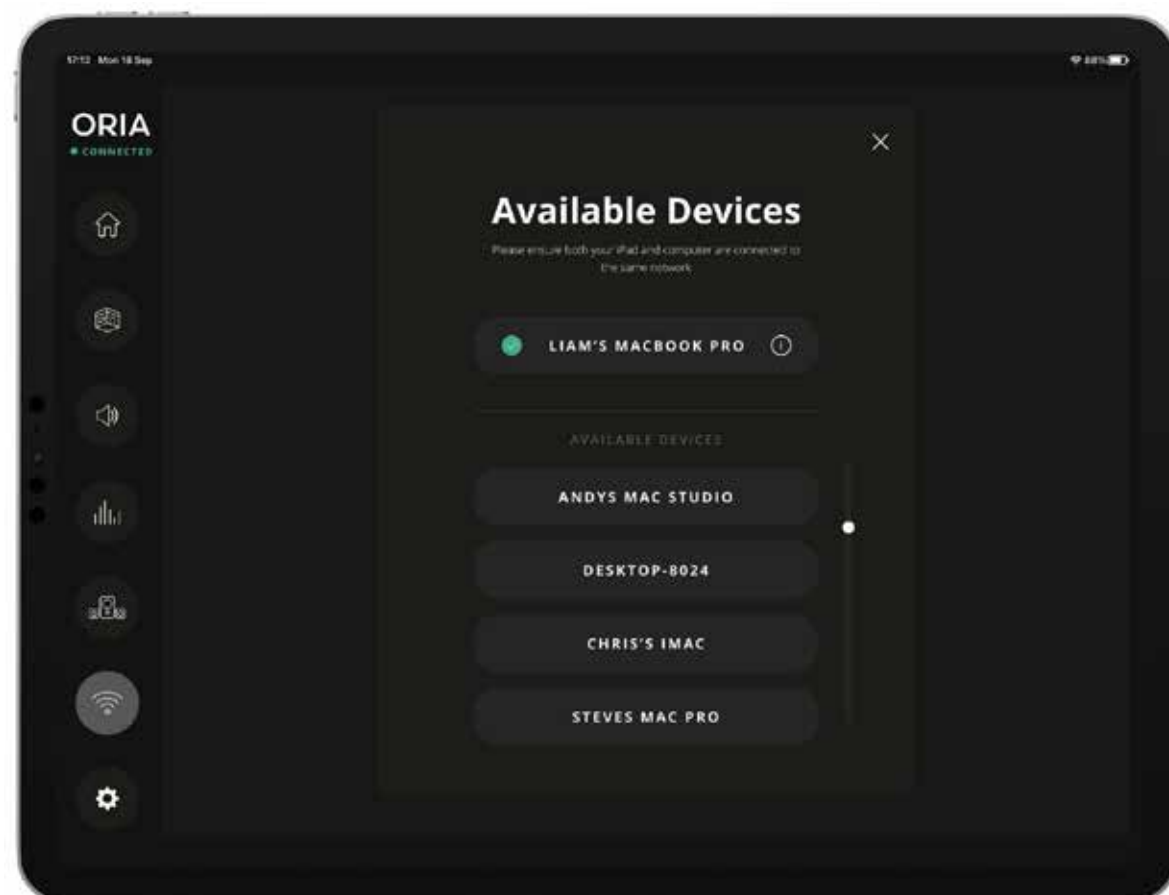


プロファイル選択ページは、他のタブにあるプロファイル選択セクションの拡張バージョンであり、現在アクティブなプロファイルと、4つのお気に入りスロットに割り当てられたプロファイル以外にある他のプロファイルを選択できます。

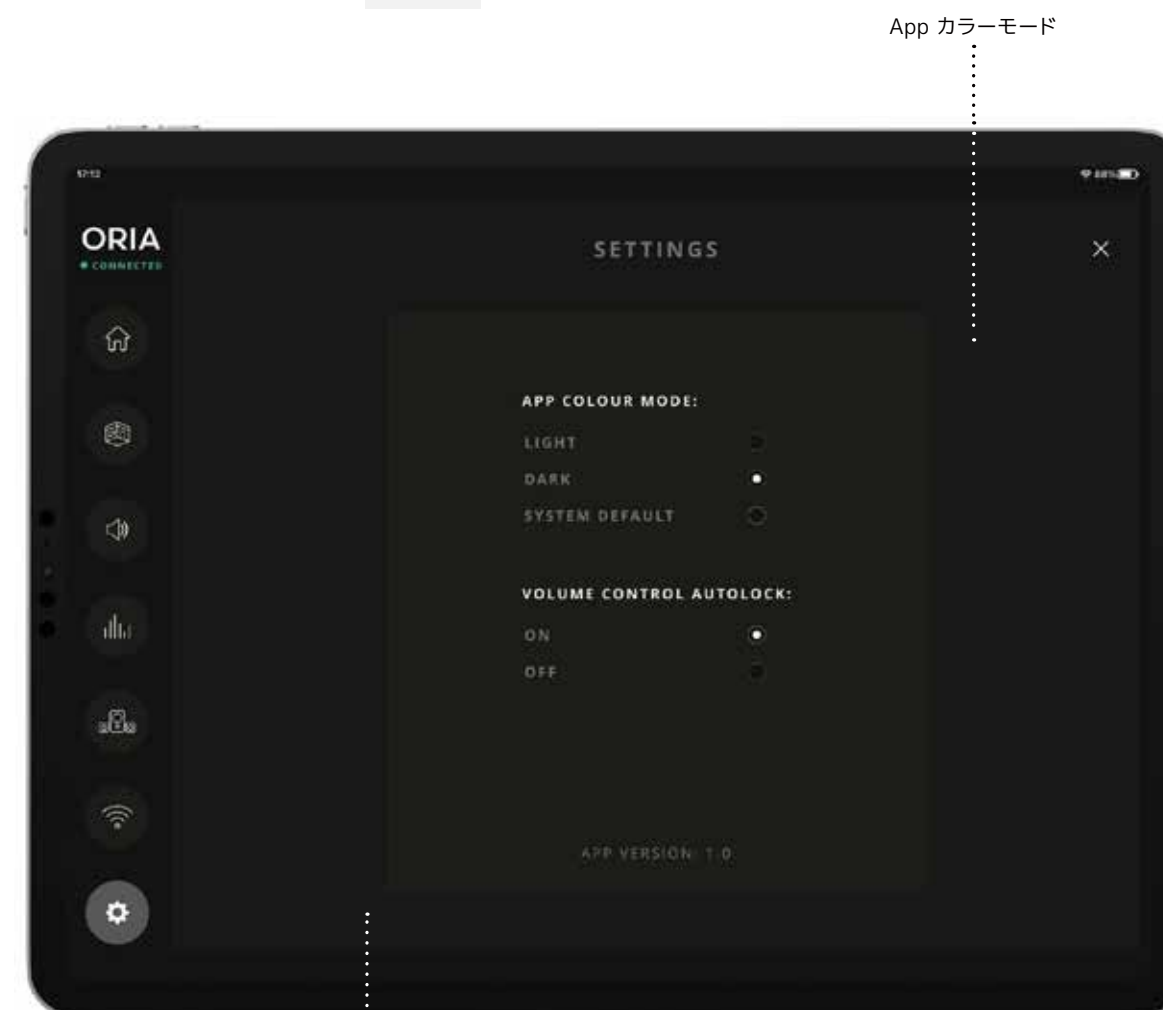


## Connection -

コネクションページは、ORIA iPadアプリをORIAに再接続する必要がある場合、または現在接続されているデバイスを変更する場合に使用します。



## Settings -



ボリューム・コントロール・オートロック

App カラーモード

### App Colour Mode/アプリのカラーモード

ここでは、スタジオ環境に最適なダークモードまたはライトモードで表示するようにORIA iPad Remoteを設定できます。

これをシステムのデフォルトに設定して、ORIA iPadアプリが iPadのグローバル設定に自動的に調整されるようにすることもできます。これは、iPad が時刻に基づいてライトモードとダークモードを自動的に調整するように設定されている場合に便利です。

### Volume Control Autolock/音量コントロールのオートロック

このコントロールは、メインボリュームコントロールのロック動作機能を変更します。

オートロックを有効にすると、音量スライダーの外側をタップすると、調整後に音量レベル設定が自動的に再ロックされます。

オートロックを無効にすると、ボリューム調整後、ボリューム コントロールを再度タップしてロックするまで、ボリュームコントロールはロックが解除されたままになります。

# キーボードショートカット



## Mac

ルームパネルのボタン:

Toggle Solo/ソロを切り替える - Shift + スピーカーボタンをクリック  
Clear all mutes/すべてのミュートをクリア - オプションを押しながらミュートされたスピーカーをクリックします  
Clear all solos/すべてのソロをクリア - ソロになったスピーカーを Option + クリックまたは Option + Shift + クリック

キーボードショートカット:

メーターウィンドウを表示/表示 - Command + Shift + M  
EQ バンドをナビゲート\* - コマンド + 左/右矢印

\*セットアップパネルが表示されている場合のみ利用可能

## Windows

ルームパネルのボタン:

Toggle Solo/ソロを切り替える - Shift + スピーカーボタンをクリック  
Clear all mutes/すべてのミュートをクリア - Alt キーを押しながらミュートされたスピーカーをクリックします  
Clear all solos/すべてのソロをクリア - Alt + クリック、または Alt + Shift + ソロのスピーカーをクリック

キーボードショートカット:

メーターウィンドウを表示/表示 - Alt + Shift + M EQ  
バンドを移動\* - Alt + 左/右矢印

\*セットアップ パネルが表示されている場合のみ利用可能

# 安全にご使用頂くための注意



付属のUSBケーブルからORIAに給電する前に、マニュアル中のインストラクションや注意点をよくお読みください。本機は高電圧で動作はしませんが、電気ショックや火災が起きないように安全な使用法に忠実に従ってください。

故障と思われるような症状が発生しても、本体を開けないでください。  
その際はまず、株式会社HOTONE Japanにコンタクトしてください。

1. マニュアルをよく読んでください。
2. マニュアルを保管しましょう。
3. 『注意や警告』を守りましょう。
4. インストラクションには従ってください。
5. 水の近くや湿気の多い場所で使用しないでください。
6. クリーニングは乾いた布だけ使用してください。
7. ヒーター、ストーブやアンプなど高温を発する場所や機材の上で使用しないでください。
8. 本機に接続されているケーブル類にご注意ください。
9. 本機と使用するアクセサリ等は、メーカーが認可したものを使用してください。
10. 近くで雷が発生していたり、長い期間本機を使用しない時は、コンピューターの電源をお切りください。本機とコンピューターとの接続ケーブルも外してください。
11. 水分がかかったり、故障だと思われる時に本機を開けないでください。

製品の修理は認可されたサービス機関でのみ修理可能です。



# ラックマウント

ORIA には、ケーブルを考慮して 1U の垂直ラックスペースとラックの奥行きが少なくとも 400 mm 必要です。重さは 3.5kg で、スタジオなどの固定設置の場合は、4 本のフロントパネル取り付けネジで適切なサポートを提供します。フロントパネルの奥行きは取り付け位置で8mmです。

ORIA は大きな熱を発生せず、自然対流によって冷却されます。周囲温度が35℃を超える場所では使用しないことをお勧めします。換気はエンクロージャーの両側にあるスロットを介して行われるため、スロット周辺の障害物は取り除いて下さい。

パワーアンプなど、大量の熱を発生する他の機器の真上または真下にORIAを取り付けしないでください。

## 保証情報

### 保証規定

ORIAには、エンドユーザーへの発送日から3年間（36か月）のメーカー保証が付いています。保証は、製造時に使用された材料の欠陥および製造上の欠陥に起因する故障のみを対象とします。

保証期間中、Audientは、正規のAudientサービスセンターに送料を支払って返品することを条件として、故障したユニットを修理または交換します。故障が不正改造、誤用、過失または事故によるものであると弊社が判断した場合、弊社は保証 修理を提供しません。

当社は、上記のとおり、ORIAを修理または交換する責任を負います。当社は追加の責任を負いません。この保証は、この製品の提供者に対してお客様が有する法的権利には影響しません。これらの権利に追加されるものです。

### 保証の制限

この保証は、事故や誤用によって生じた損傷には適用されません。認定サービスセンターによって修理が行われない限り、保証は無効になります。メーカーの指示以外でユニットが改造された場合、保証は無効になります。

この保証は、最適なパフォーマンスを得るために定期的に交換する必要があるコンポーネントには適用されません。当社は、このマニュアルに記載されている以外の方法でユニットが動作することを保証しません。

## 品質保証に関して

本機は、Audient 日本総代理店 株式会社HOTONE Japanが、購入後 3 年以内の品質保証を行っております。修理の際は、購入時の保証書（購入期日及び販売店捺印必須）を提示の上、ご購入の販売店に御依頼下さい。保証書の提示が無い場合、保証内であっても3年以内の保証の対象にはなりません。

本書に記載された文章、図版、作品は、全て「著作権」及び、それに付随する「著作隣接権」等の諸権利を保有しています。弊社では内容を理解することを目的とする使用方法のみを許諾しております。

▲警告:安全のため、特に注意していただくこと

1. 異常があるときは、電源プラグをコンセントから抜いてご購入先もしくは、弊社迄ご連絡下さい。異常な音がしたり煙が出て異臭がした時などは、電源プラグをコンセントから抜いて下さい。
2. 電気ショックを避けるため、本体を絶対に開けないで下さい。内部に触ると感電する恐れがあります。内部の調整や修理は、弊社にご依頼下さい。また、火事や感電を避けるために、湿度が非常に高い場所に置いたり、雨天の際に野外で使用することは避けて下さい。

▲警告:次のような場所での使用はできる限り避けて下さい。

- 湿度の非常に高い場所
- 砂やほこりが多い場所
- 台所、バスルーム、湿気の多い地下室など、水のかかりやすい場所
- 空気の循環を妨げる場所、ヒーターの近くや温度が高い場所

■取り扱いについて乾いた柔らかい布のみを使用して、外装をきれいに保ちましょう。

■サービスについて このマニュアルに記載されていない操作や取扱いは行わないで下さい。記載外の使用方で本機を使用されますと製品不良が発生する場合がありますと考えられます。必ず本書に基づいた使用方で使用して下さい。

記載外の使用法による破損や修理は、保証期間中の機器であっても保証対象外になります。本体の取扱いは慎重に行ってください。万が一、負傷された場合でも弊社では一切の責任を負いません。

修理が必要な場合は、購入先もしくは弊社へご連絡下さい。ホームページの「修理について」からメールのみの対応です。

# AUDIENT

audient 日本輸入総代理店

**株式会社HOTONE Japan**

〒113-0034 東京都文京区湯島2-2-4 JP-BASE御茶ノ水9F

TEL: 03-6820-5823